

大隅志序

自古之風土記沒而以來各國之地理事迹湮乎不明也我祖益軒愛之嘗著本蕃續風土記間者伊藤倣其意有太宰管内志之作蓋述昔時太宰府所管九州二島之事者也凡八十卷每國分爲一部一自持其大隅之部來請序余也年未弱冠素暗文事屢辭而不允其言曰此舉竊取法于尊家先生之續風土記是所以欲子之一言也請勿辭焉且父祖亦命之故不能峻拒焉乃受而讀之夫隅之爲州也境旣在極南遊子少經歷者典籍所載亦不多矣此書也遠取于古籍近考于人言而紀之頗審密庶乎其地理事迹昭然復明於世矣蓋伊藤氏潛思三十餘年于茲而後積成此功矣嗚呼勤哉若夫明徵詳本總序已言之余復何言矣

天保十二龍次于辛丑仲冬日

貝原信進撰

大隅國上

○大隅國

名義

大隅國造

大隅軍人

佛教弘通

國司職

大隅國を
恐く
番上の半
人

〔延喜式〕に西海道大隅國あり、〔和名抄〕に大隅、於保須美とあり、名義は大隅、郡名によれり委くは大隅郡の件に云へし、さて此國、事の代々、書等に見えたるは〔國造本紀〕に大隅國造、纏向日代朝御世治本軍人、同祖初小仁穗帝代者爲日代賜國造初小仁穗は仁穗の誤か日代も日佐の誤なりむか此件、事すべて心得がたけれど古事書なれば引出す〔清寧天皇紀〕に四年八月蝦夷軍人並内付、〔天武天皇紀〕に十一年七月甲午軍人來貢方物、是日大隅軍人與阿多軍人一相撲於朝廷、大隅軍人勝之軍人、事は薩摩國の件に云へし〔持統天皇紀〕に朱鳥二年五月乙酉軍人阿多、同天皇六年閏五月乙酉詔筑紫太宰率河内王等曰遣沙門於大隅與阿多、可有差、同天皇六年閏五月乙酉詔筑紫太宰率河内王等曰遣沙門於大隅與阿多、可傳佛教元亨釋書卷に持統帝六年夏五月傳佛教于大隅阿多四州、大隅極西、傳佛教、傳、區民未聞、眞化、詔、大宰帥河内王遣沙門佛、像經傳、唱佛法、〔職員令〕に壹岐・對馬・日向・薩摩・大隅等國惣智鎮捍防守及蕃客歸化三關國又掌關剗及關契事、〔續紀六卷〕に和銅六年四月乙未割日向國肝坂贈於大隅、始羅四郡、始置大隅國、〔同書七卷〕に靈龜二年四月辛卯大宰府言云薩摩・大隅二國貢軍人已經八歲、道路遙隔去來不便或父母老疾或妻子單食、請限六年相替並許之是は番上、軍人を云なり職員令、廢解には分番

大隅之上(國志)

大隅之上(國志)

華人反す

國司の補

帆匪

田制

華人

上一年爲限とあり番上とはかほる。朝「同書七卷」に養老元年四月甲午天皇御西朝大
 延に登りて守護のつとめをなすを云なり。「同書八卷」に養老四年二月壬
 子太宰府奏言華人反殺大隅國守陽侯史麻呂。是より後に華人の風俗を奏する事度々
 華人一名帳教習歌御上とあり。は華人の祖火開降命の併置。故事の殘れるなるべし。「政事要略二十三卷」に舊記曰養老四年大隅日向
 兩國華人發亂勅以豐前國宇努首男一人爲將軍。祈八幡大神。伐之多殺華人。
 「八幡當道訓」に昔大隅日向兩國の亂を御めんとて公家孫に宇佐八幡大「續紀九卷」に養老六年四月
 丙戌征討陸奧蝦夷大隅薩摩華人等將軍已下及有功蝦夷并譯語人授勳位各有
 差始制太宰管内大隅薩摩多嶺壹岐對馬等司有闕選府官人擁補之。「同卷」
 に養老七年四月壬寅太宰府言日向大隅薩摩三國士卒征討軍賊頻遭軍役兼
 年不登交迫飢寒謹案案故事兵役已後時有飢疫望降天恩給復三年許
 之五月辛巳大隅薩摩二國華人等六百二十四人朝貢「同書十卷」に天平元年七月己
 酉大隅華人等貢調物二年三月辛卯太宰府言大隅薩摩兩國百姓建國已來未嘗
 班田其所所有田悉是墾田相承爲田不動改若從班授恐多喧訴於是隨舊不
 動各令自佃焉。「同書十二卷」に天平七年七月大隅薩摩二國華人二百九十六人
 入朝貢調物八月辛卯天皇御大極殿大隅薩摩二國華人等奏方樂壬辰二國華
 人三百八十二人併祿各有差。「同書十四卷」に天平十四年八月丁酉制大隅薩

國司の官
地
公麻
國司の
情を慰む

伊加麻呂
噴火

櫛戸の調
唐を免す
神島
和氣清麿
の配流
博士醫師
の遷替

摩壹岐多嶺等國官人祿者令筑前國司以廢府物給公麻又以便國稻依常
 給之云云十一月壬子大隅國司言從今月二十三日未時至二十八日空中有聲如
 大鼓野雉相驚地大震動丙寅遣使於大隅國檢問并請聞神命。「同書十六卷」に
 天平十七年十一月庚辰制諸國公麻云就中大隅薩摩兩國各四萬束。「同十七卷」
 に天平勝寶元年八月壬午大隅薩摩壹岐對馬多嶺等司身居邊要稍苦飢寒出舉
 乏稻會不得利欲運私物路險難通於理商量良須務愍宜割太宰所管諸國
 地子各給守一萬束揀七千五百束以資遠戍稍愍羈情。「同書二十四卷」に天平
 寶字七年十二月丁酉伊加麻呂左遷大隅守。「同書廿五卷」に天平寶字八年十二月
 是月西方有聲似雷非雷時當大隅薩摩兩國之堺煙雲晦冥奔電去來云云
 此委くは附於櫛戸事件。「同書二十七卷」に天平神護二年六月丁亥日向大隅薩摩大風
 桑麻損詔勿收櫛戸調庸己丑大隅國神造神島委く云。「同書三十卷」に神
 護慶雲三年九月己丑云解清麻呂本官云有詔除名配於大隅十一月庚寅
 天皇臨軒大隅薩摩華人奏俗伎寶龜元年九月乙丑徵和氣清麻呂廣於備後大隅
 詣京師。「同書三十一卷」に寶龜二年十二月甲戌太宰府言日向大隅薩摩壹岐多嶺
 博士醫師一任之後終身不替所以後生之學業術不進乞同朝法八年遷替以示于
 祿永勸後學許之。「同書三十二卷」に寶龜三年六月乙卯以從五位下中臣習宜

大隅之上(國志)

阿曾麻呂
華人

飢饉

日向の百姓
逃來る

田制

○平安朝
時代

田租を免
す

多嶺島の
遺唐船著
す

權掾

朝臣阿曾麻呂爲大隅守〔同書三十四卷〕に寶龜七年二月丙寅御南門大隅薩摩
 隼人奏俗伎寸三行大住直俊並授從五位下〔同書卅七卷〕に延曆二年正月乙巳饗
 大隅薩摩隼人等於朝堂其儀如常天皇御閣門而臨觀詔進階賜物各有差
 〔同書四十卷〕に延曆十年五月辛未太宰府言豐後日向大隅等國飢〔今本類聚三代格二に
 太政官符云右左大臣官符勅水前之例太宰府言百姓許浪管內國不調唐唯徵他界浪人課
 役由是日向國百姓規避課役逃入大隅薩摩國云々とあり委くは日向國所に引出たり
 國史白五十九卷〕に延曆十九年十二月辛未收大隅薩摩兩國百姓墾田便授口分
 〔同書八十三卷〕に延曆二十五年十一月乙未太宰府言管內諸國水旱疾疫每歲相仍
 百姓凋亡田園荒廢伏望特免田租以濟窮弊但隨損害定年遠近勅大隅薩摩等者
 並免一箇年〔國史八十三卷〕に弘仁四年一月筑後肥前豐前薩摩大隅五國風免民
 租調也〔日本後紀十一卷〕に弘仁四年六月甲申大隅薩摩二國蝗免未納稅
〔今本類聚三代格七卷〕に弘仁十年五月廿一日太政官符云太宰管内大隅薩摩日向多嶺等國島九月
 之內風水之損雖三月後行程之內特聽通計過程之外不應列收自今已後立爲永例不得疎漏
 文粹四卷〕に天長元年九月三日官符云停多嶺島隸大隅國事云〔續後紀九卷〕
 に承和七年四月丙午朔癸丑太宰府上奏遺唐知乘船事菅原梶成等所駕第二船廻
 著大隅國云六月壬戌太宰府馳驛奏遺唐第二船准判官從六位下良岑朝臣長松等
 廻著大隅國〔同書十二卷〕に承和九年七月戊午主殿首正六位下淡海真人豐守爲
 大隅權掾〔同書十四卷〕に承和十一年夏四月壬戌太宰府言大隅薩摩壹岐等國島選

講讀師

博士醫士

吉多野神
の二牧を
廢す

國司

人任職大小是回除灾祈福彼是此不異方今此國皆有講讀師之職修正月安居
 等事而伴國島已無講讀之職還失鎮護之助加以國分二寺雜物觸類頗多既無
 綱紀令誰檢領望請准諸國之例置講讀師者府司商量所陳有理望請准管內
 諸國博士醫師之例府司於觀音寺與彼講師共簡試部內精進練行智德有聞
 堪任講讀終始無變者將補任之者勅講師者依請補任讀師者莫更置之
 但安居齋會之日依延曆二十五年三月格以國分寺次第講之〔同書十五卷〕
 に承和十二年六月癸午太宰府言檢案內弘仁六年七月二十五日格云博士醫師教
 授之勞良有殊別遷代成選並以六考爲期今前壹岐島醫外大初位下藤野勝眞吉
 辭狀云謹案格式內番上者以六考爲限外番上者以八考爲選限眞吉在任
 之日全得六考至于叙位被賜階准據格式恐有訛舛者府加覆審非唯眞
 吉以往之人亦尚然也望請眞吉位記換賜內位自今後大隅薩摩日向壹岐對馬等
 國島博士醫師同准此例者聽之〔又七月丙寅太宰府言云今筑後肥前等國去府之程
 四人准大隅薩摩日向壹岐對馬等國島之例置講讀師一人加以元來此府有講讀生
 試得生及第之輩以將充補一切不任他人〕〔三代實錄四卷〕に貞觀二年冬十月八日廢大
 隅國吉多野神二牧緣馬多蕃息害百姓作業也〔同書十七卷〕に清和天皇貞觀
 十二年正月甲寅朔從五位下布勢朝臣眞繼爲大隅守〔同書三十三卷〕に元慶二年四
 月廿二日散位外從五位下春日朝臣宅成爲大隅守〔類聚國史八十卷〕に元慶八年九

四度公文

櫻島忠信

國司

菅野重忠
流來の唐
人

月五日壬戌大隅守從五位下時統宿禰當世修解申請傳大隅薩摩日向壹岐對馬等國
島四度公文進_二太宰府_一國島雜掌不更向京而此國自天長元年以降六十一年未請稅帳
返抄就_レ中從_二天長元年迄_二貞觀十五年合五十年正稅返却帳所_レ徵勘出殺額二百五
十一萬二千六百九十束自_二貞觀十六年迄_二當年二十一年公文未_レ勘亦其帳未進然則
勘出之殺未_レ知_二幾許_一望請准_二六國雜掌勘辨_一彼帳太政官處分依_レ請即下_二知太宰府_一
〔拾遺和歌集〕に大隅守櫻島忠信〔拾遺〕に大隅守櫻島忠信が國に侍りける時郡司頭白き翁の侍
たけどしと見るに身をひえにける又〔平〕兼盛が歌の詞書に源公貞が大隅へまかりけるに云云と
あるも國守になりて下れるを云なるべし〔宇治拾遺九卷〕に今は昔大隅守なる人國の政をいたしめ給り給
ふ間郡司のしどけなかりければ召にやりていましめんと云て先々のやうにしどけなき事ありけるに云云と
任せて重く輕くいましめたる事ありければ一度にあらす度々しどけなき事ありければ重くいましめんと
けりこゝにめけてつておとせりたりと人の申ければ先々するやうにおしふせてしりかしらにのほりぬたる人し
もとをまうけてつておとせりたりと人の申ければ先々するやうにおしふせてしりかしらにのほりぬたる人し
年老たり見るにうちをせけんこといとほしく覺えたれば何事につけてかを見れば頭は黒髪もまじらずいと白く
ことなしあやまちもなかつたはしよりとふに只老をかうけにいらへなるいかにして是をゆるさんと思ひて
おのれいみじき盗人かな歌はよみてんやといへばかしくしからず候共よみ候ひなんと申ければさと思ひて
といはれてほどもなくわななき聲にてうちいはずはかしくしからず候共よみ候ひなんと申ければさと思ひて
にけるといひければいかにもなきはありて感じ_二拾芥抄_一に大江嘉言大隅守弓削仲宣男赤
染衛門大隅守赤染時用女〔百練抄四卷〕に長元四年三月十四日式部卿敦平親
王被_レ止_二齋務_一是去正月叙位以_二良國王_一擧_二中四位_一而良國非_二王氏_一又先年殺_二害大
隅國菅野重忠_一犯人也改_二姓名_一謀計之故也康平元年閏十二月二十七日諸卿定_二中大
隅國流來_一唐人守道利殺罪名事〔金葉和歌集〕に大隅守源公定〔金葉の詞書〕に源公貞
が大隅守に成て下りけ

源公定
津守有基
〔鎌倉時
代〕
島津氏

源忠國
○桃山時
代
秀吉の九
州征伐

島津義弘

る時月のおかりける夜わかれを惜みて云云と見えたり又〔千載集〕に大隅守任はて登らんとしけるを大
貳きたする事まだしとていめければよめ津守有基すみの江のまつらんとのみなげきつゝ心づくしに年を
ふるかなとある是も國守になりて下れるを云なるべし津守有基すみの江のまつらんとのみなげきつゝ心づくしに年を
りて下れる時の事開たり〔百練抄十四卷〕に建仁元年三月前大隅守成季云云〔東鑑十
七卷〕に建仁三年九月四日島津左衛門尉忠久被_レ收_二公大隅薩摩日向等國守護職_一
是又依_二能員縁坐_一也思久は右大將頼朝公の庶子母は比企の作員が妹丹後の局なり〔同書三十八卷〕に島津大隅前司忠
時〔同書四十二卷〕に寛元元年大隅前司親員島津大隅修理亮久時〔海東諸國
記〕に源忠國丁丑年遣_二使來朝書稱_一日隅薩三州大守島津源忠國國王族親總
丁亥年以_二觀音現像_一又遣_二使書稱_一日隅薩三州大守島津陸奥源忠國國王族親總
治薩摩日向大隅三州事〔大隅軍記略〕に天正十五年四月羽柴中納言秀次卿引_二率
十萬餘騎_一被_レ發_二向于豊後國_一於是島津中務引_二補府內陣_一引_二入于日向國_一秀次卿
軍勢追_レ之中務彌退陣_二于大隅_一城下四月廿二日秀次卿先手與_二中務軍勢_一對陣翌
日中務以_二二萬餘騎_一押_二寄于宮部法印陣_一宮部法印以_二一萬勢_一討_二取島津勢九百餘
騎_一其鐵砲音聞_二于秀次卿_一陣_一依_二是命_一南條小鴨等_一被_レ令_二救_一宮部_一中務引_二上人
數_一入_二于薩摩_一〔南浦文集上卷〕に天正年間前太閤殿下秀吉公出兵馬於西州西州
一統之後殿下錫_二朱印於義弘_一擢封_二大隅州_一以爲_二其履_一矣於_二斯時_一也義弘口不_レ告
人而語_二於心_一曰我島津高祖忠久公者右大將頼朝公第三子而始領_二若耶北越伊勢
伊賀_一且復領_二海西薩隅_一日爲_二七州_一太守爾來日本響_二島津_一者殆乎五百年其國長

大隅之上(菱刈郡)

必志里
○大様
建郡
郷村
菱刈城
蒲生城

〔仙覺葉抄〕に風土記に必志里昔者此村之中在海之洲曰必志里海中洲昔年志一とあり必志下に里字おちたるにや此郡は日向肥後大隅にはさて郡大様は〔續紀十九卷〕に天平勝寶七年五月丁丑大隅國菱刈村浮浪九百三十餘人言欲建郡家許之〔和名抄九卷〕に菱刈郡羽野亡野大水菱刈已上四郷なり〔寛知集〕に菱刈郡云十三村、〔郷村帳〕に菱刈郡湯尾郷川北馬越郷前目曾木郷里村針持郷持長野本城郷荒田溝邊郷鹿崎崎森木成三郷南村帖佐郷山田郷上名下名大山田蒲生郷西浦田男タチ久米久徳丸ヒなどあり、〔シブシ記〕に永祿十年十一月島津貴久公攻隅州菱刈持城横川城同廿四日落城同十一年隅州菱刈陣弘治二年攻蒲生城同三年四月廿日蒲生落城

○羽野郷

〔和名抄〕に菱刈郡羽野とあり、羽野は波奴と訓むべきにや、此郷事いまは詳ならず

○亡野郷

〔和名抄〕に菱刈郡亡野とあり、亡野郷今は詳ならず強て按ずるに長野を誤れるなどにてあらむか今菱刈郡曾木郷長野村あり、〔上田百木云〕亡野は芒野を誤れるにても有むかもしさもあらばス、キノと訓むべし

○大水郷

〔訓義〕
〔訓義〕

〔名義〕
〔所在地〕

〔和名抄〕に菱刈郡大水とあり、大水は於保美豆と訓むべし肥後國玉名郡大水と云もあり名義は水邊などにて負せたるべし、さて此郷も今は詳ならず強て考ふるに〔郷村帳〕に菱刈郡湯尾郷川北又有川などありなほ大水驛の件に云へし

○菱刈郷

〔和名抄〕に菱刈郡菱刈とあり此郷地今は詳ならず〔續紀〕に菱刈村村伴派九百三十余人首領に建郡家とあるも天平勝寶の比なれば部の事にはあらずして實に一村の上を云か、されども郡名を別に書き置れば一郷一里などの上に限れる事にはあらずるべし

○大水驛

〔延喜式〕に大隅國大水驛あり肥後國大水驛と云もあり大水郷同處なるべししひて大水と云名に依て按原郡との間に川あり此川は日向國諸縣郡より出て薩摩國伊作郡薩摩郡をへて海に入る川なり大水は此川のほとりにてもあらむか此州は薩摩國千壽川の川上なり

○菱刈野

〔槍塚家集〕に大隅薩摩の中に菱刈野今は近くことよみしに〔拾遺〕に菱刈野とあるは人のよみてし

春の駒を打出てみれば秋戀しかりのは今は近くありけり
また同伴に

鷹かひし家はいづこと道とひしかりのは今は近くならずや
と見えたり、是も古の菱刈郷のうちにある野なるべし槍塚の子は肥後國川のはとりに住めりし遊女なり

大隅之上(菱刈郡)

伴派建郡
を請ふ

〔所在地〕
千壽川

和歌

〔所在地〕

地頭肥後
功四
〔訓義〕
願成寺
帖佐城

〔正八幡
宮社領〕

地頭山北
種類
〔名義〕
荒田村

○帖作郷

〔東鑑十八卷〕に大隅國云云帖作郷地頭肥後坊良西とあり全文は正八幡宮、件氏字佐と訓ふべし今はチウサと名義は詳かならず、〔南浦文集上卷〕願成寺鐘銘に隅州佐作郷願成寺者前薩隅日三州大守惟新尊君所草創之精廬而運譽上人修念佛三昧之道場也云云、さて〔郷村帳〕に菱刈郡帖佐郷あり、〔シブシ記〕に天文二十三年島津貴久攻落帖佐岩劔城弘治元年攻取帖佐及山田城〔和漢三才圖會〕に加知木一帖佐里脇本里とあり〔九州圖〕を按ずるに南方の海邊にカシキジャウサ山田とならばあげたりさて正八幡宮を鹿島神社と定むる時は正八幡宮は元より桑原郡内なりされば正宮の社領とある三ヶ所の庄も桑原の内なるべきは元よりなり

○荒田庄

〔東鑑十八卷〕に建仁四年十月十七日丙午大隅國正八幡宮寺訴申云云大隅國云云荒田庄地頭山北六郎種頼とあり、荒田直などのすめりし所なるか、荒田直の事は〔姓氏録〕に見えたり薩摩國鹿兒島郡にも荒田村あり全文は正八幡宮、件にひきつべし、荒田は阿良多と訓ふべし、名義詳かならず、さて〔郷村帳〕に菱刈郡本城郷荒田村あり

○桑原郡

〔名義〕

○大様

郷村の數

方位

〔接〕

〔所在地〕

〔延喜式〕に大隅國桑原郡あり、〔和名抄〕に大隅國桑原、久波々良とあり、名義詳ならず古に桑を多く植生したる處にて負せたか、さて郡大様は〔和名抄九卷〕に桑原郡大原・大分・豊國・答西・稻積・廣田・桑善・仲津已上八〔寛知集〕に桑原郡云云三十二村〔郷村帳〕に桑原郡六十二村などあり、又〔地圖〕を按ずるに桑原郡東南は贈於郡にとなり北は菱刈郡に隣り西南は始羅郡に隣り北は〔郡〕に隣りて東西〔里許南北〕許あり、〔常足按〕するに此郡地古は西南は薩摩國鹿兒島郡に隣り今の始羅郡と云物は此所にはなかりしならんそのわけは始羅郡の件に云べし、さて大隅國はもと日向國の内贈於・肝坏・大隅・始羅の四郡を割て置たる國なれば菱刈・桑原の二郡は後に贈於郡などを割て置れたるか又は薩摩國伊作・鹿兒島らの郡を割て此國に加へられたるにてもあるべし

○鹿島神社

〔延喜式〕に桑原郡鹿島神社とあり、此神社事詳ならず〔神社啓蒙四卷〕に鹿島神社或正ハ在ニ大隅國桑原郡又〔諸社一覽〕等にも同趣に見えたり是は強言なり聊も古書ども其證ある事なし、今按ずるに薩摩國に鹿兒島神社あり事〔三代實錄〕に見えたり今國とあるは後に混入したるものなるべし委くは正八幡宮鹿兒島にありて鹿島神社なりと云され延喜式に大隅さて今世の始羅郡と云ものは昔の桑原郡の内にて薩摩國鹿島にとれる處なれば混じたるにてもあるべし

○大原郷

〔名義〕

〔和名抄〕に桑原郡大原とあり、大原は於保波良と訓ふべし〔和名抄六卷〕に薩摩武庫郡原は於保波良など見えたり、名義詳ならずもし大原、真人などの居たりし處などにてても有ひか、此郷の事いまだ考へず〔姓氏録右京諸蕃〕に大原史出白漢人木姓阿留素西姓令貴也

○大分郷

〔和名抄〕に桑原郡大分とあり、大分は於保支多と訓ふべし〔五卷〕に豊後國大分は於保伊名義いまだ考へず大分君などの住りし處などにててもあらむか、大分君の事は〔古事記〕に見えたり其本は豊後國大分より出たるべし、此郷の事もいまだ考へず

○豊國郷

〔和名抄〕に桑原郡豊國とあり、豊國は等與久爾と訓ふべし〔六卷〕に遠江國磐田郡豊國、名義いまだ考へず、さて〔景行天皇紀〕に十二年十一月到日向國其國有佳人曰御刀媛御刀此云彌波迦志、則召爲妃、生豊國別皇子是日向國造之始祖也〔國造本紀〕本紀に日向國造輕島豐明朝御世豊國別皇子三世孫老男定賜國造〔古事記〕に豊國別ありとあるも此豊國を云なるべし、郷地の事はいまだ考へず

○答西郷

〔和名抄〕に桑原郡答西とあり、答西は多布世と訓ふべし〔答をタフの假名に用ふるは志摩國答志郡答志、西をセの假名とせ四比呂世と有り〕、名義詳ならず、此郷地もいまだ考へず〔三代實錄〕に見えたる薩摩國多夫施神も由ある事にはあらぬにや

〔訓義〕

豊國別皇子
國造

〔名義〕

〔和名抄〕に桑原郡大原とあり、大原は於保波良と訓ふべし〔和名抄六卷〕に薩摩武庫郡原は於保波良など見えたり、名義詳ならずもし大原、真人などの居たりし處などにてても有ひか、此郷の事いまだ考へず〔姓氏録右京諸蕃〕に大原史出白漢人木姓阿留素西姓令貴也

○大分郷

〔和名抄〕に桑原郡大分とあり、大分は於保支多と訓ふべし〔五卷〕に豊後國大分は於保伊名義いまだ考へず大分君などの住りし處などにててもあらむか、大分君の事は〔古事記〕に見えたり其本は豊後國大分より出たるべし、此郷の事もいまだ考へず

○豊國郷

〔和名抄〕に桑原郡豊國とあり、豊國は等與久爾と訓ふべし〔六卷〕に遠江國磐田郡豊國、名義いまだ考へず、さて〔景行天皇紀〕に十二年十一月到日向國其國有佳人曰御刀媛御刀此云彌波迦志、則召爲妃、生豊國別皇子是日向國造之始祖也〔國造本紀〕本紀に日向國造輕島豐明朝御世豊國別皇子三世孫老男定賜國造〔古事記〕に豊國別ありとあるも此豊國を云なるべし、郷地の事はいまだ考へず

○答西郷

〔和名抄〕に桑原郡答西とあり、答西は多布世と訓ふべし〔答をタフの假名に用ふるは志摩國答志郡答志、西をセの假名とせ四比呂世と有り〕、名義詳ならず、此郷地もいまだ考へず〔三代實錄〕に見えたる薩摩國多夫施神も由ある事にはあらぬにや

○稻積郷

〔和名抄〕に桑原郡稻積とあり、稻積は伊奈豆美と訓ふべし〔薩摩國河邊郡にも稻積郷あり二月甲申令太宰府修三野・稻積二城とあるは薩摩のかたなるべし彼件に云るを考ふべしさて是をイナヅミともも事は〔古歌〕に秋の田のいなづみの里とあるによれり、此郷の地事もいまだ考へず

○廣田郷

〔和名抄〕に桑原郡廣田とあり、廣田は比呂多と訓ふべし〔薩摩國武庫郡廣田へ比呂多淡路國廣田など、名義は田地の廣さに依て負せたるべし、此郷の地もいまだ考へず

○桑善郷

〔和名抄〕に桑原郡桑善とあり、桑善は久波衣と訓ふべし〔又クハヨシともよむべし〕、名義は桑のよく生立處などにて負せたるべし大隅・薩摩は桑麻多く生ずる土地なる事古き物に是彼見えたり、此郷地事もいまだ考へず

○仲川郷

〔和名抄〕に桑原郡仲川〔用中津川三字地名必二字に定とあり、仲川は那珂都加波と訓ふべし、名義は川の有る處にて負せたるべし〕、〔鄉村帳〕に贈於郡躰郷中津河、吉松郷中津川あり是等なるべし〔東鑑十卷〕に建長二年三月一日開院造替、雜掌地一本中津河入事上一件どしに云へるが如し

稻積城
和歌

〔名義〕

〔訓義〕

〔名義〕
中津河
中津河入
道

日本武尊
熊襲平く

夏五月悉平熊襲國云云 二十五年冬十月遣日本武尊令擊熊襲云云 十二月到熊襲國因以伺其消息及地形之險易時熊襲有魁帥者名石鹿文亦曰川上梟帥一悉集親族而欲宴於是日本武尊解髮作童女容以密伺川上梟帥之宴時仍劍佩細裡入於川上梟帥之宴室居女人之中川上梟帥感其童女容姿則携手同席舉杯令飲而戲弄于時也更深人闌川上梟帥且被酒於其童女容姿則携手同劍刺川上梟帥之胸未及之死川上梟帥叩頭曰且待之吾有所言時日本武尊留劍待之川上梟帥啓之曰吾是國中之強力者也是以當時諸人不勝我之威力而無不從者吾多遇武力矣未嘗有若皇子者是以賊陋口以奉尊號若聽之即啓曰自今以後號皇子應稱日本武皇子言訖乃通胸而殺之故至于今稱曰日本武尊是其緣也然後遣弟彥等悉斬其黨類無餘唯同二十八年奉二月日本武尊奏平熊襲之狀曰臣賴天皇之神靈以兵一舉頓誅熊襲之魁帥者悉平其國是以西洲既謐百姓無事仲哀天皇紀云云 二年三月熊襲叛之不朝貢天皇於是將討熊襲國同八年宮中九月詔群臣以議討熊襲時有神託皇后而誨曰天皇何憂熊襲之不服是誓之空國也豈足舉兵伐乎云云 天皇猶不信以強擊熊襲不得勝而還之「神功皇后紀」云云 三年三月遣吉備臣祖鴨別令擊熊襲國未經決辰而自服焉「續紀五卷」云云 和銅三年正月庚辰日向軍人會君細麻呂教諭

鴨別
熊襲服す
會君細麻呂

熊襲叛す

於君多
理志佐
莫武後
軍人に位
を授く

軍人俗伎
熊襲國

○大隅
郷城

荒俗一馴服聖化詔授外從五位下「同書十三卷」廣德元年(天智十三年)月庚辰降伏軍人贈於君多理志佐「景行四年」云云「同書十五卷」云云 天平十五年七月庚子天皇御石原宮賜饗於軍人等授云云 外從五位下會乃君多利志佐外正五位上外正六位上前君平佐外從五位上佐須岐君夜麻等久賣外正五位下「同書十七卷」云云 天平勝寶元年八月云云 癸未詔授外正五位上會乃君多利志佐從五位下外從五位下前君平佐外從五位上外正六位上會乃縣主岐直志自羽志加禰保佐々並外從五位下「同書三十卷」云云 神護慶雲三年十一月庚寅天皇臨軒大隅薩摩軍人奏俗伎云云 授會公足麻足從五位下一などもあり「古事記」傳云云 熊襲國と云るは後の日向の南半より大隅國薩摩國までをかけたる上代の大名なりかあり「景行紀」に熊襲とあるも是なり也「續紀」に和銅六年云云と見え又「書紀」に日向とありは大隅國の地は古は日向國内にて會と云ふも日向の内に別熊襲を一國とせるは如何と思ふ人も有べけれど其(ソ)はなほ精しからず其故は日向と云ふ名は上に引る如く景行天皇の十七年に始まりて其時はなほ肥前國内の地名にこそ有りけり一國の大名とも聞えず熊襲と云ふ名は同天皇の十二年に既に見えたれば上代の名にして今の日向の南半より大隅國薩摩國までをかけたる大名なりしをやは後に至て其大名は廢て熊襲の日向と云ふ名ぞ其あたりまで大名にはなれりける故本の會國てふ名はわづかに残りて其も日向の中に入て後に一郡の名になりてありしを和銅六年にそのあたりの四郡を割て一國と建られしなれば大隅國も本は熊襲國内なりしが中郡大隅事は「和名抄九卷」に贈於郡葛例志摩、同用阿氣方後人野已上五「寛知集」に會於郡云云六十三村「郷村帳」に會於郡恒吉郷島字永郷次田(ス)末吉郷山崎五十丁南郡中之財部郷下財部福山郷例河敷根郷(上)之(タ)木大谷(タ)新野久美田(ノ)ク(ト)下井(ト)上井(ト)向底(カ)ウ(小)濱(住)吉(内)山(清)水(郷)川原(山)之(路)弟(子)丸(會)於(郷)田(口)大(久)保(持)松(日)當(山)郷(嘉)例(河)朝(横)川(郷)名(中)之(名)栗(野)

大隅之上(熊襲郡)

方位

廣袤
霧島宮の
大宮司職

神島

造島神

櫻島權現

島民鬼を
崇拜す

大汝神社
拜殿の額

郷米永・幸田・塔之原・恒吉松郷鶴丸・中津河・川市成郷市などあり、贈於郡東は日向國諸

縣郡南は大隅郡西は海を隔て薩摩國に隣り北は菱刈郡に隣り東西十四五里許南

北六七里許にして國中第一の大郡にして美地なり、「霧島神社舊記」曰宇多天皇皇

子篤房親王五世孫正四位上中將民部卿篤如治安元年三月補任霧島宮大宮司職

爲辨備神供調新嘗祭下向於大隅國贈於郡之稅所介即篤如の後胤也

○大穴持神社

「延喜式」に贈於郡大穴持神社とあり、大穴持は於保奈毛知と訓べし此神事神代

見たり大汝ともありさて「續紀廿七卷」に天平神護二年六月己丑大隅國神造紀などに多く

大も名持も尊稱なり此神島は今櫻島の事なる由「櫻島炎上記」に見えたり

有「海造」島其名曰大穴持神至是爲官社「類聚國史十卷」神祇部に弘仁五年

二月乙酉大隅國會於郡造島神預幣帛例ともあり、さて此神社事は「櫻島炎上

記」に櫻島頂に權現社とてある是を山主と稱す、「俗傳」に此神鬼を愛給ふ是に

依て島民鬼を見る時は是を拜む平生其名を諱て敢ていはず云とある是なるべし

鬼を愛給ふ事も大穴持神に由あり大汝神鬼を愛し給ふ事は「古又「守麻呂云」大隅國

大汝神社と云今桑原郡國分郷上井村にあり、拜殿額に大穴持命とありて其神主

「谷氏云」此額は先年近衛殿下の書で給ひしなり、「薩摩」士江川氏云「今國分郷小

大已貴神
社造島
小島

「名義」
宮浦明神
所在地
廻城

「名義」

村有三大已貴神社今俗稱遠南牟地是也、又「或人云」國分郷に神造島と云處あり今は小島とも又宮瀬ともいふ、守麻呂と云人何國人といふことをしらす、「彦山僧立辨云」して甚さがしき島なり人家なし周圍十町許にして陸をはなる事十丁もあるべしなほ次なる櫻島の件をも考合すべし

○宮浦神

「延喜式」に贈於郡宮浦神社とあり、宮浦は美也能宇良と訓べし宮浦と云は國々に多き地名なり、御

名義は地名によれりと聞ゆ、さて「彦山僧立辨云」贈於郡福山町中に社有て正

一位宮浦大明神と云額をかけたなり、社は東南の間に向て立たり又或説に宮浦神社

は贈於郡福山郷宮浦にあり、福山郷は今の牧の「シブシ記」に永祿四年日新入道攻

隅州廻城七月十二日右馬頭忠將戰死廻城は今福山の事也

○韓國宇豆峯神社

「延喜式」に贈於郡韓國宇豆峯神社とあり、韓國宇豆峯は加羅久爾乃于圖美禰と訓

べし、御名義韓國は「書紀」に管安之空國とあるなど同意にて後に地名となれるを

神御名にも負せたりと聞ゆ又は韓國より來たれ神などにて負せたるにても有むか「西後國六郷

宮是也とありさらば「延喜式」前國田川郡韓山「舊記」に仁開菩薩母ハ陳王ノ女聖武帝ノ時垂跡日本隴州八幡

國息長大姫大目命神社と同例なり宇豆は未詳さて「神代三陵考」に宇佐記曰欽明天皇三十

二年二月癸卯豐前國宇佐郡菱形池上小倉山邊有神託三歲兒告大神比義曰辛國

城八流之幡降辛國地名在二大我日本王十六代譽田天皇廣幡八幡麻呂也「國柱謂」

辛國 正八幡

〔祭神〕 宇豆峯神社
所在地
カクノ
ノ社
檢校川

天孫降臨

辛國地名者今大隅嶽嶽郡於郡國府郷上井村之地也延喜式云韓國宇豆峰神社在所蓋辛國城有八流之幡降瑞因以稱正八幡云〔宇佐宮舊記〕に靈行ノ事、辛國宇豆高島、辛國乃城仁始天降留八流乃幡波吾靈奈利、私曰辛國者大隅國也太神之御靈奇瑞根本地也正八幡者陳王之娘之所生故垂跡格別也是和銅五年之垂跡也〔同書〕に辛國城八流之幡下、辛國地名在大隅國會於郡とあり、此説に因て考ふるに韓國宇豆峯神社と云は正八幡宮ノ事なりさねども正八幡宮は初に云るが如く分郷にあらず〔鹿島〕人江川氏云宇豆峯神社在贈於郡國分郷上井村祭神天兒屋根命也〔鹿山〕宇豆峯神社は上井村に在て一村の産神たり里人はカクノ社と唱ふるなり是はカラクニを唱へひがみたるものなるべし此社は檢校川の川上にあり檢校川は俗にスネソリ川と云ふなりかゞ有むなほよく考ふべし

○襲之高千穂峯

〔書紀〕に高皇產靈尊以眞床追衾覆於皇孫天津彦火瓊杵尊使降之皇孫乃離天磐座且排分天八重雲稜威之道別道別而天降於日向襲之高千穂峯矣既而皇孫遊行之狀也者則自穗日二上天浮橋立於浮渚在平處而齋宮之空國自頓丘一覓國行去云云、一書に高皇產靈尊以眞床覆衾襲天津彦國光彦火瓊杵尊則引開天磐戶排分天八雲以奉降之于時大伴連遠祖天忍日命師來目部遠祖天穗津大來目背負天磐觀臂著稜威高靴手握天槍弓天羽々矢及副持八

噴火 霧島山

韓生村

目鳴鏑又帶頭槌劍而立天孫之前遊行降來到於日向襲之高千穂穗日二上天峯天浮橋云云又(一書)に于時降臨之處者呼曰〔風土記〕に皇祖真能忍若命日向國贈於郡高茅穗穗生峯爾天降坐氏云云〔風土記〕説は(神代)〔塵添瑤瑛抄〕に日向國風土記曰皇祖真能忍若命日向國贈於郡高茅穗穗生峯二天降坐天云とあり、襲之高千穂は曾乃多加知に云るか如し千穂ノ事は日向國白杵郡高千穂の件に引出たるを考ふべし、山城國風土記に日向、曾之峯天降坐神加茂建角身命云云〔續紀卅九卷〕に延暦七年己酉太宰府言去三月四日戌時當大隅國贈於郡曾乃峯火炎熾響如雷動及亥時火光稍止唯見黑煙然後雨峯下五六里沙石委積可二尺其色黑焉などあり是則霧島山を云なり〔和爾雅〕に大隅(霧島)とあり彼山峯二に別れて西なるは大隅國贈於郡につき東なるは日向國諸縣郡につけり高千穂峯は日向國白杵郡に在ていたく處違へるに似たれど古傳の趣二方にあるやうに聞えて定めがたければ皆その處々に別出て後考をまつになむ此事は古事記傳十卷にも論はれたり神代紀の大名と定めたる後の言を以て語傳へたるなりさて東霧島方にも日向國とあるは日向を以て彼わたりかになり行て西の方のみ曾乃峯に入りたれば東方別に日向國諸縣郡の件に引出たりされども曾といふ名は別正襲とあるは皆此件に引出たるなり

○穗生峯

〔風土記〕に贈於郡高茅穗穗生峯云とあり、穗生は久志比と訓むべし〔書紀〕に穗日二上云云とあり〔塵添瑤瑛抄九卷〕に穗子事日向國韓生村と云處あり此處木穗子木の生たりけ

名義
加陸武別

楳生村の
所在
兜跡

神寶物

炎上

宮寺新狀

る歟いかゞ楳生と書るは木楳樹の生たるにはあらず栗の生たる意なり此處に小栗
多し昔加陸武別と云ける人韓國に渡りて此栗を取て歸りて殖たり此故に楳生村とは
云「風土記云」俗語謂栗爲區兒然則韓の楳生と云は蓋云韓栗林歟と云り楳の
字通二兩物一歟と見えたり、楳生峯は則高千穂事とは聞えたれど韓楳生村と云は其
麓などに在る里なるにやいまだ詳ならず、贈於郡栗野郷と云もあれど彼山の近きわたりなどには
あるも今の如くさだかに國、界定まりて後、郡にもあらざれば彼國の白杵、郡の内、事なるべし又、一ツおもふに
韓、宇豆峯といふ名も此楳生に由ある事にて有むかなほ、三、里あり社より、栗野郷なり、
云なるべし贈於郡、内にて霧島山の麓なり社より栗野郷にて三、里あり社より、栗野郷なり、
て昔より兜跡と云事をせり七月四日、日の比なり郷士甲冑を帶しておどりかなす事なり、
多し。

○正八幡宮

「神鏡沙汰文」に寛知二年十一月廿三日官符云大隅國正八幡宮損失神寶物、宜仰
太宰府注神民解狀色目早令修造、但此中於神王面形一枚者依稱往古靈物難
測造否之旨歸先仰法眼清圓相尋子細經言上右文薄之所注不詳今所載于
狀右之准據例著或有夢告奉造、立或稱靈物無造云云、「中右記」卷に寛治六
年二月十五日有陳定是去年十二月大隅國正八幡宮寶殿燒亡之事也、「東鑑十八
卷」に建仁四年十月十七日丙午大隅國正八幡宮寺訴申事、被經沙汰是右幕下、
御時掃部入道寂忍爲正宮地頭之處宮寺依申子細被停止其儀訖、其後又

造營
祭神

大比留女

八幡
時

華入反抗
華風詩

三箇所被補三人地頭之間造宮之功難成之由云仍今日所止彼地頭職等
也帖作郷地頭肥後坊良西荒田庄地頭山北六郎種頼萬得名地頭馬部入道淨賢
云云廣元朝臣奉行之、「百練抄十六卷」に建長五年四月卅日軒廊御卜正八幡宮
炎上事内大
臣已下參入之五月八日石清水一社奉幣也大隅國正八
幡宮炎上事左大臣已下參入之十月十
日乙卯大隅國正八幡宮造營補入並事始日時定也中納言資季卿已下參之、「神社啓
蒙四卷」に神祇抄曰大隅國正八幡火出見尊也與宇佐八幡不同宇佐記説曰當
宮陳大王之娘所生子也名八幡云々繁多按中華書陳王娘貶倭國之事未
見焉仍今不取此説也など見えたり、「西宮訓」に震日國隣大王娘大比留女七歳の時朝日の
光胸に間にさし入て御懷妊有皇子を産給ふ王臣を怪
て空船に乘せ奉て流す時船の著きたらむ處を所領とし給へとて大海に浮へ奉るに日本國鎮西大隅、
着給ひけり其太子八幡と號奉るより御船のつきたる所を八幡時と號は是體天皇の御代なり大比留女、
前國片杉山へ飛入給ひて後には香椎聖母大菩薩と現し給へり爰に大隅國に留て正八幡と現給へり爰に大隅、
國に住人華人、云もの敵心をなして八幡を遣却し奉むとて陳を張て争戦すといへども華人打負て頭をきらる
、故に惡縁と成て世難を致すに因て御幸の所には二百人の兵騎隨奉る華人を討取り給ひし御、
鐘か華風鐘と名づく實の長さ八尺廣さ六寸なりとありこは大かたうけかたき事どもなり、
卷」に九月十二日肅詔大隅正八幡宮謹賦小詩以代青詞

千年、廟食古祠深、家國競傾崇仰忱、不用周人論戰栗、宮前松柏翠森々、
和玉洞翁顯應神天皇廟二首

神威無古亦無今、惟德偏依誠意深、默禱燒香明月夜、松花吹露酒衣襟、
國得仁君莫似今、及民德澤海波深、數篇詩律清平調、唱出吾翁雪月襟、

所在地

森在大隅郡と云り〔玉勝間〕には風森は紀伊國にある山見えたり彦山僧立辨云贈於郡歎木森の東二里ばかりに風森ありと云へり地理の事今少し委しく記しておかまほしきわざになむ

○日吉神社

所在地

〔舊記〕に曰大隅國贈於郡清水郷日吉神社云とあり、〔薩摩人鮫島氏云〕清水郷日吉山王社者在臺明名竹林所祭大己貴神也別當臺明寺號竹林山衆集院天智天皇

祭神

臺明寺

青葉竹

文書

古鐘

古鐘

古墓

寺料

所在地

藥師如來

宗派

之勅願所而貢青葉竹之地也、傳來倫旨下文及寄附田解狀等文書及數百通初藏之官庫享保元年又返藏神庫今有七軸於其中正和二年十月廿七日大介兼稅所藤原敦胤有獻長燈料足田之書又元德二年六月朔大介兼稅所藤原敬直有獻燈油之文、又社傍有古鐘天慶九年所鑄也其後正嘉元年十一月十九日守護代左右衛門尉藤原朝臣重頼改鑄之由記之、又名竹林中有古墓不知何人、又往古青葉竹貢進之節漬府中鏡池國之大姓稅所介守護之達京師云とあり、此社事なほよく考ふべし

○國分寺

〔主稅式〕に大隅國國分寺料二萬束とあり、此寺事いまだ詳かならず國分二寺は國府の邊にある例なれば必國分郷府中村の内にあるべし、〔土人云〕贈於郡太平山國分寺藥師如來十一面の堂あり禪宗なり

○永徳寺

〔南浦文集上卷〕に隅州國分莊永徳寺地藏堂再興幹縁文開昔隅州國分莊者諸大薩埵之古道場也相傳此地昔年有洪水之害人皆作魚矣丁斯時也諸大薩埵亦面貌枯瘁而流入大海諸大伽藍亦梁棟傾斜而化鳥有去矣及其水之涸也一尊地藏薩埵不知自何地何山而來幸得解脫洪水之難止於是處居民之有其志者即構一字之茅堂安置薩埵因寺名永徳有一比丘修香火業比丘去來堂宇至今壞在民村是亦居氏雙遺者之所口傳也未知是否爾來經其歲月者不知幾百回矣慶長辛丑之夏島津華胃龍伯尊君相攸欲營華第於此地至於甲辰冬之仲華第落成矣諸士大夫之侍從者殆乎千人野人之懷惠而移家者倍焉然後國分爲一都會之地矣於是乎上行下效百廢具興有神宇之復舊者有佛廬之新者輪奐之美壯麗奪目矣獨地藏薩埵堂宇肅然依舊不蔽風日尊體亦有若無矣爰有替者正壽院者欲再造薩埵之堂宇有其志而無其力若非檀度之助爭遂其夙志乎於是肩囊手杖徧扣十方檀度之門云とあり、宗旨等事はかさねて聞糺して補ふべし

○尼寺

〔續紀十四卷〕に天平十三年三月乙巳云每國僧寺施封五十口水田十町尼寺水田十

地藏堂

緣起

再興

替者正壽

院

創立

町僧寺必令有二十僧其寺名爲金光明四天王護國之寺(三ノ字ナシ)一十二尼其寺名爲法華滅罪之寺(其)兩寺相去宜援教誡とあり、是も詳かならず

○國府

〔和名抄〕に大隅國云桑原久波々とあり、さて〔南浦文集上卷〕に大隅故州國分新府路通日向地接薩摩襟清水而帶大津顧其後背有億丈之城其爲主相者不振兵威以戒不虞望其前而有萬頃之田其爲人民者有勤農業以樂有年其食足兵足者又非治國之具乎此則新府之所兼有也若夫八幡正宮之有乾門也有護國靈驗之名霧島權現之在良闕也有安住不動之勢地已靈而人未傑者爲可措矣慶長六年辛丑夏之仲龍伯尊君相攸鑿山通江以欲營府第於此地其用人力者非物情之所欲蓋避其地之低濕也去歲甲辰八月遣佐多宮內少輔忠増公遠至洛陽扣陰陽博士正五位上賀茂朝臣在信修鎮地鎮宅之秘法坐措府第之四維於泰山之安加焉爲尊君祈身宮康健祝壽算錦延忠増公歸國之後錦繡於野外以分街巷予觀夫新府勝狀東西之衢其數九者蓋象于陽數也南北之陌其數五者蓋象于五行也士大夫之家于九衢者三百蓋取于禮儀三百也其營中之延袤方九十餘間而不滿百者虧盈益謙也云云不日而華第創造之功成士大夫迨庶人之居亦其功成矣於是英雄霧列俊傑星馳尊君之願既滿

國分の新府

行程所在地
府中村

和歌

衆人之望亦足矣不幾而新府爲一都會之地不亦盛哉且復東有惠果弘法末裔鎖金剛之關鍵(詞の下に引續集之數語有於此中世品之府設立位之始則此二字を脱す)以傳南指之印何止於此有役小角之流執錫以念不動明王有釋一邊之流鳴鼓以禮無量壽佛是亦爲尊君祝無量之壽爲新府安不動之地者也豈不爲無意哉云云〔和漢三才圖會八卷〕に大隅國國府坤方至薩摩籠島七里良至日向飯肥二十里とあり此新府の地則古府の地なる由薩摩國人云へりさて國分郷府中村ありて今は贈於郡につけり川を以て堺とする時は國分ハソノ郡なり

○氣色杜

〔新古今和歌集夏部〕に後京極攝政太政大臣

秋近きけしきの杜になく蟬の涙の霧やした葉そむらん

〔續古今和歌集夏部〕に従三位成實

夕涼み身にしむばかり成にけり秋のけしきの杜のしたかぜ

〔同集秋部〕に左近中將孝長

見るまにうつろひにけりしくれゆくけしきのもりの秋のもみちは

〔新續古今和歌集春部〕に前大納言重資

梢には遅さみどりを先見せて春のけしきの杜の下草

大隅之上(嶺南郡)

〔名處小鏡〕に大隅國氣色杜あるふみに此歌を順徳院の御製とす

明渡る氣色のもりをたつ鷺の上毛もふかく雪はふりつゝ

〔名處方角抄〕に大隅國氣色杜

我ためはつらき心も大隅のけしきのもりのさもしるさ哉

兵部卿有教是より已下の歌どもは「古蹟」傳

移りゆく氣色の杜の下紅葉秋來にけりとみゆる色かな

待賢門院堀川千載集か千載和歌集卷四

秋の來る氣色の杜の下風に のふ物はあはれなりけり

中ノ院通茂

暑き日を空に隔て涼しきは秋のけしきの杜の下かけ

〔八雲御抄五卷〕に氣色の杜大隅とあり又〔類字名處和歌集〕に氣色杜大隅とあり

〔和漢三才圖會〕に大隅國氣色、森〔和爾雅〕に大隅國氣色、森など見えたり、氣色、杜

名義いまだ考へず、〔古蹟、癖〕に氣色、杜は大隅國桑原郡國分郷府中村にありとあり

〔古蹟、癖〕と云ふのは薩摩國一人

○歎木杜

〔古今和歌集誹諧部〕に題しらず讃岐

所在地

和歌

所在地

彦火火出見尊

神武天皇

鹿兒島神社

〔所在地〕

ねぎ事をさのみ聞けん社こそはては歎木のもりと成るらめ

〔金葉和歌集戀部〕に橘俊家女

いかにせん歎木の杜はしけれども木の間の月のかくれなき世を

〔新續古今集戀部〕に藤原秀茂

枯にけり人の心の秋風にはては歎のもりのことのは

などあり、なげきのもり名義いまだ考へず、さて〔類字名處和歌集〕に奈毛木杜大

隅〔和漢三才圖會〕に大隅國奈毛木森〔和爾雅〕に大隅國奈毛木森などあり〔古

蹟、癖〕に歎木杜は國分郷中村にあり〔立辨曰〕なげきの森は國分郷

○高千穂宮

〔古事記上卷〕に日子穗々手見命者坐高千穂宮、伍佰捌拾歲御陵者即在、其高千穂

山之西也又〔中卷〕に神倭伊波禮毘古命與其伊呂兄五瀬命、二柱坐高千穂宮、

而議云坐何地者平開、看天下之政、とあり是も〔風土記〕に贈於郡高茅穂とある

處と聞ゆ、千穂の名義は〔日向志〕曰杵郡知鋪郷伴に委くいへるが如し、さて此宮、

事は〔古事記傳〕に、説に火火出見尊の宮は桑原郡宮内と云地是なり、〔神名式〕同郡な

る鹿兒島神社も此尊を祭れり今は正八幡宮とす云とあり、〔下卷〕肝屬郡鹿屋郷、伴

に云ふ考へし、この事ともすべて〔書紀〕の趣と〔古事記〕の趣とは聊異なるべし、高千穂宮を日向

いありて一やうには定めがたし又薩摩國阿多郡高屋、伴にも引出てあけつるふべし、

白袴郡方ならむといふ説はいみじきひがことなりかのあたりは人の行かひもた
る東原らぬ處なりといふ山、西はことさらなり

①葛例郷

〔和名抄〕に贈於郡葛例とあり、葛例は詳ならずもし加禮伊と訓へさか〔鄉村帳〕
に贈於郡福山郷嘉例河、日當山郷嘉例河などあり
○志摩郷

三島成る

神島

大穴持神
櫻島部
櫻島
向崎櫻の
島

〔和名抄〕に贈於郡志摩國用とあり、さて〔續紀廿四卷〕に天平寶字八年十二月西方
有聲似雷非雷時當大隅薩摩兩國之界煙雲晦冥奔電去來七日之後乃天晴於鹿
兒島信爾村之海沙石聚化爲三島炎氣露見有如冶鑄之爲形勢相連望似四阿
之屋爲島被埋者民家六十二區口八十餘人、〔同書廿七卷〕に天平神護二年六月
己丑大隅國神造神島震動不息以故民多流亡仍加賑恤とあり此島は今櫻島
を云なり〔續紀二十五卷〕に寶龜九年十二月甲申去神護中大隅國海中有神造島
其名曰大穴持神至是爲官社、されども櫻島と云名も古代よりの事と聞えて〔類聚國史〕に
又向島とも云なり〔九州圖〕に向崎櫻島語石守また〔拾遺和歌集〕に大隅守櫻島忠信など見たり
託宣に大唐新羅國の凶賊滅亡の爲に天衆地類等を召集て海中に島を造りなり若
異賊の軍來たらむ時は西北の風を吹かせて吾域内に入て滅すべしと誓ひ給ふ此島

噴火

詩

は昔一夜の間に俄に出來たる大隅國向島なり然に今乾風吹て敵軍悉く我域内
の海に入る正直虛妄なき靈託違はぬ事こと貴けれ云、〔島隱集上卷〕に文明戊戌八
月十九日歷七里原西南有二島曰向文明丙申秋火起焚島烟雲簇也塵灰散也
青茅之地忽變白沙堆滄桑之嘆不克蔑于懷作是詩

烈火會燒一島來、桑田碧海惣休猜、去年洞底草深處、七里平原沙作堆、
〔島隱集上卷〕に肥州廣福精舍山號紫陽齋典藏者其地人也適隨自咲禪老而遊
于薩陽之地一日訪予於海涯一袖出二十八顆明珠蓋我友專岳翁送公行色之一
篇也把翫之餘漫次其韻且謝來義云

語對東僧似故人、異郷無友遠遊身、山成焦土隔江在、莫怪南方風
物新、

櫻島炎上
記
地震、海
村敷
櫻花

自注に向島海底有石燒上而與舊島合とあり、此島文明八年と安永八年と二度
炎上したりし事〔櫻島炎上記〕と云物に見えたり、〔櫻島炎上記〕と云は薩摩國鹿兒島の儒官
に安永八年九月廿九日夜より十月朔日に至りて鹿兒島城下及東南北の方數十里の間地震ふ事類なり、其
に其日の未時を過て城下の東方なる櫻島に火起りて頻に燒上る此時島の東北五六里の海底より俄に中洲
を現(ケ)す水を出し事高き二丈余、周半里許あり峽内十餘里の間に浮石(カレイシ)集まる事厚さ六尺許又
周半里許なる物ありて舟楫をたつ又櫻島に大石の落る事後如し須臾につらりて五六丈に至る又灰燼の黒
る事雨の如し是もつる事二十尋に至る此島すべて十八村あり火の起る處、古里村・有村・脇村・瀬戸村・黒
神村・高免村の上に當れり是を以六村の民死去多し、凡て四百八十人に及べり樂鹿の類海を渡り北
に至るもの多しとあり、〔櫻島炎上記〕櫻島には昔櫻花多かりしなるべし此島に渡る所地方より一里な
り北の方に至ればや、幅迫くして川の如し然れども潮水えといはず深くして漁釣の利多し近年領主の風流に

山抄

實話

明郷

〔訓讀〕

て和州吉野の櫻をうゑ給ひ入江の追き處殊に兩岸にうゑ給へるを吉野といふ花の盛には舟より陸よりも見
る人多しと彼國に行たる人のもの語なりといへりき、常足重て按ずるに「ある説」に「續紀廿四卷」に爲三島
とあるは薩摩國につける地にて櫻島に事にはあらざると云り此三島之事は「薩摩國下卷」鹿兒島郡の内にも
引出ていふべし、「西遊記」に安永年間薩摩の櫻島大にやけて後山上より大水あふれいて、田地民家大に損
り里人は山抄と云此櫻島と云は海中にありて麓のめぐり七里山の色黒く一葉そびへてひえの山を二ッば
かりも重ねたる如く高し山のめぐりに人家田地ありて富饒の處なり其葉のやけたりし事は番代の珍事にて
云云そのやけ漸くしづまりて人々もふたいび生たるこゝちして悦あへる處に或日又山の峯震動する事おびた
しくやがて大水山をくだき石を飛ばし樹木をぬきて落さまにおちくるそのみかたに高き岡の上など
別なく只一時の間に大海につき出せり云云其水筋は大なる谷となり其傍の田地の中或は小高き岡の上など
も大き二丈三丈或は五丈六丈にも及べる石流れ出たのこれり今も櫻島の小兒の歌に島のみたけがどろく
げ山抄が来る

○阿氣郷

〔和名抄〕に贈於郡阿氣とあり、阿氣は安祁と訓べし、名義詳ならず〔殘冊風土記〕に日
昔大明命坐所也故云明土地中肥民用繁多公穀七十九
假粟四十二丸なども見えたれど例のおぼつかなし、此郷地今は考へがたし

○方後郷

〔和名抄〕に贈於郡方後とあり、此郷の事すべて詳ならず方後はカタシリと訓ふべきかさ
れどもさる地名も今は聞えずな
ほよく考
ふべし

○人野郷

〔和名抄〕に贈於郡人野とあり大隅郡人野
と云もあり、此郷の事もすべて詳ならず〔上田百樹云〕人
野は入野を誤るかもあれど是も訓注は誤れりと聞ゆ

○安樂湯

詩

〔南浦文集下卷〕に辛亥小春入浴於安樂、境於斯時也平氏宗親公有書音賦一首、俳諧以謝焉云

所在地

屢入温湯臥又偃、日自早朝出及晚、地名安樂豈虛名、解衣盤礴樂張本、
出浴之次有俳諧云とあり、安樂温泉は贈於郡踊郷にありといへり、今も近邊の
人の入湯する處なり

○荻浦

〔島隱漁唱中卷〕に臘月初二赴日州凍雨雖未晴以卜日而出取修途今夕宿
荻浦口之沙驛有威

詩

出門五六里泥行、東向日州天報晴、芦荻洲前小漁屋、夢酸旅枕夜濤聲、
とあり、荻浦は乎支乃宇良とよむべし

○七里原

〔島隱集上卷〕に文明戊戌八月十九日歷七里原云云七里原次玉洞翁之韻

詩

山似崑崙最上巔、風吹猛火一起雲煙、平岡七里沙如雪、草樹何愁白髮前、
〔島隱漁唱中卷〕に七里原

前行屈指八年先、原上平沙雪色鮮、七里馬蹄今日路、風吹荆棘半參天、
〔島隱集中卷〕に文明丙午秋云昨偶有扣門客出而迎之乃因公春公二典藏也二

公者族兄弟而有連珠之譽、此年已來與予來往交熟是以飛錫於日南之次遠蹈荒僻以問新居之安否、厥情不可默仍作小詞以爲謝

開士珠連好兄弟、日南新築倒衣迎、秋風七里沙原、遠路忘勞故舊情、
〔下卷〕に七里原偶作二二、釣響也三四、次也

七里平原半日程、白沙捲雪客衣驚、居民新築山深處、知是樵蘇樂此生、
用前韻

一年兩度一途程、行客慣經情不驚、七里郊原沙卷後、青蕪吹瘴晚來生、
和隆知藏七里原詩

寒氣透衣原上風、半沙埋屐不成叢、行人十十壯年葉、扶此衰殘無力翁、
○宮内

〔島隱集上卷〕に文明戊戌八月十八日宮内客舍

茅蒼短々暑塵飛、偶上林亭對翠微、一雨晴來雷不鼓、袈裟帶得晚涼歸、
宮内和玉洞翁之韻

四時三百日、風光、送盡青春與素商、過雁一聲殘月曙、故園消息海天長、

○正護寺
〔同卷〕に上人日秀者水雲之僧而密宗之徒也云云 漸迨耆年在隅州八幡正宮傍

詩

日秀上人

賴喜法印

詩

所在地

玄奚上人

福災

雲叔禪師

柳一二之梵廬於是乎弟子彌衆矣先是天正乙亥佛成道之日世緣未盡深入禪定云云 是歲丁未九月初八正護寺幸賴喜法印預修善根大設齋會予亦蒙嘉招陪其法筵因賦一詩呈法印座下云

東西到處創名藍、多少昏迷要指南、自出凡塵入禪定、年光三十又加三、
とあり、正護寺は正八幡宮の社僧なるか、〔彦山人云〕此寺は八幡宮の近邊にて馬頭觀音のあるあたりなり寺は小寺なり

○正統庵 正壽 辨才院 養浩庵

〔南浦文集下卷〕に正興古刹正統禪庵之側有玄奚上人者其形醜而不知我影之曲云云 唇如正壽佛殿反字鼻似正興花堂屋形云云 盲如辨才院勾當云云 雙似養浩庵老僧云云 予今住正興古刹者十二年於茲矣奚兄之操履匪翹聞而知之直視而知之云云 慶長十五年庚戌四月既望雲興散人滌筆於正興方丈

○正興寺

〔南浦文集上卷〕に隅州有寺名正興其位屬釐下之列刹山名靈鷲者以似印度之鷲峰也星河一天易地皆然者乎先是不幸而再罹火災一般若亦灰燼矣是可忍也是歲慶長己亥之秋九月住山雲叔禪師喜捨資財以求六百卷之聖教寄附于靈山云云 予幸陪此法席韻羨有餘賦野偈一章以奉致其賀云

詩

大隅之上(贈嗷郡)

四二

釋典、金文世不常、貝多字古幾千霜、時哉天亦呈嘉瑞、再現曇華般若黃、
 「同書中卷」に乙卯五月霖雨之中在正興粉寺賦詩并序、予本日州、合澗南陽、人也
 幼而入於州之安國一翁考師之室、隨侍巾瓶、者年尚矣、云是歲慶長乙卯夏五、以事
 候於惟新尊君、霖雨連日雲霧推而不去、偶來正興粉寺、與一僧、殘僧一語、舊者三
 五日矣、推枕軒裡聽雨賦三首、漫興以述志之所云

鄉關千里喜生還、至老羞吾剃髮斑、富貴薰天皆外事、獨緝黃卷對青山、
 五月風涼氣似秋、遠檐點滴暗生愁、一奴年老一奴幼、欲出肩輿不自由、
 少少遊無如境佳、遙思往往往芒鞋、近來漸覺吾衰甚、到處逢人說老涯、
 「同卷」に頃投宿於正興精舍、逆旅之懷無由述之、綴近體十章云

山名靈鷲又何因、古昔遺蹤今已陳、日晚堂前望堂下、殘僧纒數兩三人、
 垣然本是佛源徒、今日正宗有若無、穀雨乾時偶爲圃、可憐塔主鬚髮枯、
 垣然、開山也
 塔巨、正宗
 茅屋雖傾地已靈、宗峰圖像煥丹青、料知供給日豐足、茄子漫々古寺庭、
 宗峯、中興、
 開山也
 老漢堪憐扶瘦筇、寺門寂々草茸茸、故山似愧人知面、風雨猶遮天柱峯、
 天柱、塔
 頭名也

詩

清水城

三徑就荒吹野蒿、蕭蕭破屋雨嘈嘈、堂前猶問昔時事、白髮殘僧說九高、
 九高住持之時
 寺猶全盛也

「同卷」に予將赴莊内、扮寺發軔日在、近因有戲吟云、宮内正興云、粉寺在
 部、在
 庄内

(次)條文へ上卷へ裏紙ニ即入シアルヲ以テ暫ク此處ニ載ス

「シブシ記」に天文十四年日新入道云、隅州清水城主本田紀伊守董親清水落城同廿
 三年澁谷退治

大隅之上(菱刈郡桑原郡贈嗷郡)終

大隅之上(贈嗷郡)

四三

大隅之下(肝屬郡)

陶器
賀屋の姓

〔訓義〕

と云物は黒燒といふ物にて上品にはあらず其所の民今に至りて朝鮮風の名をつけたり(大隅
平記三十三卷)延文三年筑後國大原合戦一件に賀屋兵部大輔とあるはこゝによしある人によ
○岐刀郷
〔和名抄〕に始羅郡岐刀とあり、岐刀は幾等と訓べきか、此郷の事すべて詳ならず、
〔百樹云〕一本に刀ノ字なしといへりきさらばチマタとよ
むかされども今肝付郡の内にさる村名どもはきこえず、

○肝屬郡

肝街

肝杯
大隅國を
居く

○大橋
郷村の數

〔方位〕

〔延喜式〕に大隅國肝屬郡あり、〔和名抄〕に大隅國肝屬、岐毛豆岐とあり〔からぶみの
起麻子記〕名義詳ならずして〔續紀一卷〕に文武天皇四年六月庚辰肝衝難波從肥、
人等持兵刺劫竟國使部眞木等於是勅筑紫惣領准犯決罰とあり〔難波從肥は
〔續紀〕卷〕に和銅六年四月乙未割日向國肝杯贈於大隅始羅四郡始置大隅國、
郡大様は〔和名抄九卷〕に肝屬郡桑原、鷹屋川上、鷹麻、白上四〔寛知集〕に肝付郡云
三十八村、〔郷村帳〕に肝付郡内浦郷、方岸郷、高山郷、前田郷、後(ウシノ)田郷、新留(ニヒ)
上(名)郷、大始良郷、濱田郷、野里郷、獅子目郷、屋郷、原郷、中之郷、下之郷、野崎郷、宮下郷、留山郷、波見郷、始良郷
下(名)郷、高限郷、高(高)引郷、百引郷、平房郷、垂水郷、海(カイ)郷、中(中)郷、市來(ク)郷、花岡郷などあり、さ
て〔日本輿地圖〕に依て考ふるに肝付郡東西は海を限とし南は大隅郡北は贈於郡に
隣りて東南より西北にわたりて十四五里南西より北東にわたりて八里餘あり贈於

大隅國守
大始良城
肝付兼續
鹿屋氏

〔名義〕

〔所在地〕

〔訓義〕

郡につげる大郡なり、島津師久公之舍弟氏久公大隅國守護職とし大始良の城に居住し後に日州志布志
志(内)城に御引移り有之候也とあり〔天文四年三月〕國大亂の件に肝付河内守兼續は肝付之領主也とあり〔志
布志記〕に鹿屋(カノヤ)氏と云は肝付河内守兼右の三男宗兼初て鹿屋と號す鹿屋院の辨濟使にて鹿野屋を領
する故なり鹿屋周防介忠兼入道玄兼は元久公の家老なりしが嘉吉元年三月十三日大覺寺門主僧正源有日州諸
縣郡備間之永徳寺に自殺の時功ありて鹿屋等の子孫志布志に住す
○桑原郷
〔和名抄〕に肝屬郡桑原とあり、桑原は久波々良と訓ひべし、名義は〔上卷〕桑原郡、
下に云るが如し、此郷の地今は詳ならず

○鷹屋郷

〔和名抄〕に肝屬郡鷹屋とあり、鷹屋は多加也と訓ひべし、名義いまだ詳ならず〔竹屋
は高屋の意に、さて此郷地今はさたかならざれども高屋と云名は内浦郷の内に殘れ
る由〔山陵考〕に見えたり 神代山陵考は薩摩國一人白尾國柱と云人のかける書なり、鷹屋郷は〔村名帳〕に肝屬郡高山
郷とある是にはあらぬか其郷に宮下村と云もありされども高屋山と云は肝屬郡
内郷北方村にある山なれば今の内浦郷則いにしへの鷹屋郷にてもあるべし〔幸
丸か日記〕をみれば始良山の北に高山町、高山岳、國見山などあり、始良より三里北
に高山町あり

○川上郷

〔和名抄〕に肝屬郡川上とあり、川上は加波加美と訓べし 薩摩國河邊郡にも川上郷あ
れば是もカノヘなどよむべ

大隅之下(肝屬郡)

〔名義〕
川上鼻師
の居地
〔所在地〕

きかとも思へど安房ノ國平群ノ郡川上ノ加波 名義は川の有る處にて負せたるべし、さて「景行
加美ともあればなほカハカミト訓ムべし」
天皇紀」に熊襲有魁帥者一名石鹿文亦曰川上鼻師云とある鼻師も此川上に
居たりし者なるべし〔幸九云〕 始長山の北に川上「村名帳」を按ずるに申良郷内に川東
川西など云處あり此あたりにはや有む

○雁麻郷

〔和名抄〕に肝屬郡雁麻とあり、雁麻は加利萬と訓ムべし〔印本〕にカリマと假字を付たり然
るに大隅薩摩は桑麻に宜しき處なる
事古き物にほのく見ゆれば麻の意にてカリアサ 名義いまだ考へず、さて「上田百樹云」肝屬
郡雁麻は舊事本紀今五卷に弟物部麻作連公借馬連、笑原連等祖また孫物部金
連公野間連借馬連等祖とある借馬と同處なるべしかといへり此説さもあるべし
此郷地も今は詳ならず

○高屋山ノ上ノ陵

〔書紀〕に彦火火出見尊崩葬日向高屋山ノ上ノ陵〔古事記上卷〕に日子穗々手見命者坐高
山ノ西一とあり又〔今本天智記〕に火火出見尊位於皇子之宮終崩日向高屋山ノ上ノ陵「諸陵式」に日
向高屋山ノ上ノ陵彦火火出見尊在日向國無陵戸一などありさて「前皇廟陵記」
に薩摩國阿多郡大隅國肝屬郡俱有鷹屋郷蓋二郷境相接恐此地之山二郷ノ地邊に隔た
あらず蓋ノ字は若〔山陵考〕に高屋山上陵在大隅國肝屬郡内浦郷北方高屋山之
字を誤るにや また「山陵考」に高屋山上陵在大隅國肝屬郡内浦郷北方高屋山之

所在地

彦火火出
見尊

借馬連

〔訓義〕

國見山
高屋神社
天子山

熊襲の城
址
高屋山

國見嶽
國見陵

暗字辣
内浦

〔所在地〕

嶺ニ云 國柱謂高屋山之上俗謂國見山國見山 高屋山之麓有高屋神社即祀
出見尊之廟也又高屋山之左謂天子山中云爾 昔在景行天皇十三年帝親征熊襲行闕
于茲六年因以名焉とあり高屋山ノ上ノ陵は薩摩國阿多郡内にて有むかと思はる
由もあり故に今はこゝにも彼處にも擧て後考へまつになむ、〔幸九云〕平野村の北面
に熊襲の城跡と云物あり
り、此山より高屋山に登る道あり登りて三里あり初は石山を登る事二十丁斗にして又茅深き野山を登
る事一里さてそれよりまた木の生たる山を登ること一里にして峯に至る北面に京都ノ馬場母養子ノ峯あり
いづれも峯ついきなり御陵はいづれとさだかにしりがたけれど五尺ばかり立る岩上に社を作れるあり是御
陵なるべき此地方凡五間斗あり此うしろ南のかたに大嶽ニツありて其下に長一丈横五尺斗にて厚二尺斗なる
岩あり自然の岩とも見えす内は少しくほみたり御陵に用ひたる石などなるべしさて此峯より大隅薩摩の地
よくみわたさる又屋久島種子島などもはるかにみゆ里人は此山を國見山とも國見嶽とも國見の陵ともい
ふ此山を東に下りてアミといふ村あり下二里余なり

○暗字辣

〔圖書編五十卷〕に薩摩州起麻子記暗字辣羊買高とあり、暗字辣は宇都羅と讀ムべ
し薩摩とあるは誤りにて大隅國肝屬郡内浦を云なり〔郡村帳〕に肝付郡内之浦郷あり、羊買高
中細見記に内浦より大泊へ十八里、日向國志布子へ五里とあり「輿地圖」又「九州圖」を按ずるに大隅國內浦は高山の東
南海中にさし出たる所にて入海もある所也

○馭謨郡

〔延喜式〕に大隅國馭謨郡あり、「和名抄」に大隅國馭謨五牟とあり〔上田百樹云〕誤潤
木邊につくる

大隅之下(馭謨郡)

郡を合す

○大隈

郡村の數

名義詳ならず、さて「類聚三代格今本」天長元年九月三日、官符に能満合ニ於取謨云云とあり、郡大隈は「和名抄九卷」に取謨郡謨賢・信有、「寛知集」に取謨郡云云三村〔或書〕に益救島廿などあり、〔天長元年〕官符に多嶺島四郡を合せて二郡として大隅國に加へ給内〔益救〕一郡は別島にて天武天皇の比まても一國にて其後〔天平五年〕紀に至て初て益救郡と云事見えたりされば此比より多嶺・内とは定りつらむかくて益救郡大嶺に多嶺直と云姓をも給ひつらめさる事勿論なり又益救を熊毛に合すとあれば式にも益救神社は熊毛郡にあぐべきを取謨郡も多嶺島内にあふれば天長官符方誤りにて益救を取謨に合せ能間を熊毛に合せたるにて「式」の方を正とすべしなほ後聊いふべし

○益救神社

〔延喜式〕に取謨郡益救神社とあり、益救は夜久と訓べし、御名義は島名よれり、さて「薩摩人國柱」云大隅國取謨郡益救島益救神社祭火火出見尊也或云祭ニ夜藝命未詳、又「或人説」に益救神社は益救島宮浦村一品浦にありて今は一品寶壽大権現とも嶽・権現とも云なりと云り、「輿地圖」を按ずるに益救島の中らに御嶽あり宮浦と云は其北方の海邊にあり

○益救島

〔推古天皇紀〕に二十四年三月掖玖人三口歸化夏五月夜句人七口來之七月亦掖玖人二十口來、先後並三十人皆安置於朴井未及還皆死焉同二十八年八月掖玖人二口歸化

〔名義〕 祭神 所在地 一品寶壽 大権現 嶽の權現 掖玖、夜句 歸化

遣使

賜祿

夜久

貞獻

多嶺直

陽侯吏眞

身唐船來

着す

益久島

郡を合す

養久山

錦貝

やく貝

所在地

行程

〔島勢〕

流來於伊豆島、〔舒明天皇紀〕に元年四月辛未朔遣田部連於掖玖、同二年九月田部連等至、自掖玖、同三年二月辛卯朔庚子掖玖人歸化、〔天武天皇紀〕に十一年七月丙辰多嶺人掖玖人賜祿各有差、〔續紀六卷〕に靈龜元年正月甲申朔云南島庵美夜久・度感・信覺・球美等來朝各貢方物、〔同書十一卷〕に天平五年六月丁酉益救郡大領外從六位下加理伽等一百三十六人賜多嶺直、〔十年四月〕件に陽侯吏眞身と云人も見えたり、〔同書十九卷〕に天平勝寶六年正月癸丑太宰府奏、入唐副使從四位上吉備朝臣眞備船以去年十二月七日來着益救島、自是之後自益久島發進漂蕩者著紀伊國年漏崎、〔本朝文粹四卷〕に天長元年九月三日官符に能満合ニ於取謨・益救合ニ於熊毛云云、〔兩朝平壤錄四卷〕に養久山居海中、方圓二百余里竹中叢茂多茶筍、又出多羅木、有地都守之各道犯死罪、矜免者發彼官賣、狗留截木、板非銀贖、身老死不可、離也、〔和名抄十九卷〕に錦貝、辨色立成云錦貝、夜久乃斑貝、今按本文未詳但俗說四海有子、に公卿殿上人かほるがはる益とりてはやく貝といふもの男子だにうた、夜久、島、彼島所出也、枕册てあるをいまへに出てとるとあり今も此貝にて盃を作る俗に夜光貝といふ也、〔釋日本紀〕に私記曰掖玖者西海、別島也出美貝、今俗謂之夜句貝、但此島與大隅、相近耳などあり、名義詳ならず、さて「書紀通證」に掖玖島周匝百二十六里在薩摩國、南多嶺島西、始隸多嶺、後屬大隅、距大隅百廿里云云、是は古の道、程を云なり、〔琉球圖〕に屋久島廻二十里三十丁自薩州山川津、至此島、路程三十五里、是は今程、な云なり、とあり、〔日本輿地圖〕を按ずるに益

浦 一樓 揚侯忌寸 邪古 葉活

天威子

山勢 益救杉 御岳 元見山 八重嶽 薩摩杉

賜姓

救島わたり八九里許なり東南に安居・黒石・尾間あり西北に中間・長田・一湊・宮浦あり「和漢三才圖會」に出せる「屋久島」圖を按ずるに北に近く一小島あり一樓と名づく是より東南西北と打つらなりて石床・宮浦・古世田・舟行・黒石・中間・伊毛布・長田・吉田と擧ぐたり、「新撰姓氏錄左京諸蕃」に揚侯忌寸出自木煬帝之後遠祖揚侯阿子王也「唐書」に邪古とあり「武備志」には葉活とあり

○養久山

「全浙兵制日本風土記」に云云 圍棋子弄造成者乃本國沿海之傍而有生成石子儼如做成精緻名曰天威子出子養山沿海之處白子出子大隅山海傍皆大隅州所屬之地、また「兩朝平壤錄四卷」に養久山居海中方圓二百余里などあり、養久摩之南方十八里島峻可亞富士山子丑至薩摩山川舟行三十二里とあり「薩摩益救島」山は甚うるはしく茂りたる山にて諸木とも他處にかはりて其理密なり杉などは殊さらの事なりと云り杉は諸國に益救杉とて賞美するものなりいかにも常の杉にかはりて密なるものなり「日本輿地圖」を按ずるに島中央に御岳あり南に元見山あり何れも高山と明ゆ「西遊記」に屋久島に八重嶽とて高さ十三里の高山あり此山より其材を出す世に薩摩杉といふ云云さて南國の船峯に至て北方に渡らむとする時數千里の北海を越行り事ゆふ羽つかれて海中に墜ち杉といふ事恐るる故にや此屋久島の八重嶽をめぐりて空高く飛上り虚空に至りてそれより北に向ひて飛渡るといふ

○能滿

「續紀十一卷」に天平五年六月丁酉能滿郡少領外從八位上粟麻呂等九百六十九人

因居賜直姓

○謨賢郷

「和名抄」に取謨郡謨賢とあり、此郷の事すべて詳かならず文字の誤などに

○信有郷

「和名抄」に取謨郡信有とあり、是もすべて詳かならず「上山百箇」ハ爾を有に誤れるならむかし何有と云郷名一例ハ出羽國村山郡徳有なども有り

○熊毛郡

「延喜式」に大隅國熊毛郡あり、「和名抄」に大隅國熊毛久未介とあり、名義いまた詳ならず周防國にも熊毛郡ありさて「續紀十一卷」に天平五年六月丁酉多嶺島熊毛郡大領外從七位下安志託等十一人賜多嶺後國造姓、「類聚三代格」天長元年九月三日官符に云云 益救合熊毛とあり、郡大嶺は「和名抄九卷」に熊毛郡熊幸毛阿枚、有三「寛知集」に熊毛郡云云 九村或世に種子島十などあり「日本輿地圖」を考ふるに種子島すなはち熊尾木・安城、など云地名見たり益救島ハ西にあり種子島ハ東にありて其間十里余ありるべし赤尾木より大隅郡大泊に十八里あり種子島ハ南北に長くして二十里もあるべし

○多禰島

「天武天皇紀」に六年春正月饗多禰島人等於飛鳥寺西槻下八年十一月己亥大

大隅之下(熊毛郡)

郡大領寺 姓を賜ふ 郡を合す 〇大嶺 郷村數 種子島 益救島 島人を饗す

遣使 島人々 島印心賜 遺唐舶來 正稅 多禰島 大伴宿稅 島上足 料 島司の給 飢饉 佐伯宿稱 毛人 田制 大隅に謀 屬を奏す

乙下倭馬飼部造連爲大使小乙下上寸主光欠爲小使遣多禰島仍賜一級二十年八月丙戌遣多禰島使人等貢多禰國圖其圖去京五千餘里居筑紫南海中一切髮草裳粳稻常豐一菹兩收土毛支子莞子及種々海物等多九月庚戌饗多禰島人等于飛鳥寺西河邊奏種種樂續紀六卷和銅七年四月辛巳給多禰島印一圖同書十一卷天平六年十一月丁丑入唐大使從四位上多治比真人廣成等來著多禰島同書十六卷天平十七年十月戊子論定諸國出同書廿二卷天平寶字四年五月戊戌右大舍人大允正六位下大伴宿禰上足坐記災事十條傳行人間左遷多禰島據續紀二十三卷天平寶字四年八月甲子勅壹岐對馬多禰等司身居邊要稍苦飢寒出舉乏稻會不得利欲運私物路險難通於理商量良須於懲宜割太宰所管諸國地子各給守一萬束據七千五百束目五千束史生二千五百束以資遠戍稍慰羈情同書廿五卷天平寶字八年八月辛巳多禰島飢賑給之同書廿六卷天平神護元年正月戊戌太宰大貳從四位上佐伯宿禰毛人坐逆黨左遷多禰島類聚國史百五十九卷大同二年十月丙子壹岐多禰兩島校出隱田一百四十町須準諸國例賜島司公麻田并郡司職田以外悉班田百姓口分云者許之類聚二代格本五卷天長元年九月戊申太政官謹奏停多禰島隸大隅國事右參議太宰大貳從四位下小野朝臣峯守等解備謹檢按內

種子太守 吉國 上妻系圖 上妻家眞 種島代官 藤原信基

太政官去二月十一日符傳件島南居海中人兵乏弱在於國家良非扞城又島司一年給物准稻三萬六千餘束其島貢調鹿皮一百餘領更無別物可謂有名無實多損少益右大臣宣奉敕宜勘利害言上者南溟蕪々無國無敵有損無益一如符旨須停島隸大隅國計其課口不足一鄉量其土地有餘一郡能間合於取謨益救合於熊毛四郡爲一於事得便者聖帝登樞事期濟世明王布政理貴適時臣等商量普漢元帝納賈捐之言罷珠崖郡前史以爲美談後世稱其英烈雖建國量疆非無分野而恤民救急猶棄州郡况溟海之外費損如此加以往還吏漂亡者多運送之民蕩沒不少守無益之地損有用之物求之政典深迂物議伏望依件停隸以省邊弊伏聽天裁謹以申聞謹奏聞海東諸國記に吉國己丑年遣使來朝書稱薩摩州內種島太守吉國以宗貞國請接待筑後上妻系圖に關白道隆其子隆宗正四位下少將修理大夫筑後守爲九州筑後國司下向稱之其子家久其子隆則其子經家其子家房其子房直其二男家眞三男阿波守號上妻建仁年中在鎌倉時奉嚴命爲種島代官下島云在島年久而後藤原信基公爲當島領主於是家眞可歸國之處最及晚年且島主以爲家眞多年懷島民成心服之二云暫可令家眞治一島依契約言直爲家臣賜五十町其嫡子家盛式部二男家時耶家盛嫡子家兼二男家治源左衛門尉號寺三男家成門尉家兼嫡子家教

島内の宗

上妻家續
嗣家重長
來り攻む

阿波 二男家包次郎左衛門尉其子家保家教子家俊式部大夫其子家範左京大夫其嫡子家貞號子郎時光公當家永可恃輔佐之臣旨賜文書矣今亡矣惜哉家長代二男家通式部左衛門其子家重式部左衛門家貞嫡子家信九郎左衛門貞治五年四月十六日奉從賴時公於肥後州戰死歲三十五紛失云云其嫡子家幸阿波守二男次郎左衛門尉家幸嫡子宗尙九郎左衛門永正八年八月二日死法名其嫡子家幸阿波守二男次郎左衛門尉家幸嫡子宗尙九郎左衛門永正八年八月二日死法名男宗堅阿波守宗尙嫡子宗義式部少輔正長元年戊申三月十一日死法名其嫡子宗尙九郎左衛門永正八年八月二日死法名嫡子家員阿波守二月十日死法名二男家氏九郎左衛門其子家年家員嫡子家房阿波守文正應仁年間種子屋久惠良部飯依法華宗家房亦改同宗明應三年甲寅正月七日死去法名男家治下野守五月十四日死法名家房嫡子家雅阿波守永正八年奉屬忠時公馳參大守忠治公之御手往々有戰功大永二年五月十四日死去法名云云家雅子右直式部大輔明應元年壬子誕生天文八年閏六月於市來平城奉從惠時公有軍功天文十一年寅十二月三日死去法名其子家續九郎左衛門阿波守入道號松庵大永五年誕生世々為增田村領主天文十二年春出雲守阿波守依逆心密語禍寢重長重長同意率二百員之兵三月廿二日渡于國上浦田翌廿三日來赤尾木而急攻內城直時惠時公長男籠城俄之儀外方者不知之近習常番士僅三十余輩從之家續為其一防戰及數刻重長之兵戰死居多時有和睦之儀而重長四月歸鄉家續學下野足利九華相傳一流師肥後國周防介盛家傳授之天文年中賜數通免狀時堯公與重長相惡天文年中公自

上妻家長

文祿征韓
の當時

鹿府飯島之時繫船大泊浦關渡遣西村周防時立與家續放火浦在家依之所司某提鍵來向家續云亦以鍵合互嚙勇猛牙爭勝利遂家續克之播武功名其外敢無拒者解纜順風任意飯島公喜悅不斜賞二者功天正十八年庚寅十一月十二日死去法名法淨葬增田村島峯家續有男女三子嫡子家長九郎左衛門阿波守七兵衛入道號入木女子二人者日高大膳宗房永祿元年戊午誕生母長野平左衛門實昭女天正五年依時堯公命為家老職時年是嚴父家續多年勤勞以故辭職數度頻訟之於是雖若年家長有可繼職命以不能固辭再三也然無許容不得已家長聽公事天正年中大守義人公征肥筑豐三州久時君屬其軍家長奉隨遂同八年肥州馬場楠水保矢崎十四年筑前岩屋往々有軍忠就中豐州南郡御飯陣於白仁奉為島津歲久公殿而家長勵戰功十五年正月十七日也文祿元年太閤殿下秀吉公朝鮮國征伐日本諸將迄孟夏渡海之法令也久時君屬大守義弘公之麾下有渡海命且肥前名古屋有陣屋營作之事依是正月下旬家長奉君命總步兵六七十人領之月中旬到名古屋時秀吉公近日可有若御諸陣屋急可成就旨日夜觸來如挽櫛齒然家長無人而不及手又無他力無奈何既及緩急之咎之處筑後州上妻鎮勝聞此事一姓同氏也不可不救之步卒二百餘人賜加勞以故陣屋棟數七十軒二夜三日中造畢遁危急鎮勝厚甚深而四月上旬家長飯島於是風聞君信倭者浮言渡海猶預矣諸

士過半同倭者不義云云家長大驚嘗會聞今度背命不渡朝鮮將士或誅伐或改易或得所帶沒收等罪者許多也諸士愚而陷君於不義吁不忠甚哉家長密談老功西村時安同意家長相共諫君不義忠言雖逆耳君漸納得乍悔先非急決渡海然艤艦糧配士卒彼是延引逾月時安家長思惟有遲滯答受君命率軍衆九月十五日解纜先渡朝鮮十二月十五日至金海久時罹病痾及遲々之間先遣軍衆言上義弘公雖有遲滯依二者言被宥之加軍列勤軍事翌年五月久時君渡楫朝鮮軍忠拔群相協大守公尊意云云文祿四年秋奉從久時公移知覽院慶長元年家長於知覽羅火災文書系圖紛失同四年久時公種子島本領安堵家長再飯舊里安居數年艱難不可計自去冬庄內亂逆奉屬久時公家長勞軍務慶長十四年家長剃髮號入木雖法體聽公事同至末年辭家老職云云家長有男女四人嫡子家直天正九年辛巳誕生母西村壹岐介時與女慶長元年乘兵渡朝鮮一家直列其中一時歲十六太守家久公御家老伊集院忠棟入道幸侃野心露顯於城州伏見被誅依之息源次郎久真籠居都城其外構十二岩叛太守公是時久時君率兵攻擊彼黨時慶長四年己亥十二月八日家真戰死庄內安永法號宗清歲十九家直女子西村權兵衛時秀妻也家長女子一人肥後善右衛門盛隆妻次西村五次右衛門時善妻也家長二男秀隆初名家貞童名金千代下總

詩

鐵砲記

名義

外船漂着

織部丞

島主の居

種子島時

三次惣左衛門、秀隆有男女四人、嫡子時真其次、女子其次、隆直其次、女子也、云云、
〔島隱集中卷〕に演典藏試室韻此韻四種島法花宗旺化皆被禪律

邪宗箴士又揚塵、何處藏蹤護法神、鄉寺留君君不住、年々春在客中新、

〔南浦文集上卷〕に鐵砲記代種子島久時公 隅州之南有一島去州一十八里名曰種子我祖世世居焉古來相傳島名種子者此島雖少其居民庶而且富譬如播種之下一種子而生生無窮是故名焉先是天文癸卯秋八月二十五丁酉我西村小浦有一大船不知自何國來船客百餘人其形不類其語不通見者以為奇怪矣其中有大明儒生一人名五峯者今其不詳其姓字時西村主宰有織部丞者頗解文字偶五峯以杖書於沙上云船中之客不知何國人也何其形之異哉五峯即書云此是西南蠻種之賈胡也粗雖知君臣之義未禮貌之在其中是故其飲也杯飲而不杯其食也手食而不箸徒知嗜欲之愜其情不知文字之通其理也所謂賈胡到一處輒止此其種也以其所易其所無而已非可怪者矣於是織部丞又書云此去十又三里有津津名赤尾木我所由賴之宗子世世所居之地也津口有數千戶戶富家昌而南商北賈往還如織今雖繫船於此不若要津之深而且不漣之愈也告之於我祖父惠時與老父時堯時堯即使扁艇數十挈之至於二十七日己亥入船於赤尾木津丁卯期之時津有忠首座者日州龍源之徒也欲聞

住乘院

鐵砲權輿

法花一乘之妙。寓止津口。終改禪為法華之徒。號曰住乘院。殆通經書。揮筆敏捷。偶五峯以文字通言語。五峯亦以為知己之在異邦也。所謂同聲相應同氣相求者也。賈胡之長有二。一曰牟良叔舍。一曰喜利志多佗孟太。手携一物。長二三尺。其為體也。中通外直。而以重為質。其中雖常通。其底要密塞。其傍有一穴。通火之路也。形象無物之可比倫也。其為用也。人妙藥於其中。添以小團鉛。先置一小白於岸畔。親手一物。修其身。眇其目。而自其一穴。放火。則莫不立中矣。其發也。如掣電之光。其鳴也。如驚雷之轟。聞者莫不掩其耳矣。置一小白者。如射者之接鵠於侯中。之比也。此物一發而銀山可摧。鐵壁可穿。姦宄之為仇於人之國者。觸之則立卷。其魄况於糜鹿之禍於苗稼者。乎其用於世者。不可勝數矣。時堯見之。以為希世之珍矣。始不知其何名。亦不詳其為何用。既而人名為鐵砲者。不知明人之所名乎。抑不知我一島者之所名乎。一日時堯重譯謂二人。人蟹種曰。我非曰能之願學焉。蟹種亦重譯答曰。君若欲學之。我亦罄其蘊奧。以告焉。時堯曰。蘊奧可得聞乎。蟹種曰。在正心與眇目而已。時堯曰。正心者。先聖之所以教人。而我之所以學之也。大凡天下之理。不從事於斯。動靜云為。自不能無差矣。公之所謂正心。豈復有異乎眇目者。其明不足。以燭遠如之何。而眇其目。乎。蟹種答曰。夫物要守約。守約以博見。為未至矣。眇目者。非見之不明。欲守其約。

藤川小四郎

金兵衛尉清定

以致之遠也。君其察之時。堯喜曰。老子之所謂見小曰。明其斯之謂歟。是歲重九之節。日在辛亥。涓取良辰。試入妙藥。與小團鉛。於其中置一小白於百步之外。放之火。則其殆庶幾乎時。人始而驚。中而恐而畏。之終而翁然亦曰。願學。時堯不言其價之高而難。及而求。蟹種之二鐵砲。以為家珍矣。其妙藥之擣篩和合之法。令小臣藤川小四郎學之。時堯朝磨夕淬。勤而不已。嚮之殆庶者。於是百發百中。無一失者矣。於此之時。紀州根來寺有杉坊某公者。不遠千里。欲求我鐵砲。時堯感人之求之深也。其心解之曰。昔者徐君好季札。劍徐君雖口弗敢言。季札心已知之。終解寶劍。吾島雖偏小。何敢愛一物。且復我不求自得。喜而不寢。十襲秘之。而况求而不得。豈復快於心。歟。我之所好。亦人之所好也。我豈敢獨私於己。而韞而藏諸。即遣津田盛物。丞持以贈。其一於杉坊矣。且使之知妙藥之法。與放火之道也。時堯把玩之餘。使鐵匠數人。熟視其形象。月鍛季鍊。新欲製之。其形制頗雖似之。不知其底之所。以塞之。其翌年。蟹種賈胡復來。於我島熊野一浦。浦名熊野者。亦小廬山小天竺之比也。賈胡之中。幸有一人。鐵匠時堯以為天之所授。即使金兵衛尉清定者。學其底之所。塞漸經時。月知其卷而藏之。於是歲餘。而新製數十之鐵砲。然後制。造其臺之形制。與其飾之如鍵。鑰者。時堯之意。不在其臺與其飾。在乎可用之於行軍之時也。於是乎家臣之在遐邇者。視而效之。百發百中者。亦不知其幾多矣。其

橋屋又三
鐵砲本州
に傳はる

鐵砲對東
に傳はる

後和泉界有橋屋又三郎者商客之徒也寓止我島者一二年而學鐵砲者殆熟矣歸旋之後人皆不名而呼曰鐵砲又矣然後畿内之近邦皆傳而習之非翹畿内開西之得而學之而已關東亦然我嘗聞之於故老曰天文壬寅癸卯之交新貢之三犬船將南遊大明國於是畿内以西富家子弟進爲商客者殆千人機師篙師之操舟如神者數百人艤船於我小島既而待天之時解纜齊擣望洋向若不幸而狂風掀海怒濤捲雪坤軸亦欲折吁時耶命耶一貢船傾覆惟化鳥有去二貢船漸而達於大明國寧波府三貢船不得乘而回我小島翌年再解其纜而遂南遊之志飽載海貨蠻珍將歸我朝大洋之中黑風忽起不知西東船遂飄蕩達於東海道伊豆州州人掠取其貨商客亦失其所船中有我僕臣松下五郎三郎者手携鐵砲既發而莫不中其鵠矣州人見而奇之窺伺倣慕有多學之者矣自茲以降關東八州暨率土之濱莫不傳而習之今夫此物行乎我朝也蓋六十有餘年矣鶴髮之翁猶有明記之者矣是知嚮之蠻種二鐵砲我時堯求之學之一發而聲動於扶桑六十州且復使鐵匠知製之道而徧於五畿七道然則鐵砲之權與於我種子島也明矣昔者採一種子之生生無窮之義名我島者今以爲符其識矣古曰先德有善不能昭昭於世者後世之過也因而書之また和漢三才圖會八十卷に大隅國多禮島俗作種子島或云多禮云云天長已前不攝國郡有能滿益教二郡如二島自

郡を合す

宗派

行程

〔名義〕

熊毛神社

○熊毛郷

天長元年隸大隅國而能滿合於取謨益教合於能毛多禮島人皆其寺法華宗日隆上人爲祖攝州尼崎本興寺也末院二字を寺字の下に落せるか凡東西十八里南北四里余北至大隅内之浦十八里亥子薩摩山川三十五里など見えたり

〔和名抄九卷〕に熊毛郡熊毛とあり、熊毛は久萬郡と訓べし、郡名熊毛も是を本にて負せたるべし、地理いまだ詳ならず是は必熊毛神社ある處を云なる

○幸毛郷

〔和名抄〕に熊毛郡幸毛とあり、いかによむべきか此郷事すべて詳ならず

○阿枚郷

〔和名抄〕に熊毛郡阿枚郷とあり、阿枚は安比羅とよむべきか、此郷事も詳ならず

○西村

〔南浦文集上巻(熊毛郡)〕に天文癸卯秋八月二十五丁酉我西村小浦有一大船不知自何國來船客百余人其形不類其語不通見者以爲奇怪矣云とあり、西村は爾志乃牟良と訓べし多禮島西にある地なればなり多禮島の事(和漢三才圖會)の地圖を考ふるに四て四村島間下田住吉よしの赤小水國上安佃けんわ升形坂井平山とつらねり國上と云は東方にあたり

○赤尾木津

〔所在地〕
外船漂着
多禮の地名

状況
所在地

〔南浦文集〕^(上巻國史記傳)に云、織部丞又書云此去十又三里有津名赤尾木、我所由賴之宗子世世所居之地也津口有數千戸、戸富家昌而南商北賈往還如織とあり、赤尾木は阿可乎伎と訓べし、名義詳ならず、「地圖」を按ずるに赤尾木は多爾島東北隅にある湊なり此湊より大隅郡大泊に十八里あり

島講師

○島分寺

〔類聚三代格〕に齋衡二年十一月九日太政官符云應置對馬島講師一事、右得太宰府解僱、民部省去十月十六日符、停止大隅薩摩對馬壹岐多爾等國島講師、自爾以降百余歳、徒有島分寺會無修善根、空聞六時之鐘聲、希見一乘之說法、方今大隅薩摩壹岐等國島依舊各置講師、始勤薰修、望請此國島亦講師令修御願、其供養以國官料不仕人糧内、因準品官、毎月充初二斛五斗但法服布施料準壹岐島以陸地物、彼施充者府解狀謹請官裁、者右大臣奉勅依請但依承和十一年四月十日格、以彼府管内僧選補とあり、島分寺今は詳ならず此島今はすべて法華宗なる由なれば島分寺も其宗旨にて傳はれるにや、もし島分寺今に傳はれる事あらば必尼寺處なればたゞしき事のみなり

供養料等

島内の宗派

○聖興寺

〔豐鐘善鳴錄三卷〕に無著禪師諱妙融族氏、日野隅州人也云、還郷坐夏靈山聖興

無著禪師

寺、九旬焚手香、端坐至夏末、喫粥次見香煙印鉢水發機作偈曰

靈山付囑絕言詮、迦葉破顏傳不傳、端的全提有何物、看看心月本孤圓、尋適薩之副田住菴、時值無外照公來寓隣里、師往呈所見、外曰爾今做工夫、如鑽火見煙、欲親達大道、須捨命一回、始得師開覺、如毒箭中心、退泣誓曰若無徹證分、不再參見、其夜坐至四更、豁然契悟、夜未曉急趨告外、從外開皇德、日商權宗旨外命繼席付衣叮囑

○熊毛神社

〔和漢三才圖會〕^(大隅郡)に大隅國熊毛神社在熊毛郡宮村、〔書紀通證〕に大隅國熊毛神社俗傳彦火火出見尊、〔神代三陵考〕に種島浦田社祭、葺不合尊などあり、^(武)に周防國熊毛なるべし、熊毛郡熊毛郷に祭れる神なるべし、いまだ考へず

所在地
祭神
浦田社

大隅之下(大隅郡・始羅郡・取謨郡・肝屬郡・熊毛郡)終

太宰管内志 大隅國并薩摩日向備考

○吉多ノ牧

〔三代實錄四卷〕に大隅國吉多野神二牧云とあり、吉多は詳ならずしひていはゞ與志陀と訓へべきかざる地名は世に多きものなり薩摩國鹿兒島郡吉田郷・大隅國夜久ノ島吉田村などもあれど是等にはあらしかなほよく考ふべし〔彦山人云〕鹿兒島城下近き吉田と云處ありて牧あり大隅との國さかひなりと云リ

○野神ノ牧

〔三代實錄〕に野神牧云とあり、野神は能加神と訓へし、地理詳ならず大隅郡櫻島郷野尻、曾於郡野口などありもし此邊に野上カミと云處はあらぬにや

○茂森

〔和爾雅〕名處に大隅國茂森とあり、茂森は志家理能毛利と訓へし、いまだ考へず

○安山寺

〔島隱集中卷〕に文明丙午隅州安山主盟雲夢禪師將有東京之行待船便於日州南浦口予偶在此向云云賦唐律一章見示以可擬修鳳之文不堪感謝次韻命筆禪文共熟老詩人、衆角何如一角麟、荒山未除初築地、來傾華蓋物皆新、

詩

所在地

所在地

〔訓義〕

大隅志跋

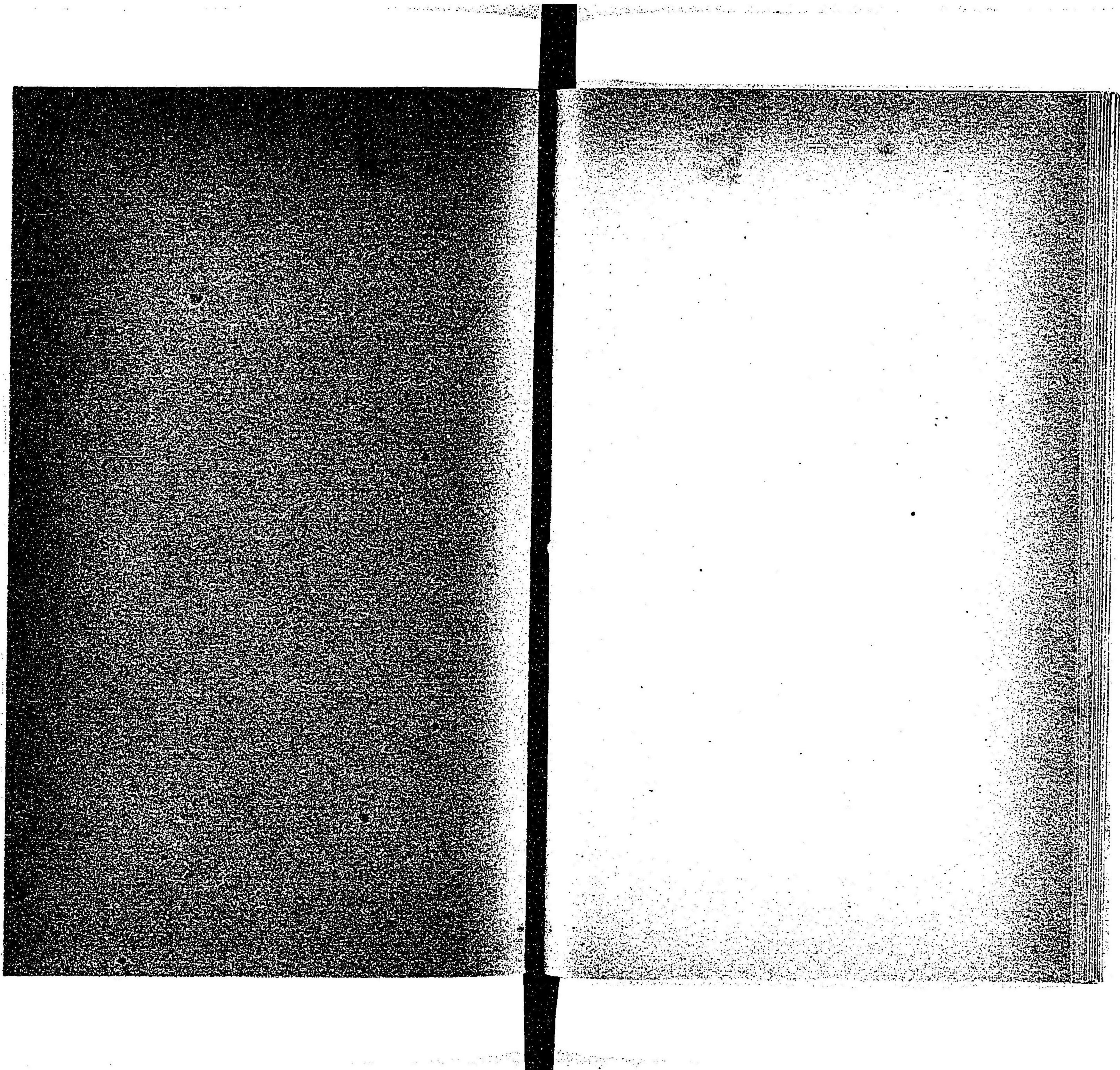
國爾郡有郡爾郷有郷爾里有者古代與理能定米奈理然有抒母今乃世爾至豆郡名者傳波禮杼母倭名鈔爾出有郷名乃全傳波禮留波開衣受爰爾大隅國等云者古爾日向國內四郡乎割豆澄給倍利志國奈留乎打日刺都與理波雲居成遠久放理豆筑紫之南爾片與理海片附多流國奈禮婆其國之知在人希那理然禮婆古久記世之書等乃地名母今波於哀呂氣爾能美成奴如斯豆我友伊藤常足翁者書乃道爾心乎志米豆古乎偲比今乎約也加爾志豆著波志給在典母數久有我中爾九國二島之事者古典乃限引出波多近世乃物爾繁久見衣多留乎毛摘取又自思依禮志筋乎母記志鹿玉之年月末爾久勤賜比豆其典成奴其乎太宰管内志等云往昔寧樂宮御宇

高瑞淨足姬天皇乃大御代國々爾於保勢天撰世給比志風土記若世爾傳波理此典爾合豆考閉豆婆詳爾往昔之事母知良禮末志乎等贈於郡乃會乎佐閉歎木杜乃奈氣加不折柄翁能母止與理契置都留大隅之事波伊加爾序也等有祁禮婆辭美難久豆又一渡讀波志豆此卷乃片端爾拙詞乎書添侍留南

天保十二年八月

德安惠風謹書

大隅志跋



薩摩志端文

抑平城宮馭宇天皇御代國々爾勅志豆風土記乎奉良世其後爾母撰世給比志事世々乃史爾見衣文永乃比麻泥者加都加都殘里志由奈留乎其比乃騷岐爾內日刺大宮所副爾玉乃緒乃亂爾美陀禮多禮婆燃火乃火中爾哉入爾氣牟弓弭乃驟爾也散失爾計牟大加多爾蹟奈久成而國々之舊事乎知爾由奈志佐禮婆伊藤翁是乎歟而先九國二島之事乎七十餘乃卷爾記而名乎太宰管内志登負世都會我中奈留薩摩之國志爾序乎物世余等乞布披見禮婆高千穗之峯乃高久阿我禮留御世從葦垣乃真近支比麻泥乃事乎薩摩乃迫門乎往通布潮乃以登疾久余利村肝乃心爾志米豆淺茅原都婆良爾物世利是乎往古乃風土記爾准幣豆其國々乃舊事騰母乎明良牟爾母晴多流空乃月乎見留心地序須倍伎風土記世爾奈久成爾多禮杼舊奴留蹟者止麻禮留哉阿波禮阿波禮此功伊豆禮乃人加保米邪良米耶伊豆久乃人加仰賀邪良米邪登彼老翁加乞閉流麻爾麻爾其片端爾書而加布流時者天保十二年登云年乃冬加久云者同國之人團尙務

名義

嶺南
唱更
華人

○京行朝
○允恭朝
額田部連
華人征
○孝德朝
遣唐船覆没

薩摩之上

○薩摩國

〔延喜式〕に西海道薩摩國あり、〔和名鈔〕に薩摩散豆萬とあり、名義詳かならず、〔神皇正統記〕に〔薩摩風土記〕に地神、代神使通時風波嶺々故號國とある由見たりされど是は古の傳とも聞えず、又〔同書〕に〔松下見林目〕〔據土記〕に薩摩、隱間（サチマ）也山經爲隱云云とあり隱は狹路の意なるかさて此説も古意にあらず、又〔同書〕に又曰追門と號して廣サ五十町長サ百餘町の水口あり云云とある此説はいかゞあらむ、さて〔加茂翁〕は薩摩は幸（サチ）島の意なるべしと云はれしなり此説は親く聞ゆ、〔東鑑十四卷〕に幸島、小次郎時村、薩摩九郎祐朝となりへあげたるも由ある事などにはあらぬにや、〔大和本紀〕には嶺南とかけり常足が思ひよれる事ども薩摩、追門の件に聊云へし、〔本居大人の説〕に〔拾芥抄改名所々〕の部）に薩摩國元へ唱更とあり、〔職員令華人司義解〕に華人者分番上下一年爲限云云とある意を以て其の唱更とは書たりしなり、〔續紀〕注）に今、薩摩國也とは續紀撰ばれし時の注なり、又云〔万葉集〕に華人乃薩摩、追門また華人の端門などいへるも國名なり其（ソ）を薩摩國とは後に改められたるなり、さて華人とは今の大隅、薩摩二國の人を云る中にも華人、國と云しは今の薩摩の域なるべし云云、さて國名の薩摩と改まりしは大寶より靈龜までの間なるべし其故は〔大寶二年の紀〕には唱更、國とありて〔養老元〕さて此國年の紀〕に始めて大隅薩摩二國、華人とある此薩摩は既に國名なればなりといはれしなり、

事の御世御世の書ともに見えたるは〔國造本紀〕に薩摩國造纏向日代朝代薩摩華人等鎮之仁德朝代曰佐改爲直、〔新撰姓氏錄〕額田部湯坐（ユ）に天津彦根命子明立天御影命之後也允恭天皇御世被遣薩摩國平華人、復奏之日獻御馬一疋額有町形廻毛喜之賜額田部也、〔清寧天皇紀〕に元年十月辛丑葬大泊瀬天皇丹比高鷲原陵于華人晝夜哀號陵側與食不喫七日而死云云、〔孝德天皇紀〕に四年七月被遣大唐使人高田根摩呂等於薩摩之由竹島之門合船沒死唯有五人繫臂一板

薩摩之上（國志）

薩摩之上(國志)

竹島

波邪 國司制 華人征 文武朝 して櫛を 建て皮を 置く

○齊明朝

○元明朝 華人の入 朝

○元正朝 番上人 滯京年限

流遇竹島不知所計五人之中門部金採竹爲筏泊于神島凡此五人經六日六夜而全不食飯於是獲美金進位給祿「職員令集解」曰薩摩大隅等國人初捍後服奉仕于君者名華人蓋華人時不從命故唐書以西南之地隼人所之島指名波邪爲有小王也「同書」に壹岐對馬日向薩摩大隅等國惣知鎮捍防守及蕃客歸化三關國又掌關剗及關契事「續紀二卷」に大寶元年十月丁酉唱更國司等今薩摩言於國內要害之地建柵置戍守之許焉先是征薩摩華人時禱祈太宰所部神九處實賴神威遂平荒賊爰奉幣帛以饗其禱焉「神代紀」に華人等始祖也また「一書」に云云是以火神岸命苗裔諸華人等至今不離天皇宮城之傍代吠狗而奉事者也とある是華人と云申の物に見えたる初なり又「清寧天皇紀」に元年十月癸亥大泊瀬天皇于丹比高鷲原陵于華人夜夜哀號陵側「典食不喫七日而死云云また「齊明天皇紀」元年蝦夷華人率衆内屬詔關朝獻など見たり是は大隅華人なるか薩摩華人なるか「同書四卷」に和銅二年六月癸丑勅自太宰率已下至于品官事力半減唯薩摩多爾兩國司國師等不在十一月戊申薩摩華人郡司已下一百八十八人入朝徵諸國騎兵五百人以備威儀也「同書五卷」に和銅三年正月壬子朔天皇御極殿受朝華人蝦夷等亦在列云云騎兵引華人蝦夷等而進丁卯天皇御重閣門賜宴文武百官并華人蝦夷奏諸方樂云云華人等亦授位同年□月戊寅薩摩國貢舍人一人「同書七卷」に靈龜二年四月辛卯太宰府言云薩摩大隅二國隼人已經入歲道路遙隔去來不便或父母老疾或妻子單貧請限六年相替並許之是は番上人を云なり又「類聚國史」延暦廿年停太宰府進

華人の歌

笠朝臣御 室華人を 征す

國司制

賑給

華人朝貢 ○聖武朝 華人朝貢

田制

國司制

華人朝貢

國司制

華人などあるは今來華人を云なるべし「職員令」に華人司正一人掌檢授華人及名朝教習歌舞とあり是は華人祖火爾降命の俳優の故事によれるなるべし番上人華人事も「職員令」に見えたり「萬葉集五卷」に薩摩 養老元年四月甲午天皇御西朝大隅薩摩二國隼人等奏風俗歌舞授位賜祿各有差「風俗歌舞」事は大隅「同書八卷」に征隼人副將軍從五位下笠朝臣御室養老五年十二月薩摩國人希多隨便并合六年四月丙戌征伐陸奥蝦夷大隅薩摩隼人等將軍以下及有功蝦夷并譯語人授勳位各有差始制太宰管内大隅薩摩云云等國有闕選府官人擁補之「同書九卷」に養老七年四月壬寅太宰府言日向大隅薩摩三國士卒征討隼賊頻遭軍役兼年殺不登交迫飢寒謹案云云事兵役已後時有飢疫望降天恩給復三年許之五月辛巳大隅薩摩二國隼人等六百二十四人朝貢「同書十卷」に天平元年五月庚辰薩摩隼人等貢調物癸未天皇御大極殿閣門隼人等奏風俗歌舞甲申隼人等授位賜祿各有差天平二年三月辛卯太宰府言大隅薩摩兩國百姓建國以來未曾班田其所有田悉是墾田相承爲田不欲改動若從班授恐多喧訴於是隨舊不動各令自佃焉「同書十一卷」に天平四年五月乙丑薩摩國司停止季祿衣服乏少並依請給之「萬葉集五卷」に薩摩見たり天平「同書十二卷」に天平七年七月己卯大隅薩摩二國隼人二百九十六人入朝貢調物八月辛卯天皇御大極殿大隅薩摩二國隼人等奏方樂壬辰賜二國隼人三百八十二人爵并祿各有差「同書十四卷」に天平十四年八月丁酉制大隅薩

薩摩之上(國志)

公麻 ○孝謙朝
 華人朝貢 ○廢帝朝
 丹治比真人
 薩摩公鷹白、同字
 志、同字
 大伴家持 ○稱德朝
 風害 天皇半人
 天皇半人の俗伎を
 覧らる
 免調庸 俗伎御覽
 風害 薩摩公鷹
 繼

摩云云等國官人祿者令筑前國司以廢府物給廢府は太宰府を
 十七年十一月庚辰制諸國公麻云云大隅薩摩兩國各四万束、〔同書十六卷〕天平
 寶元年八月壬午大隅薩摩兩國華人等貢御調並奏土風歌儺、〔薩摩神傳〕に薩摩大
 見たり委く河邊郡、〔同書二十一卷〕天平寶字四年正月戊寅從五位下丹治比真人木
 人爲薩摩守、〔同書二十五卷〕天平寶字八年正月丙辰大隅薩摩等華人相替授外
 從五位上前公平佐外從五位下外正六位上薩摩公鷹白薩摩公宇志並從五位下、前公と
 に把字など、己未從五位下大伴宿禰家持爲薩摩守、〔同書二十七卷〕天平神護二
 年六月丁亥日向大隅薩摩三國大風桑麻損盡詔勿救柵戸調庸、〔同書三十卷〕に神
 護景雲三年十一月庚寅天皇臨軒大隅薩摩華人奏俗伎外從五位下薩摩公鷹白加
 志公島麻呂並授外從五位上正六位上飯島華人麻比古外從五位上薩摩公久奈都
 曾公足麻呂大住直倭上正六位上大住忌寸三行並外從五位下、自餘華人等賜物
 有差、〔同書三十一卷〕に寶龜二年十二月甲戌太宰府言日向大隅薩摩多祿博士醫
 師一任之後終身不替所以後生之學術不進乞同朝法八年遷替以于祿永勸
 後學許之、〔同書三十三卷〕に神護景雲六年十一月丁酉太宰府言日向薩摩兩國風
 雨桑麻損盡詔不問寺神之戶並免今年調庸、〔同書三十四卷〕に寶龜七年二月丙
 寅御南門大隅薩摩華人奏俗伎、戊辰云外正六位下薩摩公鷹繼外從五位下、

○光仁朝

○桓武朝
 華人を襲
 田を收
 めて口分
 田を授く
 免租
 免賦
 免賦朝

税

免租

講讀師

〔同三十七卷〕に延曆二年正月乙巳製大隅薩摩華人等於朝堂其儀如常天皇御
 閣門而臨觀詔進階賜物各有差、〔今本後紀四卷〕に延曆十九年十二月辛未收
 大隅薩摩兩國百姓墾田便授口分、〔類聚國史八十三卷〕に延曆二十五年十一月乙
 未太宰府言管内諸國水旱疾疫每歲相仍百姓凋亡田園荒廢伏望特免田租以濟窮
 弊但隨損害一定年遠近一赦云日向大隅薩摩等者並免一箇年、〔同書〕に延曆廿年
 云事見 弘仁三年六月辛卯薩摩國蝗免進負稻五千束、〔同書百七十三卷〕に弘仁四
 年六月甲申大隅薩摩二國蝗免未納稅、〔同書百八十三卷〕に弘仁六年五月甲申薩
 摩國蝗免調庸田、〔今本後紀〕に六月甲申大隅薩摩云とあり、〔類聚三代格〕卷に弘仁十年五月廿一
 日官符云太宰管内大隅薩摩云等國島九月之内風水之損雖十月後行程之内特
 聽通計過程之外不聽判收自今已後立爲永例不得疎漏、〔延喜主稅式〕に
 凡檢損並不堪佃田賑給疾死等使程限云薩摩等國損田八十日不堪佃田六十日な
 どもあり〔後紀今十四卷〕國史百八に弘仁十年十一月丁丑薩摩國蝗免田租、〔類聚國
 史百七十八卷〕に弘仁十一年太宰府言管大隅薩摩壹岐等國島司言建國
 任職大小是同除灾祈福彼此不異如令此國皆有講讀師之職修正月安居等事而
 件國島既無講讀之職還失鎮護之助云勅講讀師者依講補任讀師者莫更置
 之但安居齋會之日依延曆二十五年三月格以國分僧次第請請之、〔續後紀五卷〕に

賜給
○仁明朝
丹比
足比
賜給

承和三年閏五月己巳朔戊寅若狹薩摩兩國飢並賑給、〔同書十二卷〕に承和九年七月癸巳朔戊午主膳正五位上丹堀比真人繩足爲薩摩權掾、〔同書十三卷〕に承和十年九月丙戌朔甲寅大隅薩摩並飢賑給之、〔同書十四卷〕に承和十一年夏四月壬戌太宰府言管大隅薩摩壹岐等國島選入任職大小是同除災祈福彼是不異方今此國皆有講讀師之職修正月安居等事而件國島已無講讀之職還失鎮護之助加以國分二寺雜物觸類頗多既無綱紀令誰檢領望請准諸國之例置講讀師者府司商量所陳有理望請准管內諸國博士醫師之例府司於觀音寺與彼講師共簡試部內精進練行智德有聞堪任講進終始無變者將補任之者勅講師者依請補任讀師者莫更置之但安居齋會之日依延曆廿五年三月格以國分寺次第講之、〔同書十五卷〕に承和十二年四月甲子有勅召配流入云薩摩權掾正六位上丹堀眞綱足云等一同聽入京、〔同卷〕に承和十二年七月太宰府言云望請國別減吏生一人置醫師一人加以元來此府有得業生四人准大隅薩摩云云國島之例監試得業生及第之輩以將充補、〔同書十七卷〕に承和十四年三月庚辰薩摩目大初位下山口忌寸奧道云等五人並改忌寸賜朝臣、〔類聚三代格卷〕承和十一年官符に應補任大隅薩摩壹岐等國島講師事右得太宰府解備件二國一島司等解備建國仕職大小是同除禍祈福彼是一揆如今此國皆有斯職修正月安

山口忌寸

○文德朝
孝女把前
○依寶
○清和朝
○宿禰
○直

菅野朝臣
宗部朝臣
安部朝臣
與氏
勒海國入
唐使の漂
○光孝朝
震光孝朝

居等之法而此國島既無講讀之職還失鎮護之勅加以國分二寺雜物觸類夥多既無綱維令誰主掌望請准諸國之例置講讀師仍請裁者府司商量所陳有理望請准據管內諸國博士醫師之例府司於觀音寺與彼講師簡試部內精進練行智德有聞堪任講進始終無變者將補任之謹請官裁者大納言正三位兼行右近衛大將民部卿陸奥出羽按察使藤原朝臣良房宣奉勅請師依請讀師莫置但安居齋會之日依延曆廿五年三月十七日格以國分寺僧次第請用、〔文德實錄五卷〕に仁壽三年七月庚寅朔丙辰賜薩摩國孝女把前福依寶爵三級云云、〔三代實錄六卷〕に貞觀四年正月十三日壬午外從五位下忠世宿禰眞直爲薩摩守、〔同書七卷〕に貞觀五年八月廿五日乙酉以外從五位下忠世宿禰眞直爲薩摩守眞直眞觀四年任薩摩守以母憂去職今詔起之、〔同書十卷〕に貞觀七年四月十五日乙丑從五位下行豐後介菅野朝臣宗範爲薩摩守、〔同書十六卷〕に貞觀十一年正月十三日辛未從五位下安倍朝臣興氏爲薩摩守、〔同書二十四卷〕に貞觀十五年七月先之太宰府馳驛言云渤海國入唐之使去三月着薩摩國逃去之一艦也、〔同書四十八卷〕に仁和元年十月九日庚申薩摩國言七月十二日夜晦冥衆星不見砂石如雨云、委くは開明神社の件に引出し、八月十一日震聲如雷燒炎甚熾、雨砂石滿地晝而猶夜、十二日自辰至子雷電砂降未止砂石積地或處一尺已下或處五六寸已上田野埋瘞人民

力士

○鎌倉時
代々木定綱

島津氏の
祖忠久

騷動至是神祇官卜云粉土之怪明春彼國當有災疫陰陽寮占云府邊東南之神當遷去於隣國由是蠶麻穀稼有致損耗是以下知府司令彼兩國奉幣部内衆神以祈冥助(井澤長秀云)太平記に播磨國住人妻鹿孫三郎長と申は薩摩氏長が末にて力人(此之時)努力之士左近衛阿刀根繼右近衛伴氏長相模之最手天下無雙とあり是太平記に所謂薩摩氏長なるべし常足按するに薩摩氏長が力士なる事は「故事談」には見えたり「類聚三」代格「卷」に寛平九年六月十九日官符云伏檢案内太宰府納管内公文之後更差(十二卷)使雜掌進官即今府雜掌辨申日向大隅薩摩壹岐對馬等三國二島公文亦令國宰辨申六國公文但朝集公文者總令府雜掌辨申而云云「東鑑十三卷」に建久四年十月廿八日佐々木左衛門尉定綱參著此程薩摩國流人也去三月十二日依舊院御一廻御佛事被免勅勘云云四月廿九日去月十二日被召返流人等佐々木左衛門尉定綱在之中由一條前黃門被申送之又彼弟經高盛綱等同言上其旨將軍家大歡喜給治承四年已來專顯勳功之間爲殊寵愛之處依山門訴訟去々年所被配流薩摩國也(南浦文集上卷)に島津高祖忠久公者右大將賴朝公第三子而始領國境内にて忠久をうむ其後忠久を薩摩國の守護となし給へりと「南浦文集の說」聊覽東なきに「同書十七卷」に建仁三年九月四日島津左衛門尉忠久被收公大隅薩摩日向等國守護職是又依能員緣坐也(薩摩會譜)に忠久始め後鳥羽院建久四年鎌倉大將家の仰を蒙り薩摩國に下し國務の沙汰せらるるに年本田上洛して忠久を向へて國に下る忠久先に當國出水の山か石庄内に移る右大將家の御教書に任せて薩摩其外大隅日向等國人等守護の下に隨はざる輩悉く退治して後鹿兒島に住

島津氏の
姓

島津忠義

島津忠綱

薩摩姓

島津久經

島津忠宗

すかごしまには失神と云者在りしを忠久をはほるはして愛に移れりと云、又「島津系圖」に右大將賴朝の七男ある内に比企判官能員が妹丹後局が腹に二人有り兄は島津宗兵衛尉忠久弟は若狭兵衛尉忠季是は承久三年宇治川の合戦に討死す云云(東鑑)にのする所には島津元惟宗姓也源氏にはあらず其家の系圖にも宗兵衛尉とのせられたれば惟宗姓たる事分明なりつれの比より源氏を名のるにや又系圖の如くなれば賴朝の御子なれば源氏たる事勿論也いかなる故にて惟宗姓を名のるにや又系圖の如くなれば賴朝の御子なれば能員が討れし時同日島津左衛門尉忠久大隅薩摩日向の守護職を收公せらる能員が故也と云云然れば此時に彼守護をやめられぬ、又「安貞元年の記」に豊後守とあり此には豊後の守護となれりしとみえたり「系圖」を按するに忠久が嫡男三郎兵衛尉忠久大隅守となりし事あり此時に再び大隅の守護となれりしなりべし「同書廿六卷」に承久四年二月云島津三郎兵衛尉忠義島津左衛門尉忠久(南浦文集上卷)薩摩日三州府君歷代歌に高祖忠久號三得佛始領三州日島津二世忠義稱道佛此時上古其風淳とあり「同書三十一卷」に文曆〇年云薩摩守公業法師(同書三十六卷)に橋薩摩與一公「同書三十八卷」に島津大隅前司忠時(又橋薩摩十郎公義と云も見えたり)「同書三十九卷」に寛治二年十月廿五日島津豊後左衛門尉忠綱以高麗山山柄一献將軍家甚色白而如雪其聲不相似吾國鳥幕府賞祇只此事也「同卷」に寛治二年云薩摩前司祐長「同書四十卷」に建長二年三月一日造閑院殿雜掌事云其目錄様云北弘御所島津豊後前司跡云河堰十二丈云薩摩七郎左衛門尉薩摩九郎「同書四十二卷」に寛元元年云島津大隅修理亮久時大隅前司忠時、又肥後四郎左衛門尉爲時肥後前司爲貞豐後三郎左衛門尉忠直豊後四郎左衛門尉忠經豊後四郎兵衛尉綱豊後三郎左衛門尉忠時薩摩十郎藤原祐房薩摩八郎祐氏など見えたりさて「南浦文集」に三世久經稱道忍攻七高部安我民給發町田其孫子伊集院亦骨肉与「同書五十一卷」に弘長三年云島津周防七郎定賢薩摩左衛門四郎祐家「同書五十二卷」に文永云薩摩左衛門四郎祐教島津周防七郎重賢「南浦文集上卷」薩摩日三州に云忠宗道義建長間都鄙謂之

元寇に對する戒嚴

島津貞久
島津貞久
僧俊雅

爲歌人、其子貞久名道鑑、舍弟六人國爲隣和泉、孫子今殆盡佐多、新納共相親構、山北郷今猶盛其中、獨浪道鑑有子號河上子孫至、今更說誠氏久齡岳六代主創建即宗亦未陳、〔島津家文書〕に異賊防禦、事鎮西地頭御家人並本處一同地輩從守護之催、且令加警固用意、可抽防戰忠功之由先度被仰下、畢而被定、鎮西奉行人等之間若不從守護命之族出來、歟如然之輩、雖致合戰不可有、其費可被處不忠也、早存此旨、可令相觸薩摩國中之狀依、仰執達如件、弘安九年十二月卅日相模守判陸奥守判、是は元寇の襲來をふせむための用意なり又爲異賊警固所下、遣兼時之家於鎮西也、防戰事加評定、一味同心可運籌策、且合戰之進退宜隨兼時之計、次地頭御家人并社領本所一國地輩事背守護人之催促、不一揆者可注申、殊可有其沙汰之由可相觸薩摩國中之狀依、仰執達如件、永仁元年三月廿一日陸奥守判相模守判、島津下野三郎左衛門尉殿、此二通古文書は氏久の時に當れりやたしかなる證はいふべく考ふべし、〔南浦文集上卷〕に元久怒翁創福昌一子爲僧戴、島巾有弟久豐號義天、挑惠灯來尙循循、忠國大岳其諱譽、深固院古裁松筠、舍弟樵夫薩摩守、題橋豐州武威純、〔本日本志二百四卷〕に筑紫探題北條英時亦爲少貳貞經所亡、正慶二年五月の事、時直塗窮投降于貞經、島津貞久因僧俊雅奏請貸請死復食邑、時直は長門探題に舉僧正俊雅と申せしは君の御外戚にておはせしを笠置の合戰の刻に筑前國へ流されておはしけるが今一時に運を開きて國人皆其左右に懷從ふ九州へ成敗勅許以前は暫く此僧正の請ひにありしかば小貳島津彼

○南北朝時代

○室町時代
異賊襲來
朝鮮との交通
島津盛久
島津持久
島津忠國

島津持永

島津忠國

時直を同道して降参の由をぞ申入ける云云〔太平記十四卷〕に建武二年島津上總入道〔同廿四卷〕に康永四年島津下野守〔同三十三卷〕に延文四年少貳島津大友等官軍に加はつて將軍方と合戦する事見たりと忠國・忠信の國などにか、〔南浦文集〕に出羽伯耆亦叔季、有五兄弟、德已均、忠國、宗子稱天勇、不嗣父位、異天倫、大年登公天勇子、齊名一瓢、德不貧、立久節山民具瞻、龍雲廟古猶薦蕪、忠昌四室諱玄鑑、寺名與國、近城園、〔後崇光院御記〕に應永廿六年七月廿日抑開唐人襲來既付薩摩之地、國人合戰唐人若干被伐云云、唐人中有如鬼形者、以人力難責云云、浮海上異賊八萬餘艘之由大内方之注進到來云云、〔海東諸國記〕に盛久丁丑年遣使來朝書稱薩摩州日向、大守藤原盛久、約歲遣一二船、持久丁丑年遣使來朝書稱薩摩州島津藤原朝臣持久、約歲遣一船、忠國、族親爲其管下、居島津、源忠國、丁丑年遣使來朝書稱薩摩三州太守島津源忠國、約歲遣一船、丁亥年以觀音現像又遣使書稱日隅薩三州、太守島津陸奥源忠國、國王、族親總治薩摩、日向、大隅三州事、持永、己丑年遣使來朝書稱薩摩州島津藤原朝臣持永、以宗貞國請接待、丁丑年は長祿元年なり丁亥年は應仁元年なり忠國は薩摩守元久の子にして忠國の子右馬頭友久なり姓は〔島隱集上卷〕に文明十二年也庚子云云次韻賀薩州閣下令子威釋童佛地初歩、釋氏宮中聖小兒、天華雨感末會時、祇同僧寶鎮家國、四海回風兩淡儀、〔續本朝通鑑百七十三卷〕に文明七年薩州島津氏入洛、謁義政、未幾而卒于洛云云、〔同書百七十四卷〕に文明十七年十二月薩摩守島津忠昌疾病請良醫於京師、義

名譽竹田
定憲

内証

島津貴久

島津勝久

倭寇
陳東

島津氏内

尙令竹田定盛往治之有驗而歸、〔島津集〕中卷、文明癸卯送大將竹田公、賦京師詩、方術如神、祖席題詩、待月、官船解纜、呼風、樓臺外無名、難入、其詩、中、とあるに、は定盛が下りしは文明十五年なり、〔本朝通鑑〕に文明十七年とあるは誤なり、今一首の詩に海外三州、都大守、東諫、三惡、固、吾城、心、清、若、石、山、川、氣、夢、櫻、櫻、門、風、雨、聲、閉、國、門、人、又、醫、病、論、天、論、命、却、論、兵、朝、廷、若、問、安、邊、策、功、在、島、津、華、誰、敢、爭、とあるをみれば、島津氏は此比早く三國守となれりしなり、〔南浦文集〕に忠治、蘭窓名津友、忠隆、與岳不終、晨勝久主、國國將、滅幾殺、忠臣、自沉、淪欲、讓、貴久、以、國家、國亂其約皆不、眞貴久老父問、誰某、一瓢之子稱、日新、日新、無、由、散、爵、憤、更、揚、義、兵、無、異、論、從、是、三、州、諸、家、士、仰、見、貴、久、一、悉、稱、臣、〔島津陸奥守忠國の〕子三人あり、嫡子忠治、二男忠隆、三男勝久なり、兄〔薩摩軍記略〕に云、自島津陸奥守忠國、五代弟三人家を傳へて皆守司守職をつかさどる、

至勝久相續領薩隅二州、其間家臣反逆親族戰爭等之事終不息、至勝久之時、政衰臣背而國將亡、八代忠國、子天勇、天勇、子一瓢、齋大年、大年、子日新、齋貴久、於、是、勝久以貴久爲義子、欲讓國之處、國中騷動之間、不果、其事、勝久大憤、激之、遂起義兵、討平國中、依之貴久爲國主、至其子義久、而彌強大也、〔國朝獻徵錄〕五十七卷、嘉靖丙辰徐海之擁、諸倭奴、而寇也、云、陳東者薩摩王弟故、帳下書記、會固未、能、之、也、云、とあり、嘉靖三十五年、我弘治二年にあたる、〔島津系圖略〕に云、當勝久之世、右馬頭友久之會孫陸奥守貴久、童名虎春丸、與勝久、不快之事有之、間貴久出奔于豊後、云、貴久後成當國守護職、其嫡男修理大夫義久、二男兵庫頭義弘、三男左衛門尉歲久、四男中務太輔家久、云、〔軍記略〕は九州軍記の誤なり、彼既に日新齋と貴久とを別人の如くに書るは誤なり

○戰國時

日向伊東氏の内証
大友宗麟
入寇

耳川合戦

島津勢肥後に入る

島津龍造守の和陸

り故に今文を改て是をひくきて初に引くる〔海東諸國記〕にいへる盛久、〔軍記略〕に天正初日向持久は友久、春久などなき、ひがめてかけるにやなほよくかむかふ、

城主伊東三位入道争領地、數年也、至天正五年春、伊東家臣爲返忠、引入島津勢、因是出奔于豊後、頼大友宗麟、天正六年九月、大友宗麟率四萬五千餘騎、一説に攻日向國高城、〔島津中務此〕城に籠れり、義久出陣于同國佐土原、而救高城、十一月十日、於同國耳川合戦、追崩豊後勢、討取二千五百余人、云、天正七年命島津圖書助、令働于日向表、天正八年三月、島津圖書助、新納武藏守攻日向國淺岡城、〔戸次宗榮が籠る城なり〕軍不利、云、至同年十月、日向地悉入島津之手、云、義久遣軍勢於肥後國水原小河内、自天正七年、至九年、攻之、宇土伯耆守行興雖防之、大軍難敵、遂與八代、相良修理大夫義陽、共爲島津幕下、九年六月、島津家諸將等於肥後國白川、邊、敗筑後勢、初秋、於同國水原、八代、宇土、川尻等之地、先構城郭、將治國中、龍造寺隆信、又以大軍、働于同國、因是島津修理大夫義久出陣于同國八代、其手、諸將島津兵庫頭、同中務少輔、同圖書助、伊集院左衛門佐、入木、新道牛尾、新納武藏守、伊勢長門守、出水、高城、肝付等薩隅二州之兵、士相繼于宇土、白川之邊、國中、士薩摩方、筑後方、相分合戰、無止時、雖、然、兩方、勝負未、相決、至天正十一年、自雙方遣和睦之使者、以肥後國爲一、以東南爲島津領、以西北爲龍造寺領、〔巴上〕九州治亂の說により、至同十二年、肥後、士背龍造寺、通志於島津、此時肥前國高來郡有馬左衛門佐亦屬島津、隆信

聞之大怒同十三年七月以大軍攻有馬有馬遣使於八代乞義久救義久欲救之大臣評論而曰今隆信爲猛將之上以大軍攻有馬當此時一出軍於遠方雖救之勝敗不可知之由申之義久曰諸將評論於說合戰之利害尤爲相當雖然今有馬被圍大軍乞援兵於我不救之而全我士卒以何爲義遂以舍弟中務大輔家久爲大將相添伊集院左衛門佐新納武藏守以三千餘人救有馬家久廻計略討崩隆信三萬余之軍遂討取龍造寺父子隆信を討取りしは川上左京亮人源藤井に左京亮が斷袖の約をなせし立石五郎右衛門二人にて隆信の首を討て川上に與へたりとも云り此家合戦の事委くは九州軍記(四國太平記)隱徳太平記等に見えたり(西國太平記)には五千人を以て救ふとあり義久隆信の首實檢せし事又其首を赤星周防守が榊室に送りし事など肥後志八代の件に引出たるをひらきみるべし肥後筑後之諸將悉下屬島津手同十四年義久在八代遣數萬軍兵攻落豐後國府内城筑前國岩屋寶滿高鳥居等之諸城云云(島津家記略)に義久至繼家大隅日向爲始至筑前筑後肥前豐前等之諸國悉討從之云云討亡大友左衛門督義鎮入道宗麟而欲并吞豐後國此時前日向守護職伊東三位入道舍弟民部大輔祐兵給仕關白家而望本國案塔天正十四年正月大友上洛乞島津退治之事義久亦以鎌田刑部左衛門尉爲使所討從之八ヶ國守護職於無相違者急令上洛可伺公于殿下之旨申之關白仰云於大隅薩摩爲本領之間相違不可有之於日向筑後肥後半國反大友以肥前附毛利以筑前可爲御領之由被仰下義久大怒催促軍勢欲

島津の援軍を破る

島津軍筑前に入る

秀吉の使者到る

秀吉大軍を發して島津氏を伐つ

島津肥後日向に退く秀吉薩摩島津忠辰秀吉に降る太平寺の木陣

攻入于豐後國、此年之冬爲關白之御使、仙石權兵衛秀久長會我部土佐守元親兩人下着于豐後、遣使於島津云近年所押領之國々任關白之御下知堅可相渡之由申之、義久彌怒擲捕關白使禁獄之以舍弟中務大輔家久爲大將相添二萬人令働于豐後十二月十三日於手合之合戰先追崩仙石長會我部大友等之軍勢討取長會我部信親乘此勢而大友家之諸城悉攻落之畢、關白聞召此由催促畿内畿外等之軍勢天正十五年春發京都給先陣下著于長州赤馬關家久聞之自豐後欲引退于日向、關白又有御使與山上人、色某二人來于豐後、府内對面於家久早止合戰可伺候于殿下之由述之家久更不從、因茲關白以二十五萬余騎分爲二手、大和納言秀長卿引卒山陰、山陽之軍勢云云經歷豐前豐後被發向于日向云關白引卒畿内、南海、北陸等之大軍、經歷筑前、筑後云云、(軍記略)に秀吉公爲島津征伐之先手、上方軍勢渡海于九州、地聞此由、島津勢捨諸城一手引入于肥後、地一手引入于日向地、同十五年四月秀吉公入于肥後國宇土給依之島津勢悉引入于當國、此度薩摩勢のきくちの事(隱徳太卷)に引けるを考ふべし、云秀吉公着船于當國出水給出水城中島津又太郎忠辰不及一戰降參五月四日秀吉公有着船于高城郡千代川以太平寺一定本陣給、(詳從五十一卷)に御評定着坐次等外大名在國衆(城國人)御相伴島津陸奥守武久同修理大夫義久、島津薩摩守義俊、自是川下至京泊諸將張軍營開轅

秀吉千代川陣營の状況

門於河上者九鬼大隅守嘉隆加藤左馬助嘉明脇坂中務少輔安治等浮警固之船艦京境商人船一萬許艘固船陣以九鬼加藤脇坂之三將爲三奉行於千代川掛船橋渡先手勢行程五六里而又造陣營其形勢造堤高一丈於其上造塙十間余如此者至十四五處以上馬三疋置內厩以廿疋置外厩於諸陣者構五尺築地以板葺陣屋二里四方之內小路縱橫通達於塙外並植梅櫻柳松楓自夫行先亦有二里許之大沼於此處又造橋渡諸軍〔隱徳本平記七十四卷〕又此時六條本願寺の門徒九國に充滿せり是に因て今度關白謀を以て本願寺を召すれりされば其謀早く功有て獅子島より千代へは山道にて道遠くしかと險難なるを獅子島の一向僧海上をへて捷徑のある事を教へける故諸軍勢心安く通りぬ其後ほどへて大關伏見に於て此事島津に物語有けるに島津國に還て彼僧を磯にかけ夫より其領内に一向の僧をおかずとあり於て是高城水引城兵等不戰下城次高江隈城兵等出人質降參于時平佐城主柱山城守忠防守城不降於關白以三奉行爲先陣則以軍船令押入于平佐城下川大軍一時攻上之間城兵出人質降參島津義久同義弘在日向國都於郡之處同國高城降于大納言秀長卿因之義久歸入于當國鹿島城在陣于同國求麻者等叛島津而可攻眞幸院之由有其聞之間義弘歸眞幸院飯野同國佐土原城主島津中務太輔家久乞降參會于秀長卿之本陣聞之所々城番等皆降參其後義久任一門之勸於伊集院之雪窓院祝髮改名龍伯出仕于秀吉公之御陣川内太平寺〔一説に此時龍伯木とを持せて來たりと云〕佐々陸奥守成政爲奏者堀左衛門尉秀政披露大刀云云右大將頼朝

義久日向より鹿島に歸る家久秀吉に降る

秀吉軍を回へす

忠元遂に風す

島津俊久害せらる秀吉封を分つ

公以來爲相傳之家之上以祝髮之故被指免其罪且以備前包平三條宗正二刀下賜龍伯其後伊集院右衛門大夫忠棟自成人質出仕日向國秀長卿之御陣於秀吉公過于千代川通那答院内山崎宮之院鶴田〔那答院七ヶ郡城あり〕打出于菱刈院會木至天堂尾被居御陣于時新納忠元在大口憤當國諸將降參之事且於大口難所支秀吉公之軍勢因是龍伯兩度遣使勸降參忠元遂以實子爲人質出仕于秀吉公之御陣云云以長刀一柄下賜忠元秀吉公自天堂尾通堂崎大口戸神之道給之時忠元出送之秀吉公以御道服并修羅扇手賜忠元自此處通平泉上場入肥後國八代給云云龍伯降參之事聞于眞幸院之間義弘歸入于鹿兒島其外右馬頭征久等諸將馳參于鹿兒島其後龍伯女子一人及義弘嫡子一人又一郎久保舍弟右馬頭征久子又四郎彰久同苗圖書頭忠長等國中城主皆出人質令上洛島津左衛門大夫俊久依有瘵覺病無出仕依之秀吉公命黑田孝高被害之〔南浦文集上卷〕大關殿下西征之時歳久有瘵覺之疾而不得出頭時有二婦者以不正其罪而害歳久去歳久不幸云云秀吉公至筑前國定九州之配分賜先以島津家本領大隅薩摩二國及日向國諸縣一郡賜龍伯義久又以日向内都於郡佐土原三納穂北富田等之三所賜島津家久又以眞幸院賜島津又一郎久保云云天正六年冬肥後國人等發一揆背守護佐々陸奥守成政於是兵庫頭義弘蒙關白仰卒軍

義弘新築の營海人蘇八飛脚島朝鮮陣の功賜

島津伊集院の和時○徳川

關原役と島津氏

本領安堵

欲下抽兵密逃呂宋淡水等處旁觀成敗機露事不諧卒與武庫同行云云十二月又下令西海道九國爲先鋒其入村喜戰云云董一元任中路統率所部居尙州中路倭將薩摩州義弘素號狡悍而望津之寨尤爲天險北倚晉江一江也東築永春西築昆陽三寨鼎立爲特角皆峙于新塞之前新塞三面環海一面通陸石曼子義弘居之云云島津領後一千征之蘇八島征至金柏州海島親見關白云云とありす此書にいへる事ども心得がたけれど委考「軍略記」に慶長四年正月九日依朝鮮軍功一被加賜義弘之所領忠恒任四位少將三月九日忠恒於伏見館一俄誅家臣伊集院右衛門大夫入道幸侃自憚其罪蟄居于高雄麓其後忠恒得歸國於是幸侃子伊集院源次郎楯籠于日州庄内城與主人忠恒合戰云云因關東之台命山口勘兵衛寺澤志摩守令和睦主從之間依之源次郎降參慶長五年義弘與石田三成馳向于關東之處身方敗軍而猶子中務大輔豐久戰死義弘以家人河上四郎兵衛忠見乞關東之御宥免忠見參陣申置願之趣意直到大坂一浮船取乘島津父子之妻子下于日向云云加藤清正黑田孝高自肥後國押寄于當國堺龍伯就福島正則不存一心之由申之依是以台命先被召歸加藤黑田之兩將龍伯直上大坂可申開無罪之趣因爲病氣以鎌田出雲述愁訴慶長七年四月十七日賜本領安堵之御敕書於龍伯乍病中企上洛之處因伊集院之謀反爲

忠恒家康に賜す近衛家と島津氏

忠豐と義弘

琉球征討

退治之不見果其事十二月二十八日忠恒於伏見拜謁于大御所十一年九月一日再於伏見遂拜謁此日賜御家號御諱字號松平家久初號初榮白石先生に近衛關白前久公永祿十一年忽武命に違はせ給ふ事有御出奔あり此年十二月六日關白を止られ給ひ忍て丹州に御坐ある事凡十五年天正三年六月廿八日に御歸洛あり同年九月廿日又薩摩國に御下向あり世俗に流され給ひしなりといへり島津がもとに御坐在し事にして天正五年二月廿六日に御歸洛ありて四月廿日始めて御出仕あり此年月のよしみ依て慶長五年の秋關原の戰に島津打負て本國に歸りし時彼が從類を御所の内に深く隠し匿せ給ひしなり島津又此事を悉き事「南浦文集」に慶長戊戌之秋大閣公薨矣翌年おもひて此後御家禮のよしみ代々深しとかや「南浦文集」に慶長戊戌之秋大閣公薨矣翌年有石田治部少輔者大閣公之驍臣也寡關以西之諸將以爲祖肩於秀頼幼君將有事於關東諸將亦感大閣公之深恩也無一人而不從之者兵庫頭義弘亦雖感恩則有之然不覺斯兵事之當與否諸將之僉儀亦獨可奈之何哉不得已而勉強從諸將之謀矣忠豐雖在諸將之列不與諸將共而如臣事於義弘公者無一日不在其幕下矣既而諸將屯陣於濃州關之原忠豐獨在義弘行列之中於是關東亦將出兵馬於西京兩軍偶然會於關之原兵刃既交而爭兩雄者半日程矣吁時耶命耶我諸軍一時瓜潰矣中書公爲其年壯有血氣之勇單騎而赴關東諸軍一戰而結子路之纓東西諸將無不嘆惜之者皇明世法錄八十卷に萬曆三十七年薩摩州倭侵琉球虜其王四十年遣使復修貢報中山王業反國「異稱日本傳」に天文十七年五月廿七日琉球國王上關白殿下書曰承聞日本六十余州拜下及一禮島津破久公使大慈寺兩院和尚有命故差上天龍橋巷和尚明如檢物當國土宜輕薄之進物錄于別格爲送一禮也恐惶不宣とあり是に因て考ふれば琉球人の來貢する事は慶長より遙に古くよりの事

義久卒去

明朝に對する家久の上書

福建軍門に宛てた琉球國王尙等の上書

と聞ゆされども萬曆三十七年は皇國の慶長十四年に當りて則島津琉球を征伐せし年なりなほよく考ふべし
 月十一日浮于南洋一攻落大島德島等之地四月朔日到于那霸津討敗琉球之兵
 二月三日生捕中山王歸于本國注進此由於關東七月大御所以琉球賜家久
 又賜御教書於義久義弘家久被賞其功同十五年八月八日家久具中山王到于駿府拜大御所廿八日參謁將軍家十六年十二月十九日義久入道卒去
 七十八歲也大阪兩度合戰依海上不穩遂不參陣(南浦文集卷中)に日本國薩摩州刺史藤原家久謹上書大明國天使兩老大人鈞座下伏以天使奉詔命不憚萬里鯨波遠到於琉球小島云自今以往年々使中華商船來於我薩摩州阜通財賄何幸加之然則皇恩德澤當永矢而弗諼矣云(同卷)に琉球國王尙等上書大明國福建軍門老大人閣下恭審小邦去日本薩摩州者僅三百余里以故三百年來以時獻不腆方物修其隣好頃有不肖畜夫諼其真期是故薩摩州進兵於小邦小邦荒墟者誠天之所命而我亦以無苞桑之戒也不幸而為其俘囚在薩摩州者三年矣參州君家久公外好武勇內懷慈憫云云一以使日本商船許以客之大明邊地二以使大明商船來我小邦交相貿易三以使一遣使年々通其貨之有無者匪翅富兩國人民大明亦無為倭寇嚴備兵衛矣三者若無許之令日本西海道九國數方之軍進寇於大明大明數十州之鄰於日本者必有近憂矣是皆日本大

琉球國王に宛てた家久の書狀

樹將軍之意而州君所以欲通兩國之志者也(同卷)に呈琉球國王書貴國之去我薩州者二百余里其西島東嶼之相近者僅不過三十余里以故時々有聘問聘禮以修其隣好者其例舊矣就中我宗子之嗣而立則畫青雀黃龍於其舟以使紫其衣者黃其巾者二人為其使節厥玄黃來而結髻於右髻之上者奏樂於庭際蓋致嗣子之賀儀也今也遣崇元寺長宜讓里主載其方物來以賀我家久之嗣而立又攀舊例也我今寄言於國君勿以我之言厭之日本六十余州有源氏一將軍以不猛之威發其號令尺土無不獻其方物者一民無不歸其幕下者是故東西諸侯莫不有朝覲之禮我今雖去鹿府之任每歲使親族之在左右者行以致其聘禮况家久為國之宗主豈不述年々之職乎貴國亦致聘禮於我將軍者豈復在人之後哉先是我以此事告於三司官者數矣未聞有聘禮是亦非三司官懈於內者乎今歲不聘明亦懈者欲不危而可得乎哉且復貴國之地鄰于中華中與日本不通商船者三十餘年于今矣我將軍愛之之餘欲使家久與貴國相談而年年來商船於貴國而大明與日本商賈通貨財之有無若然則匪翅富於吾邦貴國亦人人其富潤屋而民亦歌於市井於野豈復非太平之象哉我將軍之志在茲矣是故家久使小官二人告之於三司官三司官不可將軍若有問之則家久可如之何哉是我夙夜念茲而不措者也古者善計國

○大樣
神社
府邑

田數

境域

明朝との
交通路
倭寇

計家者雖大事、小者有隨時之宜、而爲之者、况復小之事、大者豈爲之背、於其
 理、哉其存焉與、其亡焉共在、國君之舉、而已伏乞圖之、など見えたり、さて地理
 物産等大様、事は「延喜神名式」に薩摩國二座、出水郡一座、小加紫久利神社、類娃郡一
 座、小枚聞神社、「民部省式」に薩摩國 管十二、出水郡、高城、薩摩、日置、伊作、河、和名抄
 五卷」に薩摩國管十三、田四千八百余町、正公各八萬五千束、本額二、出水郡、高城、薩摩、
 古之木、日置、比於、伊作、久、阿多河邊、乃倍、類娃、乃、揖宿、須岐、給黎、比、
 〔拾芥抄〕に薩摩國中遠田五千五百廿一町、「海東諸國記」に薩摩州産、硫黄、郡十三
 水田四千六百三十町、「圖書編五十卷」日本に大隅之西爲薩摩、爲三百六十里、其
 記、爲三千里、高、薩摩、何、爲、把馬里、爲、強、云、南至琉球、也、必由薩摩州、開、洋順
 風七日、其貢使之來、必由博多、開、歷、五島、而入、中國、因、造、舟、水、手、俱、在、博多、故
 貢船回則、經、收、長門、因、抽、分、司、官、在、焉、故、也、若、其、入、寇、則、隨、風、所、之、東、北、猛、則、由、薩
 摩、或由、五島、至、大小琉球、而、視、風、之、變、遷、北、多、則、犯、廣東、東、多、則、犯、福建、云、向、之
 入、寇、者、薩摩、肥後、長門、三州、人居、多、其、次、則、大隅、筑前、筑後、博多、日向、攝摩、津州、紀伊
 種島、而、豐前、豐後、和泉、之人、亦、間、有、之、乃、固、之、商、于、薩摩、而、附、行、者、也、日本、之、民、有、貧
 有、富、如、薩摩、伊勢、若、佐、博多、其人、以、商、爲、業、地方、皆、風、景、恰、如、中、華、富、者、
 邑、長、安、慶、能、納、兵、於、船、物、無、一、人、爲、三、又、如、三、宮、島、人、不、嗜、殺、人、有、不、平、事、一、但、富、而、淑、者、或、登、貢、船、而、
 詣、薩、摩、則、財、貨、又、如、紀、伊、之、頭、陀、僧、三、千、八、百、佛、尊、習、武、藝、一、殺、人、而、不、犯、中、國、一、富、而、淑、者、或、登、貢、船、而、

産物

港灣

驛程

産物

刀匠

來或登商船而來凡在寇船皆貧與爲惡者也、薩摩津州とあるは薩摩津津と有りけむがま
 らず、「兩朝平攘錄」卷に薩摩沿海黒沙煎出、鐵又出、花布、また日本薩摩州與
 浙江相對、「武備志」二百二十三卷に薩摩州山川、港坊、津、港、泊津、港、久志、
 洪、秋日、港、片浦、小松原、申木野、京泊、阿久根、「和漢三才圖會」八十卷に薩摩國
 云、白銀坂、有、特、大、隅、薩摩、薩摩鹿兒島、伊集院、市、來、一、串、木、野、向、田、水、引、有、
 八、幡、宮、自、高、城、三、西、肩、三、里、阿久根、二、里、野田、一、高、風、野、一、井、手、水、一、米、津、有、番、所、薩摩、肥後、之、界、
 二、町、或、三、云、云、などあり、次に産物等、事は「延喜、主計式」に薩摩國、行、程、上、二、調、鹽、
 三、解、三、斗、自、余、輸、綿、布、一、庸、綿、紙、席、中、男、作、物、紙、丁、紙、凡、諸、國、輸、薩、摩、國、丁、紙、三、枚、一、
 之、「同主稅式」に薩摩國正稅公廨各八万五千束、國分寺料二万束、同十一面觀世音菩
 薩燈分料一千五百束、文殊會料一千束、修理官舍、料二万束、救急料三萬束、「和名抄
 五卷」に薩摩國云、正公各八萬五千束、本額二十四萬二千五百束、「和漢三才圖會」に
 薩摩國土産、人參、菝葜、樟腦、硫黃、紅花、紫根、棕、梛、皮、黃、揚、印、信、及、棉、大、名、筭、四、時、赤、芋、
 太布、芭蕉布、櫛、世、云、洪、武、錢、鹿、皮、牧、駒、泡、盛、酒、海、人、草、煙、草、國、木、蠟、肉、桂、川、内、本、朝、鍛
 冶考八卷」に「薩摩國鍛冶系圖」正國、一條、御、宇、永、延、本、國、大、和、御、劍、作、行、忍、同、御、宇、長、和、正、國、
 保元之法、安綱、三、條、御、宇、長、安、國、同、御、宇、長、和、行、仁、同、御、宇、正、國、門、人、或、鳥、羽、御、宇、天、永、安、光、三、條、御、宇、長、和、寬、
 とも云、安綱、和、正、國、門、人、安、國、寬、仁、同、門、人、行、仁、正、國、三、男、とも云、元、曆、行、忍、とも云、安、光、仁、正、國、門、人、
 安俊、後、朱、御、宇、長、安、光、子、或、高、倉、行、安、一、條、御、宇、寬、弘、正、吉、宗、後、一、條、御、宇、萬、壽、行、安、長、光、後、冷、泉、御、宇、永、
 御、宇、安、元、中、同、名、一、人、有、と、云、行、安、國、門、人、谷、山、住、吉、宗、子、或、助、近、孫、とも云、長、光、承、吉、宗、子、或、

薩摩之中

○出水郡

〔名義〕

泉長比賣

出水の連

遣唐船の寄泊伊佐泉姓和泉越前

薩州大守の信佛

〔延喜式〕に薩摩國出水郡あり、〔和名抄〕に薩摩國出水は伊豆美とあり、名義詳かならず、土中より涌出る水など有て負せたるか〔和名抄〕さて〔古事記中卷〕に品隨和氣命坐輕に越前國大野郡出水郷なども同意なるべし島之明宮治天下也云云又娶日向之泉長比賣生御子大羽江王次小羽江王次幡日之若郎女云云、〔應神天皇紀〕に次妃日向泉長姫生大葉枝皇子小葉枝皇子、此比は大隅薩摩をかけて日向といへりしなり、〔新撰姓氏錄左京諸蕃〕に出水連出_前自高麗國人那能致元之後也、〔續紀三十五卷〕に寶龜三年十一月遣唐使伴二船到泊薩摩國出水郡、〔東鑑十五卷〕に云伊佐三郎泉八郎、〔島津系圖〕に島津上總介忠宗二男忠氏、出水之祖也云云、〔島隱漁唱上卷〕に扇面爲和泉越前翁能歌詠

沙禽影暗浦村烟、隔岸掣音繫釣船、人挾歌詞坐舒嘯、淡山落月晚猶懸、早は文明十三年なり〔島隱漁唱文明中卷〕に薩州閣下茲年之夏、嚴付肉味禁酒事、其守恰若浮圖法、鵝雪蠟水人孰窺、其班乎故門無雜客、座無漫士禪三昧之外或出魯論、或寫唐詩、字裡金生行間玉潤、使讀者快然也頃居泉之衙内、官務雖夥、佛乘亦

勸、親拾小石以贖七軸之蓮經、外護之信我可、其不喜尚乎一日遊山之次得佳木、制以爲靈杖、遠託飛廉而見、投贈焉予也衰老之甚蒙此扶持之力、何賜過之耶於、是作詩一章、答仁恕之萬一云

大士高居菩薩泉、封内如掌鎮山川、太守欲致安邊策、貴戚須依希世賢、當時讓國非一度、太白可謂至德全、仁風義氣滿海外、人馬度乎天下傳、戲唐元自不爲虐、向人懷抱軟於綿、湯餅齋孟斷酒肉、工夫密密石盤穿、風流渠昔誰相似、在家學僧黃庭堅、爐背沈檀香馥郁、塔前修竹綠嬋娟、雜客不來多閑日、啼禽呼醒午窓眠、魯論唐詩供戲筆、卷帙作堆字々鮮、故信佛書可贖寫、石上花開七軸蓮、何又區々勞心力、出門一笑海山連、登臨時効謝公履、車服不巾馬不鞭、兒童六七後冠者、詩客兩三先老禪、出谷口兮入谷口、登山巔兮下山巔、蒙密穿束得佳木、曾託老根大極先、旁枝宛轉又宛轉、莓苔爲衣藤蔓纏、截作君家多壽杖、銅頭鐵尾響鏗然、響下殘桐能幾尺、一曲兩曲繩以絃、青蛇潛蹤豐城嶽、夜々寒光射斗躔、非雷張華與蔡邕、知者視物不棄捐、袈裟近下兔裘地、秋風破扉第三椽、回首故鄉千々里、孤客飄々誰又憐、誰又憐有裴君子、三年懷惠感二天、此枝非輕萬金賜、珍重仁恕扶衰年、四海九州蹤耐跨、吳百越夢相牽、寇賊犯

神階

三月廿日庚午薩摩國從五位下賀紫久利神授從五位上、「同書十卷」に貞觀七年五月廿五日乙巳授薩摩國從五位上賀紫久利神正五位下、「同書十二卷」に貞觀八年四月七日辛巳授薩摩國正五位下賀紫久利神正五位上などあり、「國人云」賀紫久利神社は出水郷平松村にありと云り祭神祭日神官等事いまだ考へず或人は賀紫久利神住吉大神を祭れりと云へれど「式」に一座あれば此説はうけがたし

○加志

〔續紀十卷〕に天平元年七月大隅薩摩軍人朝賀一件加志君多利外從七位上、「同書三十卷」に神護景雲三年十一月大隅薩摩軍人外從五位下加志公島麻呂授外從五位上とあり、「神代紀下卷」に鹿葦津媛とあるも鹿葦は加志と訓むべき例なればこの加志に由ある事にはあらざるか考ふべし、加志地いまだ詳ならざれども「國人説」に古老傳に上古に出水郡加志地主たりし人靈を祝て加紫久利神社とす久利は君と云意なりと云傳へたりと云り此説によりて暫く此處に擧て後考をまつになむ、ハ君の意なりと云事おほつかなけれど「書紀」に村主をスクリと訓めるなど聊よしありけに聞ゆ、

○櫟野驛

〔延喜兵部省式〕に薩摩國櫟野驛あり、櫟野は加志能と訓ふべし、「字鏡」に櫟ハ加志乃木ともあり、名義は櫟木の多生たる處にて負せたるべし地理詳ならざれども加志君例にて暫く

加志の君
多利
加志公島
麻呂
鹿葦津媛

加紫久利
神社祭神
に關する
傳説

〔名義〕

和歌

此處に擧つ、今も此郡に阿久根・野田・高風野・出水等驛あり高風野ハ高櫟野をつたひがみたるなどにはあらぬにや、
○隼人迫門

〔萬葉集三卷〕に長田王作歌一首

隼人乃薩摩乃迫門乎雲居奈須遠毛吾者今日見鶴鴨

〔同書六卷〕に神龜五年帥大伴卿遙思芳野離宮作歌一首

隼人乃湍門乃磐母年魚走芳野之瀧爾尙不及家里

〔夫木集〕に公朝

薩摩湯迫の早みの潮さゝるは只漕過ぎよ礎ちろさて

などあり、「和名抄」に出水郡勢度郷あり、「鹿島」人鮫島氏云「隼人迫門は出水郡

所在地
くろの迫門

出水郷にありて長島に渡る處なり是をくろの迫門といふ、「彦山僧立辨曰」隼人迫門は出水郡阿久根より同郡長島に渡る間のせとなり今は黒迫門といふ肥後國葦北郡方より坊津にゆく船の必通るべき所なり潮の満干にはえもいはず瀬の早き所にて船人の恐るゝせとなり、常足按ずるに此大伴卿の歌は帥と成てこの國々をめぐり給ふ時に見てよみ給へるなるべし大伴卿の薩摩守と成給ひし事は「袋冊子」にひける「家持卿の傳」に天平寶字八年正月薩摩守神護慶雲元年八月太宰大貳とあり、神龜五年より是まで三十六年に及ぶ天平寶字は天平と取ちがへたるに

てもあるべし大貳とあるはうけがたし、

○山内郷

〔和名抄〕に出水郡山内とあり、山内は也万宇知と訓べし、名義は山懐にある處などにて負せたるべし今は郷地詳ならず、

○勢度郷

〔和名抄〕に出水郡勢度とあり、勢度は世登と訓べし、〔和名抄六卷〕に駿河國益津郡西刀止ともあり、名義は迫門にて隼人、迫門より起れりと聞ゆ今此郷は絶て出水郷となれりし由なり、隼人、迫門、件を考合すべし。

○借家郷

〔和名抄〕に出水郡借家とあり、借家は加志也と訓べきか、〔國人〕既に昔此郡に加志義地理ともに詳ならず、標に由ありて負せたるにもあらむかなほ標野驛、件考ふべし。

○大家郷

〔和名抄〕に出水郡大家とあり、大家は於保也と訓べきか、されども〔和名抄七卷〕に上野家〔同九卷〕に豊前國下毛郡大家にハオホヤケかなを付たりなほよく考ふべし。 名義地理ともにいまだ詳ならず、

○國形郷

〔和名抄〕に出水郡國形とあり、國形は久爾加多と訓べし、名義地理ともにいまだ

〔名義〕

〔名義〕

詳ならず、

○英禰驛

〔延喜兵部省式〕に薩摩國英禰驛あり、〔武備志〕に薩摩州阿久根とあり、英禰は安具禰と訓べし、名義詳ならず、〔和漢三才圖會〕に薩摩國西肩三里半阿久根二里半野田、〔鄉村帳〕に出水郡阿久根郷あり、

阿久根

○高城郡

國人はタキノコホリと唱ふるなり

〔名義〕

〔延喜式〕に薩摩國高城郡あり、〔和名抄〕に薩摩國高城、太加木とあり名義いまだ詳ならず、高木(タカキ)又高山(タカキ)などの意にてもあらむか山を 〔軍記略〕に五月四日秀吉有、著、船于高城郡川内川、云、高城水引、城兵等不、戰下、城、〔南浦文集上卷〕に云、於、朝鮮征伐之時、義弘與、其子忠恒、走從、其軍、數年之間、勞、於、軍務、云、大閤殿下、爲、賞、其功、賜、親子、以、寶劔、且復賜、薩州之地和泉、高城二郡、以爲、其履、矣、などあり、さて郡、大様、事は〔和名抄九卷〕に高城郡合志、飽田、樽木、宇土、新多、託萬、巴上、六郷、な、〔寛知集〕に高城郡云、八村、〔和名抄〕に出たる郷名の内、樽木、新多の二郷は高城郡、内なるべし、其余の四郷は肥後國の郷名の混入したるにて高城郡にさる地名ある事なし、〔鄉村帳〕に高城郡高城郷、標、城、上、參、、浦、湯、田、口、、西方、、水引郷、五代、大小、路、、宮内、細津、、などあり、〔與

秀吉高城郡に入る
和泉高城
二郡を義弘父子に
賜ふ様
村邑
郷

所在地

所在地

強頭馬里
鹿頭馬里

〔名義〕

爲ニ法華滅罪之寺云云とあり、是も國分村中にあるべし今は其趾絶て詳かならずと云、〔和漢三才圖會〕に薩摩國一乘院在ニ高城一眞言

○榑木郷

〔和名抄〕に高城郡榑木とあり榑木今は詳ならず、強て考ふるに榑は音ウツなるをイチに轉用し、たるとは市木にはあらざるにや榑をウチれど是ハ川内河の南にて高城郡ノ界に遠ければいかゞあらむ、

○新多郷

〔和名抄〕に高城郡新多とあり新多ハ仁比太と訓べし、名義ハ詳ならずもし費用に由ある處にはあらざるにや、〔舊事本紀〕五卷に筑紫費田物部あり、さて此郷地今は詳かならずされども今の新田八幡宮の邊を云なるべし、新田八幡宮ハ今ノ水引、郷ありて初に云るが如し、

○京泊

〔圖書編五十卷〕に薩摩州強頭馬里とあり、〔輿地圖〕に高城郡京泊あり、〔武備志二〇二十三卷〕に薩摩州京泊あり、京ハ吳音に唱ふべし泊ハ登萬里と訓べし、名義ハ詳ならず、しひていはゞ古に京方の船をつげし津などにて負せたるか筑前國宗像郡に京泊と云所のあるを〔海東諸國記〕に神島とかき〔圖書編〕にハ經字里と書

○薩摩郡

〔延喜式〕に薩摩國薩摩郡あり、〔和名抄〕に薩摩國薩、散豆萬とあり名義は初に云

薩摩公鷹白
薩摩公久奈都
薩摩公豊繼
○大様村邑

境域

川内河

るが如し、されども此郡ノ名を元にて國ノ名にもなれりしなるべし又一ツ思ふに大隅ノ國附於〔續紀二十卷〕に外從五位下薩摩公鷹白云云、外正六位上薩摩公久奈都〔同書三十四卷〕に外正六位下薩摩公豊繼云云、郡ノ大様事は〔和名抄九卷〕に薩摩郡、避石、幡利、日置、〔寛知集〕に薩摩郡云云、三十三村、〔郷村帳〕に薩摩郡伊集院、藤生田、中川、山猿、清

郡村、桑畑、徳重、野田、谷口、春山、土橋、石谷、有屋田、福山、上、市木郷、大里、川上、湊、神ノ川、長、申木野郷、神ノ川、下神ノ川、入佐、神ノ川、飯平、宮内、古城、苗代川、市木郷、里養母、湯田、伊田、羽島、荒田、下名、百次郷、田崎、山田郷、山隈之城、東年、宮、中郷、東郷、南瀬、山崎、芦淵、樋脇郷、市比、などあり、〔輿地圖〕を考ふるに薩摩郡ノ地東は大隅國桑原郡南は當國鹿兒島郡日置郡にとり西は海を限とし北は高城郡伊佐郡に隣て東西十余里南北七里余にして郡中に大河あり日向國諸縣郡より出て大隅國菱刈郡當國伊佐郡を経て當郡に入て西ノ方海に入る是を川内河と云國中第一の大河なり、

○避石郷

〔和名抄〕に薩摩郡避石とあり、避石はいかによむにや、避ノ字を地名に用ふる事例すくなり、地理ともに詳ならず、

○幡利郷

〔和名抄〕に薩摩郡幡利とあり、幡利は波理と訓べし、名義郷地ともに今は詳かならず、

〔名義〕

○日置郷
〔和名抄〕に薩摩郡日置とあり、日置は比於伎と訓べし、名義は日置部の居たりし處にて負せたるべし、日置部の事ハ「垂仁天皇紀」に見えたり、郡名の日置も此郷より起れる名なるか今は樋脇郷といふなり、

○智賀尾神

〔三代實錄四卷〕に貞觀二年三月廿日庚午薩摩國從五位下智賀尾神授從五位上とあり、〔江川氏云〕鹿兒島西四里許に伊集院郷あり、其所に祭神を智賀尾權現とてある是なりと云りいかゞあらむ、

○二宮

〔和漢三才圖會〕に薩摩國二宮在薩摩郡二宮村祭神二座大已貴命少彥命弘法大師草創之とあり、是もし知賀尾神事にはあらぬにやなほよく考ふべし、

○市來驛

〔延喜式〕に薩摩國市來驛あり、市來は伊知久と訓べし、名義詳ならず、さて〔姓氏錄〕に右京諸蕃漢市往君出自百濟國明王、〔海東諸國記〕に薩摩州市來千代大守大藏氏久重、また國久、戊子年遣使來朝書稱市來太守大藏氏國久以宗貞國請接待忠國從弟爲其管下居部府、〔島隱漁唱下卷〕に自櫛島赴市木村途

神階所在地

祭神草創

市來千代太守久重市來太守久重

市木郷

市來湊丸太船

中

小春菊後快晴天、萬水千山若畫然、吟下高峰又深谷、
〔和漢三才圖會〕に薩摩國云市來一里串木野、〔郷村帳〕に薩摩郡市木郷あり、市來て舟の入る所あり四うけの湊なり、此邊丸太船といふもの多し大木をくりて作れる船なり漁師多く是にのりて魚をとる、〔猿樂傳〕に是ハ九州薩摩國いちくどの、御内に左近尉と申者にて候さて頼み奉り候御かたは長々御在京にて候が空敷ならせ給ひて候御かたみと御ふみを給はり候唯今古郷へまかり下り候、

○伊集院

〔海東諸國記〕に熙久乙亥年遣使來朝書稱薩摩州伊集院寓鎮隅州大守藤原熙久約歲遣一二船、〔島隱漁唱上卷〕に哦松居士藤原政秀公者股肱乎薩府君而任伊城之處守有年于茲不令而行焉不言而信焉蓋金玉已之義也今將東觀光於上國於戲乎遊蹤之廣者必益識達之美耶寔可嘉尙焉仍製里語一章以壯厥行色

涼雨吹晴溽暑收、潮平風熟送行舟、七年持節伊城守、萬里觀光京國遊、
蘆荻洲前花未雪、梧桐井上葉先秋、歸期倒指兩三月、日加多奈別愁、
哦松賢主人今將東遊、仍告別於同僚、以二十八顆之明珠、傍及予氣韻玲瓏雅翫、有餘竟以高韻重呈祖帳之下、
人爲能詩襟宇清、千山萬水且吟行、歸時囊有明珠在、寄與衰翁好慰情、

薩摩之中(薩摩郡)

朝鮮との交通
哦松居士
藤原政秀

如練禪翁

時遇大平一家國清、關門不鎖旅人行、京官若問安邊策、魏闕雲端達下情、
如練禪翁一日投宿于官府之小院、適聞藤播牧之欲東遊而速賦詩一章以壯厥
行、剩傍及管窺於予、不獲默以韻重贈藤公、

老禪陰盡夕陽樓、故為高官賦遠遊、一曲離騷情易感、碧梧葉動旅窓秋、
雲幾重中鐘一樓、名藍未得扣川遊、行人有約錦旋日、楓葉林巒共詠秋、
和伊川處守政秀公賀正詩、

嬾日映簾花柳春、天開景象物色新、伊川君子好詩律、白首長吟欲効颯、
〔同書上卷〕に文明辛丑云云 賦便而小景以饒 哦松居士豐城之行、

行程

內証

高麗村
說相院

妙圓精舍

〔和漢三才圖會〕に薩摩國伊集院三里半市來、〔鄉村帳〕に薩摩郡伊集院などあり、
今も都城のある處なりと云伊集院家の事は重ねて考ふべし、
子三人率一千余之兵攻落伊集院城主町田中務少輔久用云云同六年正月七日日新入道
二月攻落福山格大迫拵於是實久不降得子鹿兒島各山寺終没落于川邊市來湊より伊集院の間に高麗
村とて千余軒の在所あり秀吉高麗人を召つて來て此所に置給ふ今一村となる茶碗茶籠などを作る又農業をも
するなり疑ハそる事なし是は此方人よりも長しといふ、又伊集院の町に說相院とて禪林の古跡あり石體
あり、

○妙圓寺

〔島隱漁唱上卷〕に丙午重陽應官命、謁于伊城侯館及晚過橋而入妙圓精舍、主

盟老師相延就座覽其几上玉偈巨多、予需近作得一篇貫華奪目雖參寥碧
雲師之流不多讓乎仍次其韻、

佳節重陽好風景、碧杉圍寺菊花秋、正今爲客垂々老、往歲回頭事々悠、

偶扣禪餘二分丈室、地令胸次泛虛舟、來參不礙人如織、洞下清波第一流、

詣妙圓精舍拜前席虎溪和尚尊像之次作禪詩告同來釣雪禪伯以述感懷之
萬一、

寂寞松杉風外山、我師戔化閉禪關、焚香三展眞前拜、不覺和衣老淚班、
とあり、〔彦山僧立辨云く〕薩摩の妙圓寺は伊集院郷にありて古き寺なり、

○玄豐寺

〔伽藍開基記九卷〕に寶福寺開山禪師名覺也號字堂薩州藤氏子母某氏懷娠時曾
現己字和因以爲名生時有祥雲覆室族人昇之云嘗于本州結菴文其
柵曰秦鏡居五日經行樋脇邑創玄豐寺開洞下竹窓嚴和尚開法于瑞川往參
之云とあり、薩摩郡日臨郷に玄豐寺あり、

○千代

〔海東諸國記〕に久重戊子年遣使來朝書稱薩摩州市來千代大守大藏氏久重以
宗貞國請接待、千代は字音のまゝに訓べし、川内(センダイ)父千、
壺と書る物もあり、名義詳かならず、

薩摩之中(薩摩郡)

開山禪師

創始

所在地

太守重久

○伊作郡

〔延喜式〕に薩摩國伊作郡あり、〔和名抄九卷〕に薩摩國伊作、伊佐久とあり、名義いまだ詳ならず、今ハ伊佐と書てイサと唱ふるなり、さて〔東鑑十五卷〕に伊佐三郎・泉八郎云云、〔東鑑十八卷〕大隅國正八幡宮神領一件に怡作郷、地頭肥後坊良西云云、〔廿五卷〕に建保七年伊佐三郎行政伊佐大進太郎、〔廿七卷〕に伊佐兵衛尉、〔卅二卷〕に伊佐四郎藏人と云もあり、〔春樹云〕今昔物語に豊後ノ講師が海賊を謀て名のける時に伊佐入道能觀東國にて度々の軍功をあらはしたり云云といへりしハ此伊作郡より出たる人なるか、〔志布志記略〕に天文八年六月十七日貴久攻三市來城、同八月廿八日市來軍勢寄三來于伊作、伊作軍勢、郡、大様は〔和名抄九卷〕に伊佐郡利納〔寛知集〕に伊佐郡云云、五十二村〔郷村帳〕に伊佐郡山崎郷、川、泊野、鶴田郷、紫陰(シクマ)、大村郷、上手、下手、中津瀬、南、大口郷、原田里、篠原、大田、市山、小川内、青木、抵、羽月郷、田代、富人、下野、崎、田木、山野郷、山宮之城郷、黒木、齒などあり、〔輿地圖〕を按ずるに伊作郡東は大隅國菱刈・桑原二郡南は高城、薩摩二郡西は高城、出水二郡北は肥後國球摩郡に隣りて東西三四里或は五六里南北は十里余あり中に千代川あり、〔彦山ノ傳立辨云〕伊作と伊佐とハ別ありて薩に一郷の地なれば後に阿多郡ノ内に入れて郷となしたる物と聞ゆされば今ノ伊佐郡と云ハ後に出水・高城二郡ノ内を割て置きたる物なるべしと云へりきいかにもさる事なるべく思はるれど作をサの假名にもめて引出たりなほよくかむかふべし

○紫美神社

伊佐姓
○大標
村邑
郷
境域
伊作と伊

神階

新納

縁起

修築

○利納郷

〔三代實錄十二卷〕に貞觀八年四月七日辛巳授薩摩國正六位上紫美神從五位下とあり、〔輿地圖〕に伊作郡紫尾あり、紫美は志毘と訓べし、地名より起せる神名と聞えたり、此神事いまだ考へず、〔立辨曰〕薩摩人の諷に七里シビヤマとうたふ事ありシビキヘリ

○入権現社伊佐郡大口郷平出水村にあり

〔南浦文集上卷〕に平出水入権現上梁ノ文、薩州牛山院平出水村素有ニ社ニ名ニ入権現ニ相傳巽昔主ニ於此村ニ者勸ニ請熊野大権現以爲ニ一村ノ守護神ニ権現ノ垂跡入居ニ此地ニ是故號ニ入権現、先是文明十四年壬寅七月之晦所ニ落成ニ之社樓、指則至ニ于是歲庚戌ニ一百二十九年也雖レ經ニ此月ニ而無ニ一修レ之者、以ニ故神廟舞殿不ニ蔽ニ風日ニ是可ニ忍乎岩崎與右衛門尉秀之、齋名ニ猶存、有ニ欲ニ修レ之之夙志、擇ニ閏二月廿二日良辰、始運ニ斧斤、至ニ於三月十一日、畢ニ其功、矣伏願上梁之後柱礎堅固、不レ動不レ傾、殿宇清虛、無ニ災無ニ難專祈、今之主宰伊集院伴右衛門尉身宮康健、武運亨通、公

〔和名抄〕に伊作郡利納とあり、いかがが訓とべきや心得がたし、納ハ網ノ誤字にて等奈美ともすべきか、鳥ノ網の意なり是は都の人上田百木が考へたり又春木が考に天正の比島津の家臣と云りきなほ、新納(ニヒロ)武藏守と云人あり今この利納も利は新ノ字の誤にて新納なるべきかと考へし、

祭れる神なり大明神と云、「江川氏云」白羽火雷神は薩摩郡平佐郷に祭て今は大明神と云、いづれも委しき證を得ざれば定めがたけれど白羽と云處にありと云るかたしたしく聞ゆ猶よく考べし、

○小橋

「日本書紀二卷」に火闌降命即吾田君小橋等之本祖也、（命屋翁云）火闌命は廣く華人の祖と云るは華人の諸姓のうち殊に、（神武天皇）「古事記中卷」（皇）件に云坐日向一時娶阿多之小橋君妹名阿比良比賣生子多藝志美々命次岐須美々命二柱坐也などあり、小橋小橋ともに乎波志と訓べし、名義は橋に由有て負せたるべし、（舊事紀）天孫行天皇、御子等を擧別祖とあるを鈴屋、鈴の殿に云云三ノ字（一本）に宛とあれ、（舊事記）中にも小橋別命三田小橋ともいづれもあやまりて吾田、小橋別なるべしと云れしなり、「古事記傳」に小橋君は地名に因る人名なり、（其地をうしはける人にて）阿多は大名にて其中にある小橋と云地なるべし此地物に見えざれども必然るべし今此名の地は無きか云とあり、「郷村帳」に阿多郡高橋村ありもし由ある處にはあらざるにや、（重て按ずるに）「東鑑六卷」に文治二年正月法非三品一方御成敗之間今日所被執事京都一也日吉塔下彼岸衆中一候以進上之候法寺領小橋庄被押領三箇村一候云云而重家自近衛、賜小橋庄預所職一候衆徒可止重家之結構一雖三願遺候云云是共以庄領候依不能私成敗所々執中候也任三道理可被前仰下一候歟朝怒々言正月廿四日進上中納言殿とあり此小橋も阿多の事にはあらぬかなほよく考ふべし、「春木云」琉球の三柱に合せて調ふたに薩摩の事を作れるに坊津の邊、事多しなり、（春木云）琉球人阿多小橋を云なるべしと云りき常足按ずる筑前の人など田植うたいへりて其うたいに小橋と云事あり是たふ其うたいに小橋三千石駒が無（コマ）かナうじやなるまい云云と云ふなり是も薩摩の小橋より出たる歌にはあらぬか大橋といふは豊前國仲津郡にもあり、

○長屋

「書紀二卷」に火瓊々杵尊云、到於吾田長屋笠狹之碕、矣其地有二人、自號事勝國勝長狹、（書紀一書）に云云到於吾田長屋長田長田長田長田とあり、長屋は那我也と訓べし、名義いまだ詳ならず、（長き屋など造れりし處にて負せたるか又長狹といふ神の名の長もよしありげにきこゆ、さて）「神皇正統記」一巻に事勝國勝長狹と云神とある注に是も伊弉諾尊の御子とあり、さて此地今は其趾さだかならず、「古書」ともの趣を考ふるに長屋とある方には高屋といふ事なく高屋とある方には長屋と云事見えざれ同地にてあらむか猶よく考ふべし、

○竹屋

「書紀」一書に初火燄明時生兒火明命次火炎盛時生兒火進命又曰火酢芹命次避火炎、時生兒火折彥火々出見尊凡此三子火不能害及母亦無所少損、時以竹刀截其兒臍、其所棄竹刀終成竹林、故號其地曰竹屋、時神吾田鹿葦津姬以卜定、田號狹名田、以其田稻醱天、甜酒嘗之、又用淳浪田、稻爲飯嘗之とあり、竹屋は多可也と訓べし、「神代紀一書」に天國饒石彥火瓊々杵尊云、到于吾田笠狹之御碕、遂登長屋之竹島、乃巡覽其地、者彼有人焉云、（書紀本文）又諸陵式に高屋とかけり、又「塵添瓊瓊抄」卷に風土記曰皇祖哀忍者命日向國に云、是より薩摩國關駝郡竹屋村に移り給ひて土人竹屋守女をめして其腹に二人、男子をまうけ給ひける時彼所の竹を刀に作りて臍緒を切給ひたり其竹は今もありと云り此跡を尋て今もか

阿比良比賣
小橋別
小橋の君
高橋村
小橋の庄
琉球の歌
田植駒小橋節

吾田の長屋
〔名義〕
〔長屋と高屋〕

高屋
竹島

竹屋大明神
〔郡界〕

くするにやともあり、さて「古事記」傳に薩摩國人云笠沙之御崎に三柱、皇子御誕生の跡ありて三皇子を祭りて竹屋大明神と云と云りとあり、なほ次なる竹島のくだれど、常足按するに加世田郡今は川邊郡にいれり故竹屋の地も今はかの郡の内にいれりときこえたれど、(和名抄)作る比まては正しく阿多郡の内なれば(和名抄)の方によりて阿多郡の内にあげつ。

竹島之門

鷹島

〔書紀一書〕に瓊々杵尊云云、到于吾田笠狭之御崎、遂登長屋之竹島とあり、竹島は多可志萬と訓べし、さて是も竹屋と同處とは聞えたれど書きまの聊異なるに因て別件に出しつ、さてこゝに竹島とある島、事は宇佐、島鹿見島などの例にて海中の島にはあらずも見えたれど是はこゝの竹島の事にはあらず其事は聊河邊郡、内にいへり、序に云(孝德天皇紀)に薩摩之曲竹島之門と云事竹島之門とある竹島はこゝとは別なり彼竹島は(武備志)に竹島は他計什麼また鷹島とある處にて(書紀)州二百里與三流黃島相去十八里とあり、

笠沙御前

〔古事記上卷〕遷々杵尊(天降)件に詔云此地者向韓國眞來通笠沙之御前、而朝日之直刺國夕日之日照國也故此地甚吉地詔而於底津石根宮柱布斗斯理於高天原、氷椽多迦斯理而坐也云云、(書紀)に云云到於吾田長屋笠狭之崎、矣又(一)於是天津日高日子番邇邇藝能命於笠沙御前、遇麗美人、爾問誰女、白之大山津見神之女名神阿多都比賣亦、名謂木花之佐久夜毘賣、又問有汝之兄弟、平答白我姊石長比賣在也爾詔吾欲目合汝奈何答白僕不得白僕父大山津見神將白故乞遣其父大山津見神之時大歡喜

阿多郡比賣

加世田之御前
同世田宮崎
宮之原
野間權現
片浦小浦

薩摩之中(阿多郡)

而副其姊石長比賣、令持百取机代之物、奉出故爾其姊因(其醜)見畏而返送唯留、其弟木花之佐久夜毘賣、以一宿爲婚爾大山津見神因返石長比賣、大耻、白送言我之女二並立奉由者使石長比賣者天神御子之命雖、雪零風吹、恒如石而常堅不、動坐、亦使木花之佐久夜毘賣者如木花之榮、榮坐宇氣比豆貢進此令、返石長比賣、而獨留木花之佐久夜毘賣、故天神御子之御壽者木花之阿摩比能徵坐故是以至、于今、天皇命等之御命不長也故後木花之佐久夜毘賣參出白妾妊身、今臨產時、是天神之御子私不可産、故請、爾詔、佐久夜毘賣一宿妊哉是非我子、必國神之子、爾答曰吾妊之子若國神之子者、産不、幸若天神之御子者幸、即即作無戸八尋殿、入其殿内、以土塗塞、而方産時、以火著其殿、而産也故其火盛燒時所生之子、名火照命、此者華人阿多、次生子名火須勢理命、須勢理三、次生子御名火遠理命亦名天津日高日子穗々手見命、とあり、笠沙御前は加佐々能美佐支と訓べし、名義いまだ詳ならず、〔古事記傳〕に薩摩國人云今本國の阿多郡に加世田之御前と云所あり是笠沙之御崎なり、(志布志記)に日新入道加世田、城を攻とる事見たり、(同書)に十五代大守貴門と云者市來に居たるか其子孫川上左近將監につきてシフシに移りたり、其地に接きて宮崎と云所もあり京之原と云處もあり、さて其あたり野間權現と云社あり木花開邪姫邇々藝尊彦火々出見尊火明尊を祭云とあり、(薩摩)七江川氏云今、加世田郡之内片浦小浦之邊是則上古所謂吾田長屋笠狭之崎也、常足按

加世田三村の所因

〔阿多〕

するに加世田三村は今河邊郡に屬て阿多郡の内にはあらず然れば笠沙崎を始めて竹屋なども皆河邊郡下に出すべき例なれども〔風土記〕に閑駝郡竹屋村〔和名抄〕に阿多郡鷹屋ともあれば阿多郡の内に擧つ、阿多は古に此邊を廣くして云名なればなほ河邊郡の方にも舊證を得ざればまづ此郡に付て引出るなりは河邊郡につくべきことわりなるに似たればまづ此郡に付て引出るなり

○高屋山上陵

〔書紀二卷〕に彦火々出見尊崩葬日向高屋山上陵とあり、高屋は多可也と訓べし初に擧たる高屋同處なり、又〔延喜〕諸陵式に日向高屋山上陵彦火々出見尊在日向國無陵戸ともあり、さて〔前皇廟陵記〕に薩摩國阿多郡大隅國肝屬郡俱有鷹屋郷高與鷹蓋二郷境相接恐此地之山又云今按古日向者今大隅薩摩日向是也帝都漸遷東去西海遠故於山城國葛野郡祭之云とあり、二郷境相接とあるはいかゞなり兩國鷹屋其間相去る事遠しされども山陵はこゝの高屋なるべし日向とあるに泥むべからず、日向は古へ三國に渡れる名なり、又〔今本〕天書に火々出見尊讓位於皇子之宮終崩日向高彌之嶺宇奈保之宮焉とあるは覺束なき書さまなり、讓位と云事その比

○鷹屋郷

〔和名抄〕に阿多郡鷹屋とあり、鷹屋は多加也と訓べし、竹屋高屋同處なり、此郷地も今詳ならずもし川邊郡野間のあたりにも有むか彼郡に宮村宮下カドノ神殿古殿、など云處

位置推考

鷹屋郷

高彌之嶺

もあり、是彼火出見命の舊居とす、へきか阿多郡にも宮崎といふ處あり

○田水郷

〔和名抄〕に阿多郡田水とあり、いまだ詳ならず、もし田川の誤にてもあらむか、阿多郡に田河あり、又田伏の誤にてもあらむ今阿多郡田布施郷あり、

○葛例郷

〔和名抄〕に阿多郡葛例とあり、いまだ詳ならず、強ていはゞ加禮伊と訓むか、大隅國噺吹郡葛例と云も有て今は嘉例河と云由なり、立辨云大隅薩摩の内にカレイと唱ふる處多しといへりき

○阿多郷

〔和名抄〕に阿多郡阿多郷あり、伯耆國日野郡阿太といふもあり、〔古事記〕に神阿多都比賣〔神武天皇紀〕に日向國吾田村吾平津媛、〔舊事紀〕今に天日方奇方命亦名阿田都久志尼命などあるも此郷内なりしか阿多と云事此あたりの大名となれるも元は此郷名より起れりしならむ、今も阿多郡阿多郷あり、志布志記天文四年一件に島津相模守忠真入道日新者薩州田布施伊作阿多高橋之領主也とあり

○田後驛

〔延喜式〕に薩摩國田後驛あり、田後は多之利と訓べし、〔和名抄〕に上野國那波は川尻など同意にて海邊などに近き田を云なるべし、平田尻、三田尻など云地名國々にあり、さて〔郷村帳〕に阿多郡伊作郷田尻あり此處なるべし、出水郡高城郡より田伏の方に到る道

嘉例河

〔名殘〕

田尻

筋にあたり、

○小松原

〔武備志〕に薩摩州小松原とあり、小松原は古末都婆良と訓ふべし、名義は小松の多く生たる處にて負せたるなり、「立弁云」此小松原は阿多郡田布施郷吹上村内にありと云りき、さて〔西遊記〕に薩州西南の吹上、其面限り無き大洋にて風荒ければ白沙をうづ高く吹上げまた是を吹散す故に其砂の高低定まらず殊に濱路長くして數十里の白沙に一點の塵もなく風景無雙の地なり此吹上の猥小女どもの讀る歌とて彼處に語傳へたる

和歌

吹上の松ハ砂に埋もれて老木ながらの小松原かな

三藐院殿防津へ左遷まし〜て暫くとどまり給ひしとき此歌を聞て感ぜさせ給ひしと云又自讀給へる歌なりともいふとあり、近衛關白前久公故ありて天正三年九月薩摩國と申す其子關白信基公を三藐院殿と申せり西遊記の既たがへるに似たり、

○ノシロコ

〔西遊記〕に薩摩國鹿兒島城より七里西方ノシロコと云處一郷皆高麗人なり、大閩秀吉公朝鮮を征伐し給ふ時此國の先守彼處一郷老若男女悉く擄生と成して歸給ひ薩摩國にて一郷土地を賜ひ長く此處に住しめ給ふ今に至て衣服言語皆朝鮮風

朝鮮人の村落

ノシロコ

製陶業

ノシロコ

ノシロコ

ノシロコ

ノシロコ

ノシロコ

ノシロコ

ノシロコ

ノシロコ

ノシロコ

ノシロコ

ノシロコ

ノシロコ

ノシロコ

ノシロコ

ノシロコ

ノシロコ

ノシロコ

ノシロコ

ノシロコ

ノシロコ

ノシロコ

ノシロコ

ノシロコ

ノシロコ

ノシロコ

ノシロコ

ノシロコ

ノシロコ

ノシロコ

ノシロコ

ノシロコ

ノシロコ

ノシロコ

ノシロコ

ノシロコ

ノシロコ

ノシロコ

薩摩之中(出水郡・高城郡・薩摩郡・甕島郡・日置郡・伊佐郡・阿多郡)終

俗のまゝにて郷民繁茂し數百家となれり、初とらはれと成て來たりし時の十六氏はいはゆるりさて今ノ庄屋名を伸伸屯と云伸は元來の姓にはあらず日本に來たりて申をサルとよむ人のあるに依て人を加へたる由なり、其外金慶山・白孝基など云類なり又客屋の名を朴養眞と其子を朴養安と云妻をロレンと云さて此處にて高麗焼を造ればその陶場を見るに誠にめざましき事なり此村の人は半は陶師なり朝鮮より傳來る法にてやく故に白焼などはまことに高麗渡りといふに依てたたくてこの物とは見えずされば上品の陶器は國守にめざるのみにて實厚く烈火にかけても破る事なく故に下品は土瓶など多く造り出されは上品の陶器は人を見ずその外は下品にて厚く烈火にかけても破る事なく故に下品は土瓶など多く造り出されは上品の陶器は隔日の三國は民間にも大かた此土瓶を用ふなほ大阪邊までも販ぐを薩摩焼と稱してめづるなり薩摩にては薩人なし、さて此野代子の風俗といふなりこのわたりにてチヨカと云は土瓶の事なり是を土瓶といひては薩物の如し、禮儀の時野代子の風俗と云は皆惣髪にて額の上に集めて結びたり京(ミヤコ)がたの女の揃まげなど云水ノ葉形の金物を左右につけ巾は後の方まはして當たる物なり高き巾ありひくき巾あり高き巾と云上木ノ葉形を用ふ衣服は花色の組にて袖廣く法衣の如くにして上裾わかれたり先裳を着て後に衣を着す其上に桃色の細く丸き帯を結ぶ下着は日本風(ヤマトナリ)の服なり身はいとものに廣し帯は前に結ぶなり女の髪は儀の時二ツにわけ結ぶよの常には櫛卷の如くなり、惣て薩摩は異國ノ船の漂着する處なれば諸國通詞職を置かるゝに朝鮮の通詞は必野代子の人これをつとむ、市來渡と伊集院との間に高麗村とて千餘軒の所ありて高麗やきを作ると云今に髪はそる事なしといふ今は伊集院の郷の内なり

薩摩之下

○河邊郡

〔名義〕
隆豐禪師

河邊姓

附琉球詩

○大様
郷区

〔延喜式〕に薩摩國河邊郡あり、「和名抄」に薩摩國河邊、加波乃倍とあり、名義は川邊朝臣などの住たる處にて負せたるか、川邊朝臣は武内、さて「隆豐禪師傳」に禪師、薩州河邊郡人、父薩摩、大守藤原朝臣重命母字云、小墾田云、天平勝寶三年十月三日化、隆豐禪師、事は山城國北岩倉、〔東鑑七卷〕に文治三年九月廿二日所、衆信房爲御使、下向鎮西、是天野藤内遠景相共可、追討貴海島之旨依、含嚴命也云、又去年河邊平太通綱到、件島之由聞食之間殊所、思召企給也、「十五卷」に下河邊四郎、同藤三郎、伊佐三郎、泉八郎、「太平記三十三卷」延文三年大原合戦、件に河邊邊次郎、「南浦文集下卷」に討琉球、詩并序薩隅之南二百餘里有、一島名曰琉球、

一灯將威琉球運、爲舉邪那紀綱案、諺語未、知實耶虛、邪那本是河邊郡、
那都琉球、
 國都也

などあり、次に郡大様は「和名抄九卷」に河邊郡川上稻積已上、また「寛知集」に河邊郡三十五村、また「郷村帳」に河邊郡平山郷、
田邊田、長田、宮村、小野、今田、田上、野崎、宮下、清水、神殿、カウドン、古殿、フルドン、野間、

境城

島津實久

祭神

野間神

野間山
傳説

宮ノ原
祭事

加世田郷内山村原、小湊、益山、東生木、川如、津貫、山田郷、上山田、中山、坊泊郷、泊津村、久志秋目、秋志村などあり、「輿地圖」に依て考ふるに河邊郡東は給黎郡となり南は類娃郡にとなり西は海を限とし北は阿多郡となりて東西七八里南北五六里あるべし、出水城主島津八郎左衛門實久天文六年の合戦に討死す、事委く「志布志記」に見えたり、さて此郡の坊津より掛布郡山川、津に海上十六里あり又北、方出水の米津まで海上四十五里ありと云、天文七年十一月廿八日新入道加世田、城を攻取る事「志布志記」に見えたり、

○野間権現

〔社記〕に薩州河邊郡野間村野間山野間権現祭、木花開耶姫邇々藝尊彦火々出見尊火明尊とあり、「國人説」に野間、岬則、笠沙、御前なりと云、「神代三陵考」に御崎有、野間権現社、祭、木花開耶姫邇々梓尊彦火々出見尊火明命、神影見在、吾邦君親祭、不則使、人代祭、野間、地名後世或附之、天妃、俗以謂、姥碼國林氏之女、故號、野間、遇傳會言之、此社は古く故有、社なる由なれども委き事はいまだ聞ず、
〔長崎夜話〕と云
 ものに薩摩國に野間山あり云、初に福建の南海に甫田と云處あり此浦の漁家林氏の娘生れて麗異あり十餘歳にして我則海神の化身なり海洋に入て往來の船を守護すべしとて忽海水に没死す則甫田に廟社を建て船神と祝て今にあり云、其海中に没せし尊骸は流れて薩摩の海邊により來たれるを取上げて山上に葬りぬ其後種々靈異の事ありて往來の船の諸願を叶へたり長崎入津の唐船も洋中にて初て此山を見る時鐘紙をやき金鼓を鳴らして拜祭せり是より此山を野間山權現と號せりといふは觀音、「幸丸云」加世田に宮、原と云と權現とを一ツにしたる傳へたり觀音の事は別件にいふべし、

に同じとす。

○野間山、観音

所在地 傳説 天姥老嫗 野茂山 天堂山

〔舊記〕に野間山、観音者在薩州河邊郡野間、御崎云とあり、是も委き事はいま
だ聞ず、〔長崎夜話〕に薩摩國に野間山あり、觀音の靈地なり、福建の南海に甫田と云處あり、此浦の漁家林
忽海水に没死す、即甫田に廟社を建て、船神と崇め、祭て今にあり、大明天子より天姥老嫗の靈號を賜はり、觀音の
化身として、唐土に諸船甚多、敬す其海中に没せし尊骸は流れて薩摩の海邊にあり、天姥老嫗の靈號を賜はり、觀音の
ぬ云云、此山を野間山と號せり、野間の和訓は野間、野茂山に共、唐人は天堂山と號せりとあ
り、常足武備志等の圖に因て考ふるに、天姥老嫗の轉韻なり、此故に野間、野茂山共に唐人は天堂山と號せりとあ
堂山は日本の地にあらざるを究ゆ。

○一乘院

宗派 草創 沿革 寺領 坊津 硫黃島 高島 社地 奥之院

〔坊津一乘院寺記畧〕に坊津一乘院者眞言宗而號如意山、當敏達天皇御時、創造
之、其後經九百餘年、後奈良院御時、天文十五年三月四日、以一乘院爲勅願寺、又賜
聖翰、額號西海金剛峯寺院之地、三十町四面、而有高三百六十石、傍有坊中、又門
前寺中之家有八十餘軒、云とあり、今は坊中も只一坊のみにして、いたく衰へた
り、さて坊津と云は、鹿島、城より未、方に當て十六里ばかり有て、南海の入江なり、此
處より十餘里南の海中に硫黃島、高島打並びて見ゆ、一乘院は汀より登る事五六丁
ばかりにして、海を見おろす處なり、又ここより十八丁奥のかたに奥院と號して
弘法大師像を安置する處あり、さて此寺に清和天皇の時、傳燈大師任官の勅翰あり

和歌

什物

勅願所

〔名義〕

川上泉師

〔名義〕 稻積城

是紀伊國根來寺兵火に亡びたりし時、かしの山僧ども持來たりて、此寺に納めたり
しと云、又近衛天神像と云物あり、文祿の比、近衛信輔公此寺にて彫刻し給へりと
云、又信輔公此地より都に歸給ふ時、院主快忠別れの歌奉けるに、信輔公のかへしの歌
三年までありしうらわの墨染の袖にはをしきなごりなりけり

又此寺に後奈良院の聖翰の短冊といふ物十枚あり、是は薩摩人の語りし、〔志布志記〕に
天文五年三月五日、坊津一乘院勅願所となる、

○川上郷

〔和名抄〕に河邊郡川上とあり、川上は加波加美と訓べし、〔都人上田百木云〕河邊郡に
カハノベと訓むべきにやと云へれど、肥前國小城郡川上、名義は川に由りて負せたるべし、
加波加美ともあれば、正しくカハカミと訓むべき也、
り、さて〔景行天皇紀〕に云、熊襲有魁帥者名、取石鹿文亦曰川上、泉師とある川上
に由りて有る處なるか、此郷、地今は詳ならず、〔島津系圖〕に島津上總介貞久、嫡男頼久、川上之祖
る事な
いへり、

○稻積郷

〔和名抄〕に河邊郡稻積とあり、稻積は伊奈都美と訓べし、〔上田百木〕は稻城の意にてイ
〔和名抄〕の假名もイナツミと付たる上、我國人稻を積たるを常にタツシ、名義は稻に由りて負せら
るべし、さて〔續紀一卷〕に文武天皇三年十二月甲申、令太宰府修三野稻積二城、

和歌

〔所在〕

また「秋、寐覺」に稻積、里末、勘、國權少僧都光覺
 とあるなどもこの稻積なるべきか、大隅、國にも稻積と云はあれどこゝなるは
 日本三津の一とある坊、津もあるわたりなれば他處の例にはあらず此郷、地今は詳
 ならずれども必坊、津のあたりなるべし、重れて按ずるに「天智天皇紀」に九年正月築筑紫城二
 直廣肆石川朝臣虫名等於筑紫、給送位記且監新城とあるもこの城
 なるべきか二城の内三野とあるはいつれの國なるべきかいまた考へず
 ○坊、津

房泊
 朝鮮との
 交通
 三津の一

〔伊勢風土記〕に安濃、津、仁徳三年乙亥定三津、其一也、「海東諸國記」に薩摩州坊
 泊代官只吉、只吉、戊子年遣使來朝、稱薩摩州房、「武備志日本考」津要に國有三津、皆
 商舶所、聚通、海之江也、西海道有三坊、津、薩摩州、花旭塔津、筑前州、洞津、伊勢州、三津、惟坊、
 津爲、總路、津、また坊、などあり、坊、字は字音のまゝに唱ふべし、名義いまだ考へず、さ
 て「古跡、癖」に文祿三年五月近衛、左大臣信輔公職を止られ此津にさすらへ給ひ自
 岡左衛門佐信尹となのり給ふ、坊、津、中島、東に信輔公の又坊、津、八景、歌とて讀給へる
 が残れり深浦、夜雨、居給ひし跡といふものあり
 船とめて苦もる露は深浦の音もなきさの夜の雨かな
 中島、晴嵐

信輔公址
 坊の津入
 景歌

地勢
 早舟石

松原やふもとにつゞく中島もあらしに晴る、峯のしら雲
 松山、晚鐘

けふもはや暮にかたむく松山の鐘のひびきに出るやま入
 龜浦、歸帆

龜が浦やつりせぬさきに波風の浮たつと見て歸る舟ひと
 鶴崎、暮雪

鶴崎や松の梢も白妙に常盤の色もゆきのゆふぐれ
 網代、夕照

磯ぎはのくらす網代の海かげも夕日のあとに照すかゞり火
 御崎、秋月

荒磯の石間くゞりし秋の月かげを御崎の波にひたして
 田代、落雁

行末は南の海のをちかたや田代にくだる雁のひとつら
 坊、津、鹿兒島より未方十六里許に在て南海の入江なり地のさまハ屏風を立たる
 が如くにして右、方の山端よりいみじき巖海面に指出たり左、方も又同じ其間に大
 船の泊る所あまたあり、其邊の石皆名あり中にも早舟石と云るがいと奇(アヤ)しく見ゆ外面の海は昔
 外國、船の泊し處なりこゝより十餘里南、方の海中に硫黄島、高島うちならび

薩摩之下(河邊郡)

とあり又「郷村帳」に河邊郡坊津村あり、
○唐湊

「名處方角抄」に薩摩國唐湊こし鹽など云處あるか、「名寄」に載せらる浪の花貝
などよめり、「秋ノ寐覺」に薩摩國からの湊、「懷中抄」に
たのめども海人の子だにも見えぬ哉いかはすべき唐の湊に

などあり、名義ハ唐人の船泊る處にて負せたるべし、筑前國志摩郡津泊カサトマリさて此唐湊と

云ハ坊津なるべく思はるれど「武備志」に薩摩州泊津カサトマリ港坊津湊「村名帳」に河邊

郡坊津村泊津村と何れも並べ舉たれば定がたくて暫く別件に舉て後考をまつ

になん、「海東諸國記」に房津房カサトマリ泊津津と云事も見えたり、

○泊浦

「島陰漁唱中卷」に泊浦者薩南之海岸也山孤絶而樹高聳近有大鳥大鳥猥若車輪來

寄栖於此地遂至生兒其兒亦如鴻鵠之大也人不大鳥知其何鳥以爲希有僕竊

作小詩一章而聊擬昇平之喜瑞

大鳥巢松南海涯、猥如車蓋始生兒、國家幸遇昇平日、好擬風鳴歌小詩、

とあり、泊浦は等萬里利乃宇良と訓むべし、「武備志」の圖に薩摩州泊津港とあ

り、舟泊る所にて負せたりと聞ゆ房津泊とは別かなほ考ふべし、

〔名義〕

房之津

和歌

久志村

秋日港
秋目村

○久志港

「武備志」に薩摩州久志港とあり、久志港は俱之乃美奈等と訓むべし、名義いまだ考

へず、「島陰漁唱中卷」に自備島自備島起市木村云云ともあれど、さて「郷村帳」に川邊郡久志秋目

郷久志村あり、「路程全圖」に片浦秋目久志ハカ々と北より南に連なれり、「九州圖」

に片浦の南に秋目、秋目の南に久志、久志の南に泊、泊の南に坊津カサトマリとならべあげたり、「諸事紀」

に天日方奇日方亦名阿田郡久志尼命ともあり、「丹後風土記」に與謝郡久志濱と云も見えたり、

○片浦

「武備志」に薩摩州片浦とあり、加多宇羅と訓むべし、「名義」は片山片岡などの類

なるべし、「郷村帳」に川邊郡加世田郷片浦あり、

○秋日港

「武備志」に薩摩州秋日港とあり、秋日は阿支女と訓むべし、武備志に目を日

だ詳ならず、「郷村帳」に川邊郡久志秋目郷秋目村あり、久志秋目郷といふは久志村秋目

二村の外に村ある事なし、

○類娃郡

「延喜式」に薩摩國類娃郡あり、「和名抄」に薩摩國類娃江乃とあり、江乃と註せるは誤

薩摩之下(類娃郡)

衣の評者

○大様
郷邑
境域

〔名義〕

神階

開聞嶽の噴火

の業なるべし、さて「續紀一卷」に文武天皇四年六月庚辰衣評督、衣君、縣助督、衣君豆自美云云等持剽劫、國使刑部眞木等於是勅、坐紫、惣領准犯決、罰、郡を評と書、史に新羅俗其邑在、内曰三味評とあり又皇國書にも「續紀廿五卷」に水高、評父(大神宮儀)に難波朝廷天下立、評給時云云とあり(新井氏云)コホリは韓語より出たり今の朝鮮語に郡縣をコホルト云と云り此説さもあるべし、「書紀體卷」に薩摩の地名に熊備(コビ)已富黒(コビ)評と云あり評は彼國の方言、「東鑑廿二卷」に建保二年江左衛門尉範親、江左衛門尉能範、「開聞社鐘銘」に永仁五年三月八日當郡領主左衛門尉憲純とあり、郡大様は「和名抄九卷」に類娃郡開聞類娃郡上二、「寛知集」に類娃郡云七村、「郷村帳」に類娃郡牧之内、領、拾町、村部、喜入郷上、名、鹿籬郷村などあり、「輿地圖」を按するに類娃郡東は揖宿郡南は海、西は河邊郡北は河邊給黎二郡に隣て東西里餘南北里許有て河邊類娃二郡は州の南邊なり、薩摩島津家の士に類野氏の人ありてエノと唱ふるよしいへり、こゝに由ある事なるべし、

○枚聞神社

〔延喜式〕に類娃郡枚聞神社とあり、枚聞は比羅幾々と訓べし、「和名抄」に開聞(ヒラキ)御名、義は地名に負せたるなり、さて「三代實錄四卷」に貞觀二年三月廿日薩摩國從五位上開聞神加從四位下、「同書十二卷」に貞觀八年四月七日辛巳授薩摩國從四位下開聞神從四位上、「同書十六卷」に貞觀十六年七月二日戊子太宰府言薩摩國從四位上開聞神山頂有火自燒、煙薰滿天、灰沙如雨、震動之聲聞百餘里近社百

神階
降灰

祭神

緣起

姓震恐失精、求之著龜、神願封戸、及汗穢神社、仍成此祟、勅奉封二十戸、「同書四十二卷」に元慶六年十月九日戊申授薩摩國從四位上開聞神正四位下、「同書四十八卷」に仁和元年十月九日庚申薩摩國言七月十二日夜晦冥衆星不見、砂石如雨、檢之故實、類娃郡正四位下開聞神發怒之時有如此事、國宰潔齋奉幣雨、乃止云云などあり、仁和元年「事扶桑略記」卷には元慶九年とありさて、「神社啓蒙」に薩摩國開聞神社、「一宮記曰」猿田彦命也、「宗因云」或綿積神、「和漢三才圖會」に薩摩國渡海明神在類娃郡、號一枚聞神社、祭神一座猿田彦命、「神代山陵考」に神主井上氏云枚聞神社祭神豐玉彥夫妻也又合祭猿田彦神火々出見尊、摠土老翁等數神也東宮、彥火々出見尊、廻殿、天照大神、月夜見尊、姉姬宮、豐玉姬聖宮、鹽土老翁、荒仁宮、大己貴命、西宮、天智天皇、后又祀玉依姬及兒屋命云云、「一宮記云」祭猿田彦也但逸、豐玉彥夫妻、今本社末社凡口座後世天智天皇嬖妾誤爲本社、以豐玉彥夫妻擬之配社、號龍宮、可謂主客倒置兩相欺給矣云云、「緣起曰」天智天皇嬖妾者始開聞社僧瑞應院主登山修密法、時有牝鹿來嘗其法水、因有身他日復來自口產一女子、容相端正、院主携養之、漸長、姿色絕世、調選入宮、帝寵日渥、宮姬妬之、欲除之、或者語之曰、嬖妾、本鹿子也、故其足乃鹿蹄也、搥擁蔽之、請倘使彼發露之、彼必不堪、羞辱自出去乎、適雪中謀誘宮庭、爲雪圍、戲嬖妾不得、已從

鹿籠采女
花鯨堂
ソカイ

可愛之山

所在地

隆興禪師

岩倉山

焉其庭雪足跡果見鹿蹄痕一耳於是宮姬、開稱譏笑、嬖妾大慙恨矣即出宮而大歸本郷、帝戀慕爲之來于此正居云緣起本御語今取改之當時修密法、瑞應院主至、今住持、僧不過三二十世矣云、「或云」天智天皇、嬖妾、本類姓郡屬邑鹿籠、人也選貢采女、故呼曰鹿籠采女清和天皇開闢神封二千戸如鹿籠村在其封戸中但出自寒族、而仕宮中、者有諱其本生父、因盾之說見三州神社考とあり、「薩摩人鮫島氏云」開闢神社、傍に花鯨堂あり「銘、銘」に永仁五年三月八日當郡領主左衛門尉憲純とあり此神のます山を國人常にオカイモンと唱ふるなり、地理の事は次々の件に聊いへり故今は略す、

○埃山陵

「書紀二卷」に天津彦々火瓊々杵尊崩因筑紫日向可愛之山陵、可愛此「諸陵式」に日向埃山、陵、天津彦々火瓊々杵尊在日向國無陵戸、（今本天書）に瓊々杵尊云葬筑紫日迎緣之中山之嶺陵也などあり、さて「廟陵記」に埃山、薩摩國類姓郡也、「古事記傳」に埃山、陵は「和名抄」に薩摩國類姓郡是なり御陵必此處にあるべしとあり、さて「西石倉金藏寺緣起」に開山隆興禪師は薩摩國河邊郡の人にして談峰の定惠の弟子なり壯歳の時高麗にいり阿私山に寓す其後歸朝して古菴に住す一時靈夢に依て此岩倉山に來たるに其絶境恰も阿私山の如し時に養老二年なり山上に登て箭を携ふる翁に逢、師問て曰何人ぞ翁答て曰吾是日向國可愛山陵より移りて此山に住む事久し

向日山

和歌

筑紫富士

硫黃島

所在地

屋久島

又師をまつ事久し時に翁箭を放つに傍なる楠にたつ其矢をぬくに其跡より金光を放つ翁云是靈木なり願くは心を一にして千手像を造るべしと云師諾して像すてに成ぬ翁云此山を以て師に授く我又擁護すべし又箭を放て此箭とゞまる處を居處とすべしと云然るに今の向日山にとゞまる遂に其所に行在所を作る是向日明なりとあり、此事例のうけがたけれど可愛山に聊由ある事なれば引出つ、

○空穗島

「名寄」に薩摩國空穗島、「和爾雅」に薩摩國空穗島類姓とあり、「近衛信輔公の歌」に薩摩がた浪上なる空穗島これや筑紫の富士といふらん

「國人云」開闢神のます山を海門岳とも筑紫富士ともいふなり開闢岳硫黃の氣強くして常に煙の然上る處なれば内はうつるなる山なり故に空穗島と訓たまへるなるべしと云へり、（或人いふ）うつほ島と云は硫黃島の事にてもあらんか海門山の事としては浪の上の薩摩よりよく見渡されてさばかり高き重と云ふ事叶はずといへり此説も一わたりいはれたりされども硫黃島と云も山なりやしらざればさだめかたくな重て按ずるにうつほ島は夜久島を云なるべし、「和漢三才圖會」に屋久島在薩摩之南方十八里、島峻峯可亞富士山とあり重て按ずるに「細見記」に浪上を類姓郡とありさらばこゝなる事論なし、

○開闢郷

「和名抄」に類姓郡開闢とあり、開闢は比羅幾々と訓べし、名義詳ならず、此郷名今

〔所在地〕

傳はらざれども枚聞神社ある邊なる事は論なし、開開今はすべて字音に唱へて海門といふなり、

○類娃郷

〔和名抄〕に類娃郡類娃とあり、類娃は衣と訓べし、名義いまだ詳ならず、此郷名も今は傳はらず埃山、陵ある處とは聞えたれど陵地の事もいまだ考得ず、

○揖宿郡

〔延喜式〕に薩摩國揖宿郡あり、〔和名抄〕に薩摩國揖宿、以夫須岐とあり、名義いまだ詳ならず、郡大様は〔和名抄九卷〕に揖宿郡揖宿、〔寛知集〕に揖宿郡云々七村、〔郷村帳〕に揖宿郡岩元小枚十九丁、東方山川郷城川、大山、福元、兒ヶ水、今和泉などあり、〔輿地圖〕に依て考ふるに揖宿郡は東南海を限り西は類娃郡北は給黎郡となりて東西□里許南北□里許あり南に山川、湊あり舩行便よろし、

○揖宿郷

〔和名抄〕に揖宿郡揖宿とあり、揖宿の宿を須支にかりたるは異音須久なるを宿に假れ宿る是也、須支に轉用したるなり、さて〔和名抄〕に此郷のみを載せたるは山川郷などの看けんを落したるなるべし今此郷なし、〔九州圖〕に揖宿村あり、或〔和漢三才圖會〕に

○大様
郷村
境域

吉祥庵

〔名義〕

驛程
山内津

○大様
郷村
境域

吉祥庵在揖宿禪宗、

○山川港

〔武備志〕に薩摩州山川港とあり、山川は也萬加波と訓べし、川に由有て負せたる名なるべし、さて揖宿郡山川郷あり、〔和漢三才圖會〕に薩摩國山川當國巽端也乾里長至大隅國宇知浦十八里午未至屋久島海上三十二里巽至多爾島三十五里、〔海東諸國記〕に薩摩國山内津とあるも是なるべし、〔輿地圖〕に薩摩國山川津より坊津へ十六里永良部に三十六里大隅國佐多、岬へ十三里とあり、

○給黎郡

〔延喜式〕に薩摩國給黎郡あり、〔和名抄〕に薩摩國給黎、岐比禮とあり、給ハキフの音轉用したるなり、名義いまだ考へず、さて郡大様は〔和名抄九卷〕に給黎郡給黎〔寛知集〕に給黎郡云々六村〔郷村帳〕に給黎郡知覽郷郡東別府厚地、瀬野、永重、西別府などあり、〔輿地圖〕に因て考ふるに給黎郡東は海を限とし南は揖宿郡西は河邊郡北は谿山郡に隣りて東西三四里南北二三里あり揖宿・給黎・谿山と南北に連りて何れも小郡なり、

○給黎郷

〔和名抄〕に給黎郡給黎郷あり、和名抄に此郷のみを載せたるは知覽郷などをもらしたるにてもありなんか今給黎郷なし村名にも聞えず、〔郷村帳〕に類娃郡喜入郷とあるは此郡郷名の混入したるにはあらぬべし、

薩摩之下(給黎郡)

西別府村

〔海東諸國記〕に源忠國丁丑年遣使來朝書稱、薩摩三州太守島津源忠國云、忠國從弟爲其管下居部府とあり、鹿兒島にも西別府村あり又大隅國始羅郡加知木郷にも西別府村あり、されども此郡の別府土地も廣く名も高ければ暫く此所に擧て後の考をまつになむ、今給黎郡知覽郷に東別府・西別府あり、別府と云名は府の外に又應を作りたるなるべし、國々に多き地名なり、

○知覽郷

澳の小島
知覽郡
知林島

〔和漢三才圖會〕に薩摩國〔延喜式〕爲三十二郡〔倭名抄〕〔拾芥抄〕等爲三十三郡、如今加知覽爲三十四郡、知覽或爲澳、小島、〔和爾雅〕に薩摩國知覽郡など見えたり、知覽は暹羅美と訓むべし、是を國人チラミと唱ふるなり、さて〔郷村帳〕に給黎郡知覽郷あり是を郡名としもいふなるはいかなる事に因てまがへたるにや、〔輿地圖〕を按ずるに掛符郡東海、このチラミによしある事などにはあらぬにや、

○谿山郡

〔名義〕

〔延喜式〕に薩摩國谿山郡あり、〔和名抄〕に薩摩國谿山、多仁也末とあり、名義ハ山間にある處にて負せたるべし、〔太平記三十三卷〕延文三年七月筑後國大原合戦、

谷山姓
紫原の戦
刀匠
○大隈
郷村
境域
秀頼の裔

件〕に谷山右馬助云、〔志布志記略〕に天文八年島津忠良入道日新公與八郎左衛門尉實久於三谷山紫原合戦實久敗北、〔本朝鍛冶考八卷〕薩摩國鍛冶系圖〕に行安、一條御宇寛弘正國門人谷山住、家安、伏見御宇正應信安、子薩州谷山波平家安、〔新刀辨疑〕に安代ハ薩州谷山波平の末主馬首安代初ハ玉置小市郎或ハ一平と號す一葉の葵を目釘穴の上に切、是一平安代と云喜入の一平是也とあり喜入に住せし人なるべし、郡、大隈ハ〔和名抄九卷〕に谿山郡谷上・久佐〔巴上二郷なり〕〔郷村帳〕に谷山郡〔上福元平川和山、中村篠貫山田、〕〔寛知集〕に谷山郡云、六村などあり、さて〔輿地圖〕に因て考ふるに谿山郡東ハ海を隔て大隅國櫻島にとり南は給黎郡にとり西は阿多郡にとり北は鹿兒島郡に隣て東西南北ともに二三里に過ず、〔或人云〕谷山郡、右大臣秀頼公の子孫と云もの今谷山内に残りてあり、

○谷上郷

〔和名抄〕に谿山郡谷上とあり、谷上ハ多仁加美と訓むべきか、又タニノへともよむべし、名義は山谷に由有て負せたるべし今此郷名傳ハらず、〔百本云〕谷上は谷山上の國を按ずるに谷山郡、谷山村ありと云りき、

○久佐郷

〔和名抄〕に谿山郡久佐とあり、久佐は俱佐と訓むか、いまだ詳ならず、

〇鹿島郡

〔延喜式〕に薩摩國鹿島郡あり、〔和名抄〕に薩摩國鹿兒島、加古志萬とあり、名義いまだ詳ならず、〔ある人の説に〕老翁が無自勝願の小舟を作りし處なれば籠(カゴ)島の意なりとに鹿兒島の事も見えたりと由ある事ともいひてカゴとは唱(な)さればいかになり又〔開闢神社の縁起〕云々の起りは日向(日向)諸縣(諸縣)吾牛が鹿皮を着て海をわたれりし時より(鹿)神天皇紀十三年(鹿)の事なりと見えたり、さて〔鎮西要略〕に弘安九年蒙古人舟師自志賀沖(環)來而燒(管)崎人家(其舟)大將名(阿)答海、賊兵數百人所殺引(退)海上(筑)後國三池田尻兒島(郎)種長爲(蒙古)合戰之賞(加)封於薩州鹿島十分一、〔蛙蠅抄〕田尻(文)書に可令早田尻三郎種重子息領知薩摩國鹿兒島郡職内(分)壹事右依(蒙古)合戰之忠(所)被(宛)行(也)者早守(先)例(可)領(掌)之(狀)依(仰)下(知)如(件)弘安九年閏十二月廿二日相模守平朝臣判(陸)奥守平朝臣判(など)あり、さ(郡)大様は〔和名抄九卷〕に鹿兒島郡都萬(在)次(安)薩、(已)上(三)〔寛知集〕に鹿兒島郡云云(二)十七村、〔鄉村帳〕に鹿兒島郡吉田郷(佐)田(浦)本(郷)なり、配(荒)田(郡)元(昔)房(原)良(上)伊(敷)下(伊)敷(小)山(田)花(ヶ)棚(永)吉(川)上(比)志(島)大(道)〔サ)草(サ)ウ)牟(田)小(野)中(村)武(下)田(花)野(西)別(府)崎(之)原(吉)野(鹽)原(横)井(など)あり、〔輿地圖〕に因て考ふるに鹿兒島郡東は大隅國始羅郡又海を限とし南は谿山郡西は阿多(日)置(二)郡北は薩摩郡に隣て東西二三里南北五六里あり郡東に鹿島(城)下ありて豊饒の地なり、

田尻氏と鹿兒島

〇大隈

郷村

鹽城

贈位

祭神

所在地

一宮

冠嶽

花尾權現

祭事

所在地

神階

〇鹿兒島神社

〔三代實錄四卷〕に貞觀二年三月廿日庚午薩摩國從五位下鹿兒島神授(從)五位上(と)あり、鹿兒島と云御名は地名によれり〔延喜式〕に大隅國桑原郡鹿兒島神社とあるはいぶかし、さて〔神代山陵考附記〕に豊玉彦夫妻云云(三)代實錄曰鹿兒島神亦祭(此)二神(一)在(鹿)府神食村(今)號(氏)瀨明神(古)爲(鹿)島地主神(云)とあり、〔澤)手(村)後(に)氏(國人)云(鹿)島郡鹿兒島神社は城下の産沙神にして當國の一宮とす、常足按ずるに〔蛙蠅抄〕鹿津家(文)書に異國降伏御事去十月廿七日(關)東(御)教(書)今(月)廿(日)到(來)案(文)如(此)如(狀)者(薩)摩(國)一宮國分寺(宗)社(殊)可(致)三(精)勤(之)由(相)觸(之)可(令)執(達)卷(數)云(者)任(被)三(仰)下(之)旨(可)被(致)御(祈)禱(忠)一(候)仍執(達)如(件)正(應)五(年)十(二)月(廿)一(日)冠(嶽)別(當)住(僧)御(中)左(衛)門(尉)判(と)あり(さ)て(此)冠(嶽)と(云)も(の)此(處)の(氏)瀨(一)宮(と)せり(さ)る(か)さ(ら)ば(此)文(書)に(一)宮(と)ある(は)鹿(兒)島(神)の(事)な(る)べ(し)、(一)宮(能)に(け)枝(開)神(社)を(薩)摩(の)一宮(と)云(は)鹿(府)より(四)里(計)西(北)カ(コ)シ(マ)ク(郡)山(郷)に(あ)り(て)大(社)な(り)同(所)に(し)て(少)し(西)に(花)尾(權)現(と)て(ある)は(丹)後(局)を(祭)れ(り)社(より)十(間)斗(下)に(タ)ビ(シ)ヨ(あり)て(切)石(に)銘(あり)丹(後)局(御)茶(屋)所(と)あり(冠)嶽(と)ある(は)鳥(朝)子(た)ご(な)い(ふ)に(は)あ(ら)ぬ(か)し、水(郡)に(あ)り(加)志(久)利(に)ち(か)し、

〇稻荷神社

〔南浦文集下卷〕に十一月初三日即稻荷大明神之祭禮也近郷近所之由(夫)野(民)群(集)而(醉)飽(矣)云(と)あり、〔國人)云(稻)荷(社)は(鹿)兒(島)の(城)下(上)町(に)在(て)大(社)な(り)神(官)數(家)あり(と)云(り)〔彦)山(人)云(社)は(南)に(向)て(立)り

〇伊爾色神社

〔三代實錄四卷〕に二年三月廿日庚午薩摩國正六位上伊爾色神從五位下とあり、伊

〔名義〕
所在地
歳の宮

爾色は意志仁支と訓ふべし、御名は地に依て負せたりと聞ゆ、
色を志支の假名に用ひたる例は「古事記」に印色之
入日子命とあり、さて此御神事は「江川氏云」伊爾色、神は鹿島山、北一里許に下伊敷村あり、そこに祭りて大歳、神といふ俗に歳、宮と云なりと云りし、
「山陵考」に神食村とあり、委くきかまほしきわざなり、

○浄光明寺

草創
修造
沿革
所在地
島津忠久
公の墓

〔南浦文集上卷〕に浄光明寺上梁文云、薩摩州鹿島郡浄光明寺者無量壽佛之道場也、山名松峯、島津高祖忠久公領此三國之時、與一遍上人、之流亞宣阿、俱共來而同居、此國權與於無量壽佛之本堂、其權與不知、幾年月之久矣、先是忠國公有修造佛堂者、其完葺之板漫生、其翼十一代、住持不忍視之、雖有修補之志、然未敢果、矣爾來歷年月、者久而匪管板之生、其穢材木亦腐朽矣、十三代之住持又不忍視之、修補之志造次頓沛、未嘗忘之、然而短臂不及、痒處思而未果者、殆乎十年寸積尺累、至於今年戊午、歷十一年、歲月而其功成矣、我素以儉而易足、爲其川矣、二三有司聞之於薩州殿下、家久公、公本有修補之志、與住持之志、如合符節、使完葺之板十二萬、而寄附之於本堂、於是、是我願既滿、衆望亦足、云とあり、
鹿島にあり、東向にして時宗なり、大寺にして鹿兒島三ヶ寺の一なり、島津忠久公の墓あり、

○都万郷

〔和名抄〕に鹿兒島郡都万とあり、都万は豆麻と訓ふべし、名義いまだ考へず、
〔式〕に郡都万郷とあり、さて此郷名今は傳はらず、

○在次郷

〔和名抄〕に鹿兒島郡在次とあり、在次はいかゞ訓ふべきにや、此郷の事すべて詳ならず、
在次の次、田の誤にてはなきか、今此郡に荒田村あり、〔上田百木云〕今薩摩郡に百次郷あり、〔九州圖〕今此郡に左次郷ありと云り、

○安薩郷

〔和名抄〕に鹿兒島郡安薩とあり、是も詳ならず、
安薩はアサチなどよむべきかなほよく考ふべし、〔兵部式〕に常陸國磯原郷といふもあり、

○鹿島

〔島隱集序〕に云、有客持其國南禪寺僧桂菴、島隱集凡若干萬言、予不_レ解華語、索紙筆以告予、予曰、桂菴、吾國緇流中之翹楚也、精内典、通儒書、旁及莊列、無一之不_レ究、心矣、成化四年、觀光上國、得從華之大夫士、遊益增其所、未_レ能歸避、亂居豐筑、肥之三州、凡其險詠性情、應酬于求之作、皆在、於是終居薩州之鹿島、云、〔同書上卷〕に文明十四戊戌云、惠山大門禪師留錫於薩陽府、今將東歸、一日過龍雲翁、因告千里之修途、聊以五絶之佳章、可謂言簡而情備也、予不願卑蕪之詞、謾步殿韻末、以壯厥行色、云、
〔同卷〕に翠深禪師與予交游尤厚者也、一東一西、問厥無恙、互忻慰者、六七年于今、戊子復得々來、

荒田村
百次郷
左次郷

島隱集

桂庵禪師

惠山禪師

翠深禪師

桂岩禪師

而訪予於薩陽之新居〔下卷〕歡并之情不可知矣於此是作詩一章見示不顯狂斐和高韻心明遠自海東來、
 筆寫新詩一拂現埃一乃稱雲山九州外、半間茅屋一鹿開、音書雖報共無恙、別恨難除積作堆、幸野巖、清
 渭水白鷗濱、一應詩成喜與新、老友江湖苦樂土、竹間漁屋下誰隣、〔同卷〕に扇面、山連鹿島、是
 吾廬、一明朝萬里餘、津樹沙禽如送客、扁舟解纜暮涼初、薩州閣下頃斷酒
 肉而學清淨法、殊延僧侶而看洩汰之教、予預其數、焉散筵之後、一日乞暇而
 還于鹿島之新居云云、〔中卷〕に薩陽城遷于熊峯恬知藏、一話未了千里告歸、
 竟及分乎、出詩需和、蓋其社友壯南行之佳篇也不克默止、卒以韻者三章
 〔下卷〕に頃自日州趣薩之島陰、桂岩老師揖予於途中、告以鄉僧誰某、予與之
 語焉不覺鄉念感于懷、竟迫夕陽、歸島陰之茅菴、掃塵几而得詩、蓋老師前
 日造門題以代鳳字之佳篇也茲、日又其徒來信宿而去矣不獲默次、韻者三章呈
 其客軒之下、且述卑懷、

東林居士

清水城

途中等我問名來、野鳥如鶯花似猜、立已多時傾蓋好、島陰路踏夕陽回、
 〔下卷〕に東林居士者江州、兩大家佐々木氏之華語也癸丑之秋秋初筵於百南安國之新居、相繼而會者再也三也
 茲歲春首予還于薩之島陰、兩來別恨之在、讀者多於花、暗於霧、今也春之仲中、海之雲帶、風(風カ)泉老師之
 命而來予聽其發言、倒衣出迎雅談頗有日焉、〔志布志記〕に清水城は鹿兒島郡鹿兒島にあり
 有夜焉又告別而去矣相送別到門首云云、〔志布志記〕に清水城は鹿兒島郡鹿兒島にあり
 給ひ氏久公逝去の後至德年中に清水城へ元久公移り給ひて久豊公・忠國公・忠昌公、

城地

海陸里程

櫻島

噴火と海

石敢當

田の神
巖殿

忠治公・忠隆公勝久公若年の時しはらく居給へり此城地は今大興寺山の上にあ
 り、〔延享武鑑〕に松平薩摩守從四位宗信・献上銀五十枚寅・四參府、拜領卷物三十、御
 卯・四御暇云云七拾七萬八百石居城薩州鹿兒島江戸より海陸四百一里、肥前國筋、大坂迄海陸
 里是より出州又鹿兒島より京泊迄舟路四十九里大坂迄三百十里日向國筋伊豫路鹿兒島より海陸三百五十五里
 大坂迄百九十一里鹿兒島より日向國細島津迄陸路四十二里是より出舟又鹿兒島より細島津舟路百五里大坂迄
 二百五十四里日向國筋後路鹿兒島より江戸迄海陸三百四十七里大坂迄代々城主島津氏、薩摩・大
 隅・日向三國主兼領琉球國とあり、又〔西遊記〕に鹿兒島海は入海なり西岸は薩摩
 東岸は大隅なり南北凡二十里餘東十三里に餘れり此海の真中に櫻島あり廻、七里
 あり此海南海事なれば潮の満干常に多し然る安永年中櫻島大燒の後此海水五六
 尺高く成れり處に因ては一丈餘も高し鹿兒島の城下も下町、築町の邊月の十五六
 日潮高く満る時は近年海水町に溢登て其難儀に及べり十四五日、比、潮高ければ
 町中高下駄にても歩行し難く洪水の如し國主より様々堤などを築て潮を防ぎ給へ
 ども全體の潮高く成りたれば云とあり、〔又云〕薩州鹿兒島城下町々の行當り或は辻街などに
 付たりいかなる故と處の人に問に昔より有來れる物にていかなる故と云事をしらずと云後、〔櫻耕錄〕
 を見しに此事出たり、〔其文曰〕今人家正門當卷階橋道之街、一小石將軍二或植、一小石碑、其上二百三
 致當云云とあり薩州は日本の極西南に有て唐土に近く昔は船の往來も自由なりしかば彼地にてかやうの事
 も見及び來たりて此地に作れりしにや又田島の中に石にて衣冠の像を彫て居たりしかば、彼地にてかやうの事
 りと云是も〔櫻耕錄〕に見えたる石將軍の類にして日本、衣冠の像に作る物なるべし云云石敢當は京高辻天
 滿宮の社前に昔は有しと云を今はなし、〔又云〕鹿兒島の城下に巖殿と云物あり多く水屋のもと床、下などに
 住て其形巖殿に似たり其巖殿は巖殿の句に似たり故に巖殿といふなり食物を食り器を破損(ヤブリソコナ)
 ふ事常々鼠より甚し膳碗飯櫃などに此鼠一度入る時は其臭(クサミ)やまず幾度あらひ清めても盡る事なし

刀匠

又此鼠座近く出る時は其臭鼻を穿ちて堪へがたし其鳴聲大にして雀に似たり(中山傳信錄)に琉球の鼠は雀一聲ありと記せり此鼠もとは琉球の船に付て渡來れるが今は町々家々に甚多くなれりと云此鼠長崎にも渡來たりて町家に多くありされども薩摩には及ばず(或説)に紅毛人此鼠を以て麝香を作ると云賦に秘法もあらば麝香ともなるべきほどの香氣ある鼠なり(新刀弁疑)に國次薩州鹿府に住藤原國次此作あら鈍小にて多く匂深し國平が作に似たり、

○福昌寺

〔島隱集上卷〕に文明辛丑玉龍主監和扇而詩、重用韻別錄

胸波萬頃鑑波澄、山現玉龍雲一層、非處我師仁愛地、無能六十奈村僧、

〔島隱漁唱中卷〕に釣雪禪師者東關之北上野州綠人也遊方之次掛錫於薩陽禪窟玉龍峰、殆及三十稔去載之秋辭竜峰而緇欲問桑梓於萬里之外云云、〔島隱集下卷〕に秋月緇郎薩之産而遊藝于中州、年既久矣專師雲谷翁、畫工究其妙焉壬子之秋錦旋以爲榮於、是福昌老師傍客軒而居焉茲歲難日寫山水一幅、傍題詩以希家國昇平也於戲乎詩也畫也二美備矣實可喜尙者乎仍庶韻綴三章、

西南極地薩陽城、世出名緇誇價聲、此老能詩又能畫、心如水鏡自清平、

官軍起海夜圍城、畫角吹殘月下聲、一陣東風雪消盡、繞花啼鳥語昇平、

中州要路赤間城、舟子朝々喚渡聲、君說東遊我順耳、寒垣風物恨初平、

〔扶桑禪林僧寶傳八卷〕に石屋禪師出薩州藤氏母阿多氏夢白衣降臨有身及生異常兒六歲投本州廣濟寺犯童子之役云云應永改元三州太守島津公建梵刹一起

石屋禪師

釣雪禪師
清人秋月

草創

宗派寺領

詠叢

師爲開山師以玉龍福昌名之蓋表昔日夢中所授也常居一千五百指鐘磨交鳴規繩井井巋然成一方望刹云云〔南浦文集上卷〕に元久怒翁創福昌一子爲僧載烏巾云云、〔和漢三才圖會八十卷〕に薩摩國玉龍山福昌寺禪宗寺領千石太守島津氏建立開山鎮梁屋禪師後小松院朝應永元年草創など見えたり、福昌寺禪宗にして越前派なりカゴシマにての大寺なり東に向てたて領主の菩提所也、

○龍雲寺

〔島隱集上卷〕に温岳禪郎不憚脩途之勞得々而來訪予於肥陽之客舍實非道情之厚何之有耶作此詩爲謝

錫飛清風海外秋、道情不厭客途脩、因君相約龍雲寺、異日僧床添一頭、

〔島隱漁唱上卷〕に文明十四戊戌二月十有一日達薩陽龍雲精舍忽脫艱難詣函丈左右見相願之厚寔重主之命也一夕坐話之次求予近作蓋詩者志之所之也前年在後筑元旦燒香面南以祝是國之安平其詩袖中之所携也出以備尊覽主盟禪師賜感和於是次其韻作小詩且記觀光之初筵也

花柳風前春滿城、太平家國不言兵、白頭老矣紅塵客、纔入此門心跡清、

惠山大門禪師頃留薩陽府今將東歸一日過龍雲翁因告千里之修途聊以五絕之佳章可謂言簡而情備也予不願卑燕之詞謾步嚴韻之末以壯厥行色

天涯爲客處、壯語喜逢君、豈謂梅霖夕、月來風破雲、

又詩に五君とあるは何をいふにや
屢見遺賢出、憑誰數五君、山蘿風擺後、夜鶴護殘雲、

又詩に客舍學壓底とあるは寺をさせりともきこえず
客舍暑塵底、開窓對此君、垂々吾老矣、跡欲懶於雲、

又叢社とあるは精舎をさせるにやいふかし
叢社再興日、受恩朝聖君、飛騰天只赤、五嶽脚跟雲、

又
禪林風月老、來謁紫陽君、衰鬢莖々雪、新詩藹々雲、
とあり、

○憩源菴

〔島隱漁唱上卷〕に六月十有七日隨龍雲翁宿于憩源菴

暑氣炎々天若蒸、偶尋佳處簇烏藤、一溪流水千竿竹、詩思清人六月氷、
とあり、

○冠岳

〔島隱漁唱上卷〕に去歲孟夏予隨太守及幕府之諸公遊冠岳靈地踞踏如唯謹示、

詠菴

今也仲冬初四再入山雖涉日次無爲故爲幼學講魯論是夕雪晴月清、偶與
教徒數輩童子六七人沂溪水而折梅還、興誠不淺仍作小絕句以記再遊之夕
前年官駕入山時、白首追隨驚境奇、好是梅花溪上月、數枝氷玉再遊詩、
和冠岳主席佳作

房々晚掩白雲深、路自巖根通澗陰、雖是山中非舊宅、霜松雪竹歲寒心、
用前韻

風景蕭條歲暮時、仙山移步物皆奇、松間暮雪吹花落、鳥亦關々似督詩、
冠岳薩之靈地也後巖峭峻其巖貯於一水清而窪者恰似視池之形雖歷淫雨甚
旱未嘗視其有乾溢晉傳云稚子幼童之學字也掬以供視滴則無不能書者
故水之名鳴乎海西不亦奇哉山之主席作詩見示仍復韻且述故事

日上高岩宿霧開、連空青壁絕梯媒、兒童學字視池水、筆下龍蛇送雨
來、霜月廿
有二日
とあり、

○皇德寺

〔島隱漁唱上卷〕に是日太守過皇德精舎予與玉林翁隨官駕而爲遊林翁有詩
次韻

古寺山園幽洞陰、石橋々畔綠苔深、禪窓畫靜啣花鳥、似適問僧賢守心、とあり、

○冠岳教寺

〔島隱漁唱上卷〕に文明戊戌孟夏十有一日予隨太守遊于冠岳教寺境佳而人傑也山名冠又號仙者昔秦徐方士怨樓船而求藥於蓬萊之仙府始來于此地脫彼衣冠而着我釋服遂相攸以栖止焉山之巔有水清淺而可浸手雖霖潦之夏不添其深早亦無會乾靈異匪一或以爲蓬萊殆不妄者乎今也不啻入此佳境剽陪貴遊之席寔千載之一遇也不堪歡林之至謹製里語三章爲記焉、

詠遊

徐福會從海外來、初知日域是蓬萊、仙園花木春常有、祝得邦君萬壽盃、

仙樂花飛絃管樓、滿筵佳士嘉清遊、主人有德境彌顯、一嶽高擎冠九州、

從一神人來脫冠、仙山景象遠天壇、層岩萬丈絕巔水、雨不添深旱不乾、

〔島隱漁唱下卷〕に冠岳主尊近作躑躅花詩托人以及管見於予嗟冠之佳境夢想不已今見詩益思會遊耳仍以韻

躑躅千層映翠微、春風香散講餘衣、境佳恰似嵩陽寺、每憶會遊心欲飛、とあり、

○妙谷寺

詠遊

〔島隱漁唱上卷〕に暮春二十有四日赴妙谷精舍途中甫典藏作二句求予之添蛇足仍應求爲絕句

數簇人家一株霞、有花離落綠交加、年々春暮城西寺、隨例追隨太守車、

次韻

雨後峯巒雲半霞、詩情偏似晚來加、疎鐘一扣斜陽外、飯路布花樵者車、

玉洞翁翁單輿以赴妙谷之請詩興不覺而觸于懷重用班字賜玉章雖參寥子臨平道中風蒲之吟不相讓者乎予亦再攀嶮韻云

師命壯歲我衰顏、咫尺對床霄壤間、高韻難磨燈欲曙、華々鬢髮是一詩班、とあり、

○延慶寺

〔島隱漁唱上卷〕に薩州閣下頃斷酒肉而學清淨法殊延僧侶而看洗汰之教予預其數焉散筵之後一日乞暇而還于鹿島之新居閣下携予到延慶精舍宿矣主盟得翁老禪見相待之厚也聊効逆社接陶醉漢之故夏將改酒戒然閣下以不飲而強制之手亦有愧於心而不及舉蓋焉翁笑曰是般若之點湯也何妨之有耶於是不得默既盡醉矣仍作是詩謝閣下仁恕且自解嘲云

山徑泥深水漲川、追隨舉駕雨中天、高官不飲僧還醉、顛倒袈裟作枕眠、

とあり、

(鹿兒島郡)

〔島隱漁唱下卷〕に釣雪老己酉之冬應官命、領一寺於城南某山、予亦居城寺、于今一兩歲故春首之會先祝以檀門千歲之繁榮、次韻者亦然也。

惟德何人不潤身、四來金玉一鄉新、君居山寺我城寺、共視檀門千歲春、とあり、城南山寺いまだ考へず、重て按ずるに城南山寺はカゴシマの大興寺を云なるべしカゴシマの清水の城と云は大興寺の上の山にて本城とも云なりと見たり。

○泉菴

〔島隱集中卷〕に文明予頃移居於城西之地、妙圓老師禪餘作詩以賀、挿草初意、厥扶起力立可致殿閣廊廡之完好、寔堪珍戴、謹舉高韻、展拜謝之忱。

城西下地故深幽、泉在怪岩圍處流、四面回頭山似畫、双趺展脚屋如舟、新詩相賀貫華軸、陋巷堪誇多景樓、何夕招師共乘輿、丹楓江外白蘋洲、文明丙午之秋貞上人來自肥陽、告以負笈之志、予素雖味司馬德操之水陸、且受介者之言、遂分榻於擁葉之室、及涉日逾月而視其所、以觀其所、由察其所、安我知其為善人矣、時在海岸之尺地、每歲為暴風怒潮、殆被隨敗、不遑營

大興寺
清水城

詠

草創

詠

湖月禪師

治以故頃相攸於城西、而新築屋方數椽耳、地有清泉、人名以泉菴、于此予彼從、予者徒執勞役、至廢己業、尤為可愧焉、然公也行有餘力、則以學文或雖諸友談論緒餘、儘有閒於過進、於誠者擇之從之、置之胸次、而不為無直諒之益、其志可敬焉哉、茲秋鄉書緬來、東卜日蓋其鄉、臨川山者公之先廬也、一遊留汝兩三峯、破屋秋風愧見天、舊築沙埋松下經、新居水遶竹間泉、勤勞不厭衰翁拙、直諒偏依交友賢、好是家山歸去處、有詩可寫筆臨川、

○不斷光院

〔志布志記〕に弘治五年鹿兒島不斷光院建

○廣濟寺

〔島隱漁唱上卷〕に次廣濟主盟尊韻、謝高軒過、右序略之

竹映晴沙々々映、豈圖高駕此飛來、一緇林今視鳳凰、一朶祥雲五色開、〔島隱集中卷〕に文明丙午間前廣濟主盟湖月禪師之幽居

聚景園中花月春、扣門幾度踏芳塵、詩筵不續兩三歲、今夜故驚佳句新、文明己酉之問上人茲歲秋冬之交分榻於予陋巷之室、於是前廣濟主盟湖月禪師作唐律一章、寄上人、以問安否、其詞怡々如也、蓋公者貴家、連枝禪林之巨植也、性好幽閑、志尚古學、氣節清高、寔可敬哉、仍次韻者三章、獻書幌之下

薩摩之下(鹿兒島郡)

雪岑和尚

玉樹、連枝拔二清、移栽僧畝、養培成、相期佳實廟廊上、昇國山川增價聲、
此外二首ハ是ヲ略ス
 又中卷にも往「南浦文集」中卷に前廣濟雪岑和尚生於
 府君親族之家譜學於相國仁如之會裡嬉笑聯句、怒罵聯句、誦經於是、說禪於
 是、八十餘年口不絶吟手無廢卷定山稠廣之中在四十餘員之僧徒鳴其文學
 者二十餘員云今住人間者殘僧僅一二人而已、雪岑和尚之遺風殆乎泯盡矣嗚呼
 時乎命乎此地之叢社逐日凋零可如之何哉是歲元和丁巳暮春予偶隨大守家久
 尊君之大師路過伊川見定山之不如古昔也賦戲吟二章聊述旅困之老懷云

昔時廣濟雪岑、徒、飾外虛中年已徂、三十餘僧懷略韻誨人文學一人無、
 除部松杉無法音、定山遺跡更難尋、遙思四十餘年昔、差列諸徒侍雪岑
 と見えたり、

薩摩之下(河邊郡・類娃郡・揖宿郡・給黎郡・谿山郡・鹿兒島郡)終

薩摩志附錄

○貴海島

鬼界島
貴海島追

〔鎮西要略二卷〕に後白河院云、爲潮流於伊豆大島後渡鬼界島亦到琉球卒、
 〔東鑑七卷〕に文治三年九月廿二日所衆信房號守都爲御使下向鎮西是天野藤内
 景相共可追討貴海島之旨依合嚴命也件島者古來無飛船帆之者而平家在
 世時薩摩國住人阿多平權守忠景依蒙勅勘逐電子彼島之間爲追討之遣筑後
 守家眞家眞粧軍船雖及數度終不凌風波空以歸洛云今度同意豫州之輩
 隱居歟之由依有御疑貽有此儀又去年河邊平太通綱到件島之由聞食之間殊
 所思召企給也云遠景元來在鎮西云、〔同書八卷〕に文治四年二月廿一日天
 野藤内遠景去月狀昨日自鎮西參著去年窮冬令郎從等渡貴賀井島觀形勢訖
 令追補之條定不可有子細但雖相催鎮西御家人等不一探之間頗以無
 勢重可被下御教書云所衆信房自身可渡海之旨殊結構然而遠景加制止
 之間遣親類等尤爲精兵之由載之此事兼日風聞于京都仍自執柄家有被
 諷諫申之旨降伏三韓上古事也至末代者非人力之所可覃彼島境者日域大
 難測其故實爲將軍士定有煩無益歟宜令停止給之由云就之暫可令猶

貴賀井島

名義
經の大
臣の故
事

永良部島
新島
後流
の地

豫之旨被仰遣遠景云云三月五日所衆信房去月之比自鎮西進書狀貴賀井島渡事條々言上去年依親得件形勢海路次第令畫圖之就覽是爲難儀之由諸人依奉諷詞頗難思召止御覽彼繪圖之後強不可疲歎之由更思食立云云此事信房殊竭大功之間今日所被加賞也五月十七日遠景已下御使等渡貴賀井島遂合戰彼所已歸降之由所言上也而宇都宮所衆信房殊施勳功云云とあり、貴海は「源平盛衰記」に鬼界は十二島なり云云昔は鬼の住ければ鬼界島とも名付たりとあり、(和漢三才圖會八十卷)に經大臣之故事出(下學集)及(神社啓蒙)昔輕大臣爲遣其子愛國春衡又爲唐使一時支那人飲之不旨樂身作彩畫頭戴(クイ)而然火即名之爲(鬼)經流鳴咽(頭)血書(日)我元日本華京(客)汝是一家同姓(人)爲(子)爲(前)世(契)隔(山)隔(海)懸(幸)經(年)流(涕)蓬(蒿)宿(思)日(馳)思(關)親(形)破(他)鄉(作)燈(鬼)爭(歸)滿(里)寄(此)身(と)し(火)の(か)げ(は)う(か)し(き)身(な)れ(ど)も(子)を(思)ふ(開)の(か)な(し)か(り)け(る)春(衡)見(之)以(爲)我(父)也(遂)求(燈)鬼(歸)日本(之)日(没)州(破)黃(人)或(曰)齊(明)帝(時)人(或)曰)文武(帝)時(人)而(無)輕(大)臣(者)且(遣)唐(使)者(推)古(朝)道(大)上(御)田(鑰)於(唐)而(新)明(朝)歸(是)遣(唐)使(之)始(也)文武(朝)梁(田)眞(人)爲(遣)唐(使)虛(設)分(明)とあり、(和漢三才圖會)に薩摩國鬼界島在硫黃島之巽其良有永良部島巽有新島とあり、「地圖」に因て考ふるに鬼界島は硫黃島東南數十里にあり治承比俊寛僧都を流せしは此島にあらずされども後流を流せし硫黃見たり「島隱集中卷」に送大醫陳祖田詩

古方靈藥舊家傳、赫々皇華碧海天、祇爲上醫元活國、細論太守近安邊、
九夷鬼界二千里、一夢龍山二十年、况是高僧吾故友、屋梁落月曉猶懸、

成經康賴
流瀆の地
〔名義〕

鬼界の十
二島の
チトの島
白石の島
硫黃島

和歌

○硫黃島

〔源平盛衰記九卷〕鬼界島流に依中宮御産御祈禱被行非常大赦之内薩摩方硫黃島流人丹波少將成經平并判官康賴法師可歸洛之由御氣色所侯也仍執達如件治承二年七月三日とあり、名義は硫黃を出す處なるに依て負せたり、又「千載和歌集旅部」に平康賴

薩摩がた沖小島に我ハ有りと親には告ッよ八重の潮風

とあり、〔源平盛衰記七卷〕に鬼界は十二の島なり(五島七島と名づく端(ハシ)五島は日本に從へり硫白し故に白石島と云丹波少將をば奥七島が内三泊の北硫黃島にぞ捨たりける云云今も硫黃多ければ硫黃島とぞ申ける(三)後には鉤舟を頼みて(鉤舟を頼みて一本に繋舟に手をすり懸かたりつたり)後流も康賴も硫黃島へぞ寄合ひける云云、〔源平盛衰記七卷〕に云云八重の潮風の歌にそへて

思ひやれ暫しと思ふ旅だにもなほふる里は戀しき物を
〔同書九卷〕に丹波少將成經熊野三神を祭るとて

流よる硫黃が島のもしほ草いつか熊野にめぐりつづへき
又康賴入道の膝の上に落たる檜葉にある歌とて

千早ふる神に祈のしげれバなどか都にかへらるへき
さて俊寛一人免許なかりければ

見せばやな我を思はひ友もがな磯のとま屋の柴のほりを

沖小島

有王丸

俊寛没す

可離山

夷三郎社

龜龍出現
の說

云々などもあり、こゝにひける盛衰記の内いさゝか文を、又「海東諸國記」に薩摩國硫黄島、「名處方角抄」に薩摩國沖小島は硫黄島をいふなどもあり、又「和漢三才圖會」に薩摩國澳小島、硫黄島、在薩摩坤海島高山常燒起出硫黄、俊寛僧都調于此近侍、小童有號有王丸者、從仕于俊寛之妻子、忠勤不怠、既而其妻亦病死以有女、遣門族之許、遠凌波濤、赴島謁于僧都、告洛之消息、焉僧都大喜曰深志不可忘之疾歸當告存命於女、也有王不背而探硫黄、拾海藻、俟商船適到、交易助主君、飢如此也、二十三日而俊寛卒、灰骸歸洛、遇小娘、語形勢、出家、弔苦提とあり、三才圖會、既も盛衰記により今事の簡易なるに付、が爲に此書を引出たり、「盛衰記九卷」に八月下旬に薩摩の地につさ九月上旬に硫黄島には渡りけるさても此人々日比露の命のさえざればさすがうさ身のあるほどは朝な夕なのわたらひ云云、島の物どもが申けるは此御棲より五十餘丁を去て可離山あり峯高くして谷深し其名を巒岳といふ彼岳にて夷三郎殿と申、神を祀奉り岩殿と名付たり此島に猛火俄に燃出て殊にあつたへがたき時はささぎまの供物を捧て祈奉れば火靜まり風のどかに吹て自案塔すとかたりける、「登壇必究二十二卷日本國圖」に七島あり硫黄岳あり、「西遊記」に薩州硫黄島の海中に時々龍龍いづる事あり今世に繪にかけ龍の如くにて口大なり長さ一丈或二丈もあり甚猛烈なる物にして人を見れば則食ふ島にて甚是を恐るよし

なり、

○竹島門

遺唐船の
覆没
竹島
「名義」
他計什麼

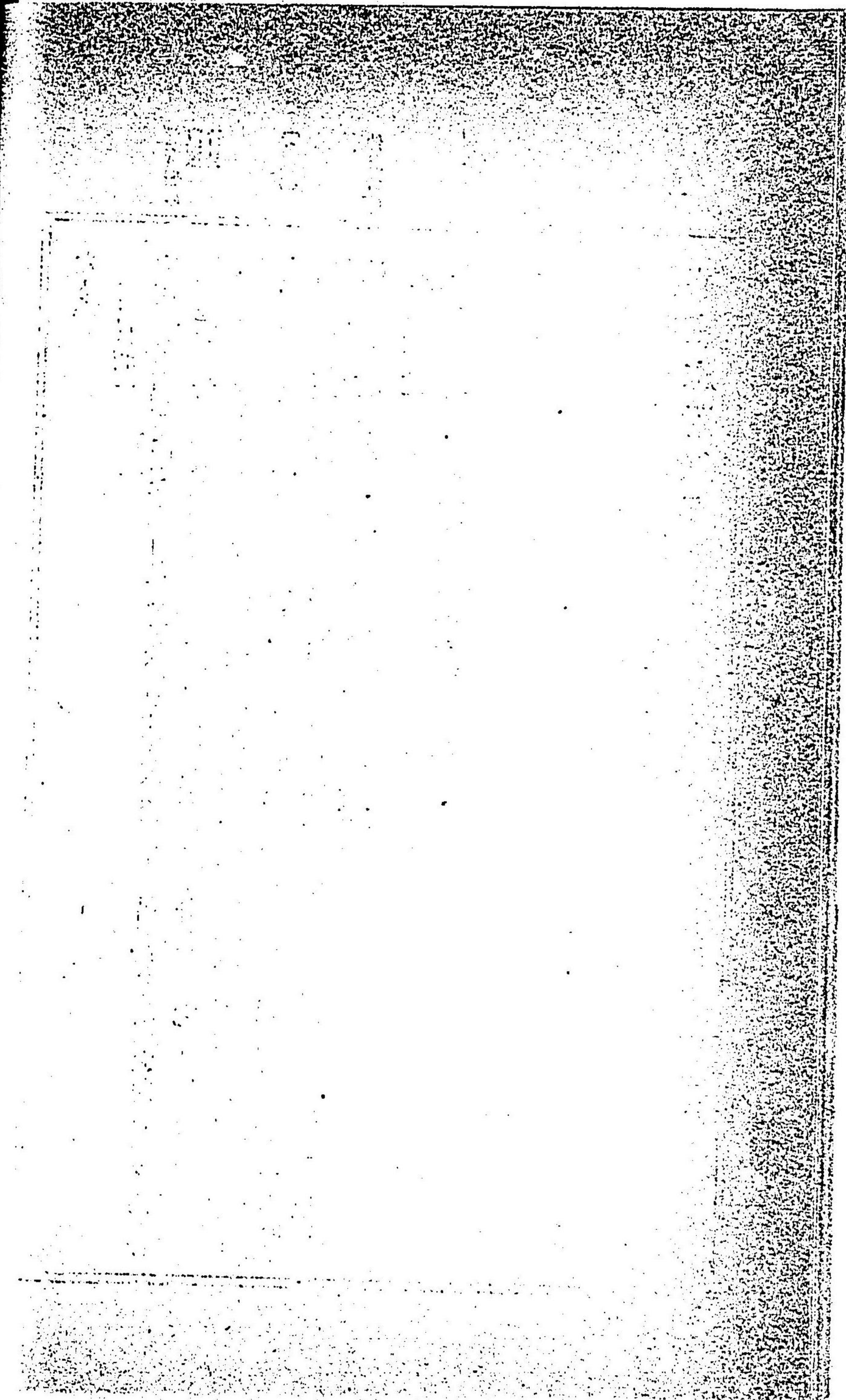
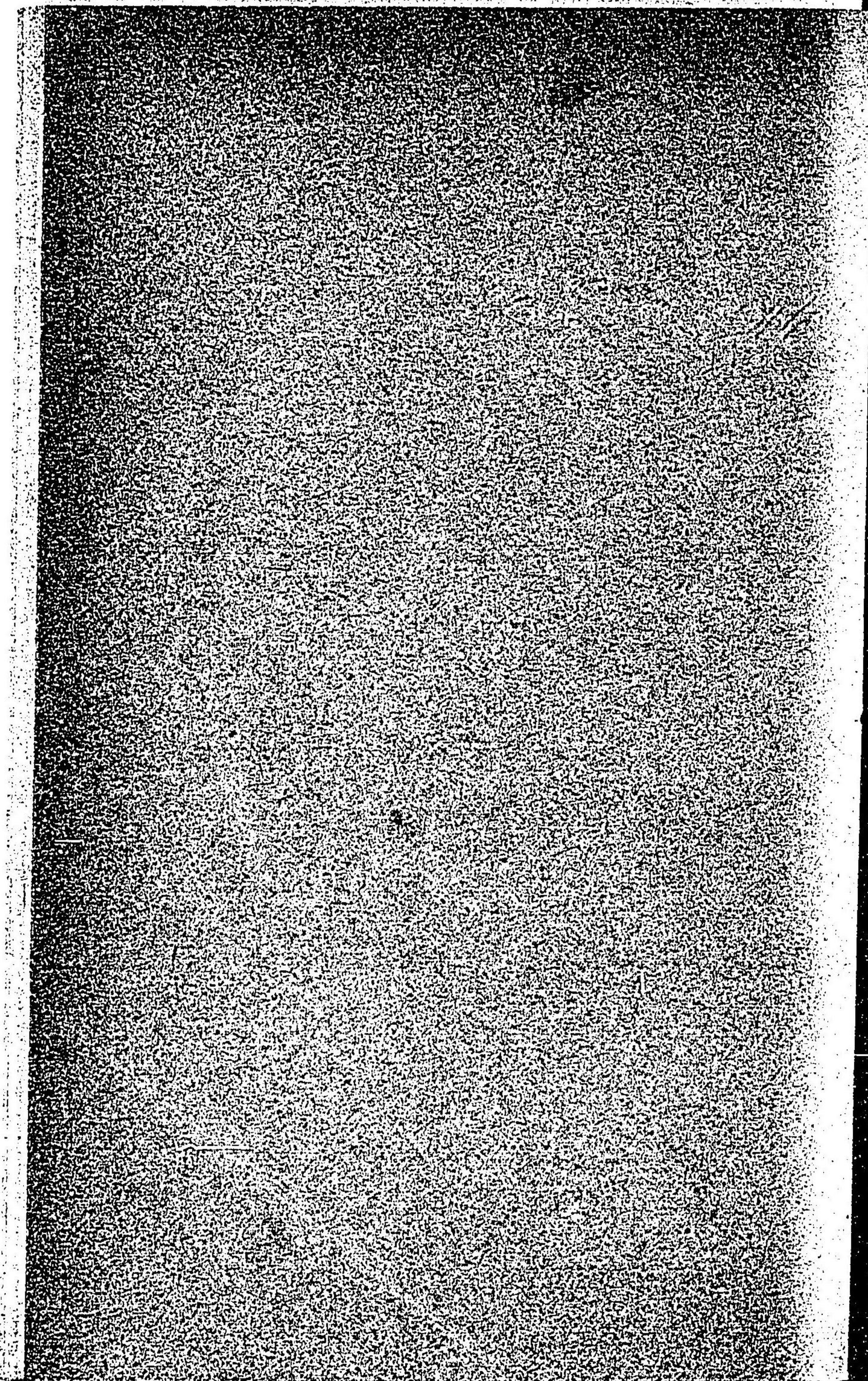
「孝德天皇紀」に四年七月被遣大唐使人高田根麻呂等於薩摩之曲竹島之門合、船没死唯有五人、繫智一枚、流遇竹島、不知所計、五人之中門部金探、竹爲筏泊于神島、凡此五人經六日六夜而全不食飯、於是褒美金進位給祿とあり、竹島は多可志万と訓べし、名義は竹多さ處などにて負せたるか、南國すべて竹より出る竹には二尺廻り余の「書紀通證」に竹島、在薩摩之西、別島也、距薩州百里與、竹あり四方竹にも大竹あり、「武備志」に竹島、他計什麼又、硫黄島、相去十八里とあり、島ともあるはこの島のことなり、

○五大院

「元曆文治記」に彌勒寺、末寺者云、五大院

薩摩志附録畢

薩摩志附録(竹島門・五大院)



壹岐志序

凡人之生斯世也豈能塊然徒處卒俱草木以消歇邪故學者得斯道於身而述以傳之人而以達之於攸久者謂之不朽大業也若學而不能述之則猶識於心而口不能言焉又與啞奚擇矣然近世之著作雖口出月新蓋切要之書少而蒐園冊子多矣著述豈可不慎與友人伊藤氏述而不作信而好古是以國史之所列傳記之所存奇蹤勝蹟漁獵靡遺管著太宰管内志七十餘卷初起筆也萬卷書豈能一一藏之邪百方求之苟聞藏書家則就其家借觀猶劉如之於宋敏求者三十年一日也可謂勤矣其所引證與篇秘典悉上古之正史而詳備明瞭無復餘蘊矣實可謂溫古泝本之寶筏者非邪厥功爲偉矣嗟不朽大業乎哉頃手其所著壹岐志來眎曰予處僻陬風馬牛弗相及且予老矣今也歸矣其能可復邪雖有話言曷能朝夕敢請題一言予時嬰病一臥二百餘日氣息脈々故謝不敏不可則予曰辱知以來垂二十年儼然辱臨之雖病烏可不終契乎無言邪何敢固辭雖然未諳壹岐之地勢將何言且也予於世一鴻毛何以承大手筆之役轉增愧汗內省疚無已乎其予嘗所聞知者因聊敘述伊藤氏著述苦心之狀以塞其責云

天保十二年歲次辛丑秋九月

安部龍士魚甫撰

名義

○神代
天比登都
柱成伊吉
生吉島造
伊吉連
登岐史
目頼子
和歌

壹岐島上卷

○壹岐島

「延喜式」に西海道壹岐島あり、「和名鈔五卷」に西海國壹岐、由岐とあり、「印本」由字有るは例に違名義はいまださだかならず、「本居大人」云伊岐島は「萬葉集」に由吉之麻と見え、「和」へり今古きつ「書紀綱目卷の卷」に以祗とよみ「古事記」にも壹岐島、由岐とあるに因て由岐を古訓と思ふこと明し然れども「懷風藻」に伊支、連と云姓を自録には「書紀天武」卷に「萬葉」に由吉とあるなどなを以思ふに必由岐とも通はし云べき故ある名義と見えたり故思ふに「書紀天武」卷に「萬葉」に由吉とあるある意は伊半伊波布山麻波留由々志由豆伊豆などさまに「書紀天武」卷に「萬葉」に由吉とあるありけむ故の名にもやあらむ又は長帯比賣命の辛國を征に行幸しをりなると此島にして神祭坐とて齋忌のことより出たる名かとも思はる、さて「古事記上卷」に伊邪那岐命妹伊邪那美命云云生伊伎由ありそは後に委くいふべし、さて「古事記上卷」に伊邪那岐命妹伊邪那美命云云生伊伎島亦名謂天比登都柱、「書紀一卷」に云云即對馬島壹岐島及處々小島、皆是潮沫凝成者矣亦曰水沫凝而成也、「書紀」無疏に壹岐者猶言雪也潮、「國造本紀」に伊吉島造、磐余玉穗朝代石井者從新羅海邊一人天津水凝後上毛布直造此文心得がたきふしさて「舒明天皇紀」に伊岐史乙等、「天武天皇紀」に壹岐史韓國又「姓氏錄」に左京、諸蕃漢伊吉連出、自長安人劉楊雅也なども見たり此内に史、姓は造と同姓にてあらむかなほよくかむかふべし、「繼體天皇紀」に廿四年云云目頼子初到任那時在彼鄉家等贈歌曰

柯羅屢爾鳴以柯爾輔居等所梅豆羅古枳駄樓武哥左屢樓以祗能和駄喇鳴梅豆羅古枳駄樓

壹岐之上(國志)

壹岐之上(國志)

國司職資
防、株
○奈夏朝
島司制
坂氏
和歌

〔令義解職員令〕に壹岐對馬日向薩摩大隅等國總知鎮押衛寇賊也。防守及蕃客歸化、〔皇極天皇紀〕に元年十月新羅吊使、船與賀騰極、使船泊于壹岐島、〔天智天皇紀〕に三年於對馬島壹岐島筑紫國等置防與、株、〔續紀九卷〕に養老六年四月丙戌始制云、壹岐對馬等司有闕選、府官人擁補之、選令に太宰帥及三國國司對馬國太宰選列事以上官人、權攝任訖馳、〔萬葉集五卷〕に天平二年正月十三日萃于帥老之宅、申宴會也云、壹岐守榎氏安麻呂

安麻呂歌
彼方歌
波流奈例婆字倍母佐枳多流鳥梅能波奈岐美乎於母布得用伊母禰奈久爾

壹岐目村氏彼方、〔同書十五卷〕に天平八年丙子夏六月遣使新羅國之時使人等各悲、別贈答及海路之上、勸旅陳思云、六續作挽歌

和多都美能、可之故伎美知乎、也須家口母、奈久奈夜美伎豆、伊麻太爾母、毛奈久由可牟登、由吉能安未能、保都手乃字良徹乎、可多夜伎豆、由可武士須流爾、伊米能其等、美知能蘇良治爾、和加禮須流伎美、新羅奇徹可、伊徹爾可反流、由吉能之麻、由加牟多登伎毛、於毛比可爾都

島司補任
醫師
官人の祿
公卿
島司

警固
島司を慰む

賑給
島司
白雉を獻ず

母

〔續紀九卷〕に養老六年四月丙戌始制云、伊吉對馬等司有闕選、府官人擁補之、〔同書十一卷〕に天平三年十二月乙酉令太宰府始補壹岐對馬醫師、〔同書十四卷〕に天平十四年八月丁酉制云、壹岐對馬多櫛等國、官人祿者令筑前國司以廢府物給、太宰府を廢する事は當給、年正月一件に見たり、公麻又以便國稻、依常給之、其三島、擬郡司并成選人等身留、當島一名附筑前國、申上仕丁國別點三人、皆悉進京、〔同書十六卷〕に天平十七年十一月庚辰制諸國公麻云、壹岐島各十方束、〔同書廿二卷〕に天平寶字三年三月庚寅太宰府言、府官所見萬有不安者四、據警固式於云、壹岐對馬等要害之處、可置船一百隻已上、以備不虞、而今無船可用、交關機要不安一也、〔同書廿三卷〕に天平寶字四年八月甲子云、壹岐對馬多櫛等司身居邊要、稍苦飢寒、出舉之、稻會不得利欲、運私物、路險難、通於理商量良須、務愁、宜割太宰所管諸國地子各給、守一万束、椽七千五百束、目五千束、史生二千五百束、以資遠戍、稍慰羈情、〔同書廿四卷〕に天平寶字七年四月癸未壹岐島疫賑給之、〔同書廿六卷〕に天平神護元年二月乙丑壹岐多櫛等國飢並加賑恤、〔同書廿九卷〕に神護景雲二年閏六月庚辰壹岐島飢賑給之、三年六月乙巳外從五位下田部直恩麻呂爲壹岐島守、〔同書卅一卷〕に寶龜二年閏三月乙巳壹岐島獻白雉、授守外從五位下田部直

壹岐之上(國志)

壹岐之上(國志)

博士醫師

年糧漕送

○平安朝
調を免ず
賑給

眞管王

免租

田制

島司選叙

息麻呂外從五位上二賜絕十四綿廿屯布卅端稻一千束(一)自從七位上笠朝臣猪養從七位上賞賜半之除常島田租三分之一(同)十二月甲戌太宰府言云壹岐多穢博士醫師一任之後終身不替所以後生之學業術不進乞同朝法八年遷替以示于祿永勸後學許之(同卅二卷)に實龜三年十二月己未太宰府言、壹岐島核從六位上上村主墨繩等送年糧於對馬島、俄遭逆風、船破人沒所載之穀隨復漂失、謹檢天平寶字四年格漂失之物以部領使公解填備、墨繩等欸云漕送之期不違常例但風波之災非力能制、船破人沒足爲明證、府量所申實難默止、望請自今以後評定虛實、微免許之、(同書三十四卷)に閏八月壬子壹伎島風損苗子免當年調、(後紀五卷)延曆十六年正月庚戌賑給壹岐島飢民、(同廿卷)に弘仁元年九月壬子從五位下眞管王爲壹岐權守、類聚國史八十三卷に延曆二十五年十一月(百七十三卷)十一月乙未太宰府言管內諸國水旱疾疫每歲相仍百姓凋亡田園荒廢伏望特免田租以濟窮弊、但隨損害定年遠近勅云壹岐等者並免一箇年、(同書百五十九卷)に大同二年冬十月丙子太宰府言、壹岐多穢兩島校出隱田一百四十町、須準諸國例賜島司公麻田并郡司職田以外悉班田百姓口分云者許之、(類聚國史百七十八卷)に弘仁十一年の事出たにひけり考合すべし、(令長義解第四)に選叙令第十二に凡在官身死及解免者皆即言上其國司大上國介已上中國核已上並關及下國守關者皆馳驛申太政官若太宰

防人

遣唐使船
の漂着
修師

壹岐直才
麻呂
廣根王

賑給

講讀師

帥及三關國壹岐對馬守者雖獨關猶從馳驛例其待報之間太宰遣判事已上官人權攝任訖馳驛發遣、(續後紀四卷)に承和二年三月太宰府言、壹岐島遙居海中地勢隘狹人數寡少難支機急頃新羅南人來窺不絕非置防人何備非常請令島備人三百卅人帶兵仗、戊戌十四所要害之崎許之、(同書六卷)に承和四年七月癸未太宰府馳驛言、遣唐三ヶ船共指松浦郡晏樂崎發行、第一第四船忽遇逆風流着壹岐島、類聚三代格(三卷)に應廢史生一員置修師事、右得太宰府解備壹岐島解備、此島所設器仗之中有弩百脚而無人機調難滿非常今新羅商人往來不絕警固之事不可以暫忘、望請廢史生一員將置修師仍請府裁者府加覆審所申者理者謹請官裁者右大臣宣奉勅依請、承和五年七月廿五日、(類聚國史十九卷)に天長五年正月丁丑外從五位下壹岐直麻呂任壹岐國造、(續後紀十二卷)に承和九年七月戊午舍人正六位上廣根王爲壹岐權守、(同書十三卷)に承和十年九月甲寅壹岐對馬等兩島並飢賑給之、(同書十四卷)に承和十一年四月壬戌太宰府言、管云壹伎等國島選人任職大小是同除災祈福彼是不異方今比國皆有講讀之職還失鎮護之助加以國分寺雜物觸類夥多既無綱維令誰檢領望請准諸國之例置講讀師者府司商量所陳有理望請准諸國博士醫師之例府司於觀音寺與彼講師共簡試部內精進練行智德有聞堪任講筵終始

壹岐之上(國志)

博士醫師

伴部刀自

警固

兵軍
伊岐是雄

警固

在原行平
起請登岐
水田等の

無變者將補任之者勅講師者依請讀師者莫更置之但安居齋會之日依延曆廿五年三月格以國分僧次第講之(同書十五卷)に承和十二年六月癸午太宰府言檢案內去弘仁六年七月廿五日格博士醫師教授之勞良有殊別遷代成選并以六考爲期今前壹岐島醫師外大初位下巖野勝眞吉在任之日今得六考一至于叙位被賜階准據格式恐有訛舛者府加覆審非唯眞吉以往之人亦尙然也望請眞吉位記換賜內位自今以後壹岐對馬等國島博士醫師同准此例者聽之

〔文德實錄五卷〕に仁壽三年五月庚戌太宰府言上壹岐島女子伴部刀自實率産三男一勅正稅三百束及乳母一人(齊衡二年十一月九日太宰府言上壹岐島女子伴部刀自實率産三男一勅實錄十七卷)に貞觀十二年正月十三日勅充壹岐島胃并平纏各二百具彼島元有甲太宰府依島解請充從之(同書十九卷)に貞觀十三年正月十五日太宰府言壹岐島兵庫號鳴(同書廿一卷)に貞觀十四年四月廿四日宮主從五位下兼行丹波權椽伊伎宿禰是雄卒是雄者壹岐島人也本姓下郡改爲伊岐(卷之十下卷)石田(同書廿二卷)に天平寶字三年三月太宰府言府官所見萬有不安者四據警固式於博多大津及壹岐對馬等要害之處可置船一百隻已上以備不虞而今無船可用交關機要不安一也(同書廿八卷)に貞觀十八年三月九日參議太宰權帥從三位在原朝臣行平起請二事其一事請營壹岐島水田一百町使充對馬島年糧曰檢文簿

六國一年所漕運對馬島年糧穀二千斛運賃并雜田料額三萬四千五十束就中筑前筑後肥前豐前豐後等國各三百二十斛肥後國四百斛運賃穀一万七十四束并網丁扶挾抄水手百六十五人係丁稻三千二百八十束凡厥所費大略如件而往古以來全到者實年中漂五六之三以故運輸之國人物從盡檢領之島糧常全壹伎島司并習俗人民等習申云壹岐島者肥前等且恐犯人夜著岸對馬島上壹岐島又亦如之其潮落潮來不似他所而陸地人民不漂沒程枚蕩沒連踵溺死不絕者今謹檢故實延曆以往件年糧穀從六箇國遞送於壹岐島壹岐島受領轉漕於對馬島而大同以來已停廢伏以古人遠圖深達物理但令六國漕運猶未由救弊因檢文簿壹岐島課丁二千餘人並是半輸者也千人貢御油千人進府儲油并雜穀等又同島水田六百十六町而沒八十六步就中除百姓口分田并雜職田等之外死者口分并疫死口分國造田等一百餘町也今商量役十人丁營百町田其勢易於反掌停進府之雜物運對馬島年糧事又仗於人民假令停壹岐島所進雜油等令進六國停六國所運年糧令營壹岐島田租利害所返納稻二萬九千六百三十餘束即其支度用途載在別紙但返之可否利害難明因名彼島守賀茂直峯并練事書生等令陳利害勘之已訖於是公卿奏議曰臣聞聖人濟世以便物爲先明王馭民以制宜爲貴今行平所請上件二條漸欲省風浪運漕之費存封疆任土之規有以祥矣

壹岐之上(國志)

年糧の漕
貢進
博士醫師
檢損不堪
佃田等
防人
下部
田制
雜田
司職田

臣等伏以商量營水田充年糧事頗乖仍舊謀合權宜請試許二年先明息耗
合兩鄉一號一島事荷謂利公豈期膠柱請隨其所陳將以改置謹錄事狀
聽天裁奏可合兩鄉一號一島事荷謂利公豈期膠柱請隨其所陳將以改置謹錄事狀
言壹岐島營作田一百町其稔稻爲糴送對馬島以充防人年糧云云請停壹岐島
運糧之勞其年糧田百町地子島司依例勘從之延喜大膳式に諸國貢進菓子太
宰國云云壹岐等島所出之中擇好味者年中貢同式部式に凡云壹岐等國島
博士醫師者太宰准大學典藥生試才補任副勘藉狀言上省載季帳申官待考
漏叙內位其遷替皆以六年爲限其六國學生醫生皆集府下分業教習同主
稅式に凡檢損并不堪佃田賑給疾死等使程限壹岐對馬島等損田四十日不堪佃田
卅日賑給疾死并准不堪佃田凡壹岐對馬等國島驛子渡海送子各給食日稻四把
又驛馬死損云筑後壹岐等國十分許損一分同兵部式に凡壹岐對馬防人府官量
事差所部諸國百姓強健者作番令守臨時祭式に下部取三國下術優長
者伊豆五人壹岐五人對馬十人政事要略五十三卷に應行雜事五ヶ條事一應反進諸國雜田
二千三百六十六町九段五十二步其地子稻混合正稅事國造田四百一十一町五段
云筑前國六町筑後國十二町豐前國六町肥前國肥後國十九町日向國六
町壹岐島六町云一關郡司職田千八百卅町八段云筑前國六十四町豐前國二年筑

後國八十八町豐前國卅九町貞觀十三年豐後國廿八町元慶三年肥前國卅二町
二年豐前國卅九町貞觀十三年豐後國廿八町元慶三年肥前國卅二町
所注肥後國廿五町六段昌泰六年壹岐島八町寬平九年右得厨家云延曆十二年八月十三
日解僭案式條位田國造田采女田旅力婦女田賜田等未校之間輸也子田者檢乎案
內元慶六年八月廿五日下午民部省解僭大納言以上并諸道博士畿外无主職田地子
混合正稅又傳關郡司職田地子同混合正稅者又檢案內七年五月十三日下午諸問符
僭得厨家解郡司職田地子元來無主之間付他地子帳檢納厨家而去年八月廿五日
其地子稻可混合正稅之狀官符被下民部省即下符諸國已了今檢案內任權
官者每過半預榮符者每年兼倍其位田公廨田以乘田被宛行因茲諸國地
子頻稱減少厨家用途常以闕乏望請加舊納件地子以宛厨用者右大臣宣奉勅依請但
民部省符下知諸國早令返進者而年來地子帳加注大納言以上諸博士等職田仍
令民部省勘申其由云依大政官元慶六年符旨以大納言以上并諸道博士及郡司
職田地子可混合正稅省符下知諸國而依同七年官符令返進可以郡司田地子
可混正稅之狀符爰依載一符返進兩色其後未有改給依式履行者望請大納言以
上并諸道博士无主職田依元慶符早被下知抑以乘田地子宛年中例用度之遺
頗有其數然則前件等田徒爲地子田混納其輸於公有損爲厨无益重望返進件等田
地十稻混合正稅但關郡司職田之數隨時增減无定數者此據近年帳所令勘申至於

壹岐之上(國志)

くて此男は虎の有處を聞て行てみれば誠に鳥はる／＼とあひわたりたり麻の丈四尺ばかりなりその中を分て行てみれば誠に虎伏たり尖矢をはげて片膝をたて居たり虎人の香をかきてついひらがりて猫の鼠伺ふやうにてあるを男矢をはげて音もせて居たれば虎大口をあきて躍て男の上にかゝるを男弓を強く引き上にかゝるをりにやがて矢を放ちたれば願の下よりうなじに尖矢を七八寸ばかり尖矢を射出しつ虎逆さまに伏僵れてあがくをかりまたをつがひ二度腹を射る二度ながら土に射付て遂に殺して矢をもぬかて國府にかへりて守にかうく射殺しつる由いふに守かんじのしりて多くの人を具して虎のもとへ行てみれば誠に矢三ながら射通されたり見るにいとみし誠に百千の虎起てかゝるとも日本人十人ばかり馬にて押向ひて射ば虎何わざをかせむ此國の人一尺ばかりの矢に錐のやうなる鏃をすげてそれに毒をぬりて射れば遂には其毒の故に死ぬれども忽に其場に射伏ことはせず日本人は我命死なむをもつゆをしまさず大なる矢にて射れば其場に射殺しつなほ兵の道は日本の人にはあたるべくもあらずさればいよくいみしう恐しく覺ゆる國なりとておぢけりさて此男をばなほ惜み止めて勞はりけれど妻子を戀て筑紫に返りて宗行が元に行て其由を語りければ日本のおもておこしたる物なりとて勘當も免しけり多くの物ども祿に得たりける宗行にも取らす多く

○鎌倉代
壹岐守
文永の役

の商人ども新羅の人のいふを聞てかたりければ筑紫にも此國の人の兵はいみしきものにぞしける〔壹岐守宗行と云ハいつの比の人なるいまだ時代をたしかにかむがへず〔東鑑廿四卷〕建保七年壹岐守清重〔同四十二卷〕寛元一年前壹岐守泰綱〔同四十卷〕建長三年後藤守光時〔三十二卷〕壹岐守光村〔太平記廿七卷〕貞和五年須賀守清秀〔善隣國寶記上卷〕に龜山院文永十一年元ノ忻都伐日本入其疆還〔日本古記曰〕十月十七日九州早馬走馬告急事一來于六波羅曰去三日蒙古賊數萬艘到對馬國一官軍與之戰同廿八日筑紫飛脚急事使者來曰壹岐國爲蒙古人所奪取云云十一月六日飛脚來曰去月廿日以後官軍與蒙古戰於鹿島之磯奪取賊船一艘云云〔八幡聖童訓〕にも文永十一年九月九日云云大軍駐三浦島至對馬島獲島また〔同書後奇傳〕に領舟師二萬渡海征日本按對馬壹岐宜等島とあるも文永十一年の事なるべし至元九年は文永九年にあつたれば二年のたがひあれど是はつかはせしに盡く亡びてわづかに三人たすかりて返れりし由見えたれども是は弘安四年の事なれ〔舊記〕に文永十一年の事なり是等の事委くは〔筑前志一巻〕又〔對馬志上卷〕にもいへるを考ふべし

左衛門尉經高并御家人百餘騎射之蒙古亦射如雨守護代士卒多死明日經高自殺經高僕宗三郎馳報博多壹岐對馬殘破甚水陸諸路兵大至少貳大友白杵戶次松浦菊池原田小玉黨合十萬餘騎以逐蒙古十一月廿日挑戰山田次郎重基宅磨別當太郎賴秀以二百三十騎突入蒙古軍大戰死之松浦少貳原田敗績少貳子三郎左衛門景資及平四郎斬蒙古渠魁於是敵軍不整景資等亦云云弘安四年六月高麗

弘安の役

壹岐之上(國志)

賊船五百艘至壹岐對馬一殺一人島民隱山賊聞兒啼探刺殺人其惡無狀然後高麗船寄宗像沖蒙古賊船至壹岐已而著管崎前殘島志加島(曆代皇紀)に文永十一年十月異賊亂入壹岐對馬五日亡對馬十五日亡壹岐云云(興福寺年代記)に文永十一年十月六日蒙古國軍兵亂入壹岐對馬兩國合戰被疵死者不知其數(皇代略記)に文永十一年五月蒙古賊船著岸三萬艘(日蓮注書贊)に文永十一年十月五日申尅對馬西佐寸浦異國兵船四百五十艘三萬餘人乘寄來云云十四日壹岐島押寄守護代平田左衛門景隆等構城郭雖防戰蒙古亂入間景隆自殺二島百姓男或殺或擒女集一所徹手結付賊虜者無一人不害(一代要記)に文永十一年十月十三日異國軍兵亂入壹岐島同十四日彼島主護代庄官以悉被打取云云對島以前前(武藤少貳家譜)に資時(資時)弘安四年與蒙古戰於壹岐島前討死(東寺文書)に蒙古人襲來對島壹岐既致合戰之由覺兩所注申也早來廿日已前下向安藝彼凶徒寄來者相催國中地頭御家人并本所領家一圓地之住人等可令禦戰更不可有後怠之狀仍仰執達如件文永十一年十一月一日武田五郎次郎殿武藏守在列相模守在列(宗氏家譜)に永正九年成長與朝鮮通交約(歲二十五船(海東諸國記)に肥前州源義乙亥年遣使來朝書稱肥前州下松浦一岐州太守志左源義約歲遣一二船小二殿管下能武才(有)麾下兵稱志佐殿壹岐島云云唯多只鄉志佐代官源武主之戊子年受圖

源義 源武

源經 源重實

宗殊 源實

源正 三甫耶太

有羅多羅 豆留保時

朝聘應接 記所收

倭寇 日高氏

日高甲斐 守

書約歲遣一二船書稱一岐守護代官真弓兵部少輔源武古仇音夫鄉源經主之己丑年受圖書約歲遣一二船書稱上松浦鹽津留助次郎源經源重實丁丑年約歲遣一船書稱上松浦鹽津留松林院主源重實宗殊己卯年遣使來朝書稱一岐州上松浦鹽津留觀音寺宗殊約歲遣一船小干鄉呼子代官源實主之約歲遣一船書稱上松浦呼子一岐州代官牧山帶刀源實庚寅年源實子正遣使來朝書稱去歲六月父爲官軍先鋒而死于敵臣繼家業乃依父例館待云云護軍三甫耶太郎賊首護軍藤永繼子辛巳年受圖書來則賜米豆并十石司正有羅多羅又一名可文愁戒源貞乃三甫耶大郎之兄戊寅年受職司正豆留保時藤九郎次子庚寅年受職長子也三甫羅今來侍侍朝爲司正(諸國記)の文はなほ後にも引出ていふべし今引出たるも全文に(海東諸國記)朝聘應接紀)に三浦宴特送節度使使留浦時一度還時同一岐島以外諸會使留浦時一度路宴諸會使已下一岐以外人慶尙忠清道各一所對馬島人慶尙一所還時並同(明史)卷)に對馬壹岐諸島賊掠濱海居民(壹岐島日高家譜)に肥前國唐津岸嶽城主波多參河守家臣日高大和守資天文弘治之比爲大老職此時有三家老日高大和守之嫡子日高甲斐守喜有浦中務川添播磨守是也城主三河守卒而無男子此時依養子之事大臣不和參河守時信之後室新芳毒殺日田大和守(甲斐守大怒)之於是養子之談不成新芳日高家中二分爭戰不斷永祿十二年十二月歲暮夜中甲斐守戰負

壹岐之上(國志)

對馬の賊 宗氏壹岐 松浦壹岐 大櫛 神社 調 正稅等 驛馬 郡 石高

遂下岸嶽城夜中乘船渡壹岐島其夜趣討亡波多政二移住龜丘城其後甲斐守爲人質送女子於平戸一屬松浦家其女子則松浦又三郎信實室也天正十四年丙戌七月十七日對馬兵船寄來海邊日高氏討亡之文祿二年正月七日於朝鮮漢南大軍圍甲斐守一甲斐守戰死而無實子石志三九郎因爲綠者繼日高家日高玄蕃重也日高家はもと紀州日高郡の一城主なり故日高氏とす其後歴前に下れりさて甲斐守が靈八幡社内にすむよしも「家系」に見えたり其事後に引出て云べし「宗氏家譜」に天正十四年二月壹岐賊船侵伊那郡一州兵迎戰破之鍵川村一同年三月義調遣島和美濃梅野大藏佐奈豊左馬吉田左衛門儀主膳久和左近中原修理内山隼人主藤左衛門八幡勘太郎原田近八高山善右衛門惣島近右衛門米田次郎左衛門等攻壹州我兵多戰死不利而返「武鑑」に松浦壹岐守柳間朝六万七千七百石居城肥前松浦郡平戸當國平戸并壹岐國差出之高松浦氏代代領之など見えたりさて國の大櫛は「神祇式」に壹岐島廿四座大七座小「延喜民式」に壹岐島下石田壹岐「同主計式」に壹岐島海路三調大豆二十三斛小豆十一斛小麥二十斛自餘輸海石榴薄鯨同主稅式に壹岐島正稅一萬五千束公廩五萬束修理池溝料五千束救急料二萬束又「主計式」凡諸國輸岐對馬等島並不輸とも見えたり輸府は府布の類同「兵部式」に壹岐島驛馬備通各「和名抄五卷」に壹岐島管二万束木額九万束雜額二万五千束壹岐石田伊之太「拾芥抄下卷」に壹岐下二郡壹岐石田府田六百「和漢三才圖會八十卷」に壹岐島高一萬五千九百八十二石

土產 魏志里程

郷名 里名 浦名

廣業 產者原 長者原 花紋石 櫻苔 屏風岩

餘「同書」に壹岐島土產綾布海栗小貝鱒魏志倭人傳に云云千餘里至對馬國云云又南渡二里に於て六町を一「海東諸國記」に一岐島郷七水田六百二十町六段人居陸里十三海浦十四東西半日程南北一日程志佐佐志呼子鴨打鹽津留分治有市三所水田旱田相半土宜五穀收稅如對馬このついでに文は初にも引出たり又後にもその處々に引出べし又里名浦名など凡其名のみをつみ出てこの次にあげたりはひとわり見わたすにやすからしむむがためなりくはしきこととは後に引出せしむるに引出しあけつらひもすると考ふべし七郷加愁郷唯多只郷古仇音夫郷小千郷無山都郷時日羅郷郎可五豆郷十三里波古沙只一百五信昭干七十侯加伊一百三阿里多五十愁未要時七十伊除而時一百也那伊多三百也麻老夫九十牛時加多一百三多底伊時九十毛而羅五十侯計八十戸應口五十十四浦ハ世渡浦三十豆只浦二十仇只浦二十因都温而浦四十阿神多沙只浦四十火知也麻浦一百毛都伊浦一百訓乃吉時浦四十臥多羅浦二百無應只也浦十仇老沙只浦二十干羅干米浦五十風本浦後訓問抄など見えたり又「壹岐島圖」に東西七里南北或三里或二里とあり島中田地すくなく島民多く魚鹽をもて産業とす「扶桑記」に壹岐島に長者原と云處あり海邊なりその石温石の如くにやはらかなりさて是石をさくに唐人の形また禽獸草木并花の形多し鯉鮒の形など恰も眞の如し諸物の形も皆よく似たり日本人の形はあることなし「大明一統志」に花紋石は南平縣出、色赤紋紫有山水禽魚形狀、可爲硯、屏とあり壹岐島、の石は花紋石なるべしと見えたり長者原と云は何れの郡の内なるか、いまだかむがへず、「倭本草」に壹岐島海岸に櫻苔と云もの産す其色紅白似櫻花、片片相屬浸酸鼓、而食之脆鬆而潔清味亦佳「井澤氏云」壹岐島長者原の海岸に屏風岩と云石あり其石黃褐なり其

壹岐之上(國志)